

SOCIAL INNOVATION SUMMIT 2015

ソーシャル・イノベーション・サミット2015

ソーシャル・イノベーション・サミット2015 開催結果報告書

京都市・京都市ソーシャルイノベーション研究所（S I L K）

目次

1	はじめに	3
2	開催概要	4
3	1日目（平成27年12月17日（木））	6
	（1）成果発表（同志社大学ソーシャル・ウェルネス研究センター）	6
	（2）シンポジウム「ソーシャル・イノベーションによる地方創生」	14
	（3）3自治体による事例発表	32
	（4）ワークショップ	60
	（5）交流会	60
4	2日目（平成27年12月18日（金））	66
資料1	ソーシャル・イノベーション・サミット2015 アンケート集計結果	68
資料2	自治体アンケート集計結果	78
資料3	広報活動	84
資料4	開催までの経過	88

1 はじめに

本報告書は、平成 27 年（2015 年）12 月に開催した「ソーシャル・イノベーション・サミット 2015」の講演録と各種資料を収録したものです。

「ソーシャル・イノベーション・サミット 2015」は、平成 26 年 12 月に発表した「京都市ソーシャル・イノベーション・クラスター構想」に掲げられた主な取組の一つです。日本の歴史文化が凝縮された京都から、京都市ソーシャル・イノベーション・クラスター構想の考え方や取組内容を全国に波及させ、行動の輪を広げるため、ソーシャルビジネスに関心を持つ自治体や社会的企業が京都に一堂に会し、様々な実践事例を共有し、全国に発信することを目的に掲げました。

東京一極集中の打破など我々が対面している様々な課題の解決のためには、京都だけでなく、様々な地方自治体と手を携えさせていただきながら、それぞれの都市特性に応じて地方創生に取り組むことが必要です。今回のサミットでは、26 都府県 57 市区町村から参加いただき、多様な方々と繋がりあうことで、新たな一歩を踏み出すためのネットワークを形成することが出来ました。

その成果を、全国で地方創生やソーシャル・イノベーションの創出に取り組む方々と共有することを目的に、今回のサミットの講演録と各種資料を取りまとめました。そのため、講演録は可能な限り当日の発表内容を収録し、全国自治体におけるソーシャル・イノベーションの創出に向けた取組状況、サミット開催に向けて取り組んだ経緯なども収録しました。

今回のサミットを契機として、全国でソーシャル・イノベーションの創出に向けた取組が加速することを祈念しております。

2 開催概要

(1) 会場

同志社大学 今出川校地 室町キャンパス 寒梅館
(京都市上京区烏丸通上立売下ル御所八幡町 103)

(2) 対象

ソーシャル・イノベーションに取り組んでいる、関心がある自治体や企業、市民団体、NPO の方をはじめ、地域や社会のために何かをしたいと考えている方、そのための出会いを求めている方など、本サミットに興味をお持ちの方

(3) 参加者数・属性

①参加者数

12月17日	ソーシャル・イノベーション・サミット	207名
	交流会	93名

12月18日	社会（化）見学	
	・風伝館コース	11名
	・KYOCA コース	40名
	・ソーシャルプロダクトマップコース	16名

②属性

自治体職員 28%, 企業関係者・個人事業主 22%,
NPO・公益団体関係者 22%, その他（大学関係者、学生、個人等） 28%
26都府県 57市区町村からお集まりいただいた。

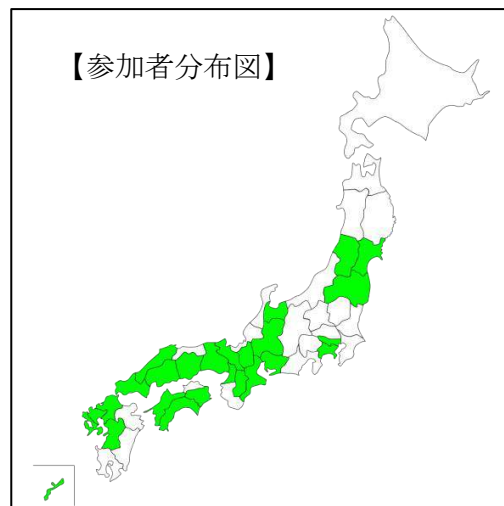
(4) 参加費

無料

ただし、以下のプログラムについては有料

1日目交流会（立食形式）	3,500円
2日目企業訪問「社会（化）見学」	1,000円

【参加者分布図】



(5) スケジュール

1 日目 [12 月 17 日 (木曜日)] : ソーシャル・イノベーション・サミット

[第 1 部]

- 13:00-13:10 開会挨拶 今川晃 同志社大学政策学部長
- 13:10-13:30 成果発表 同志社大学ソーシャル・ウェルネス研究センター
- 13:30-14:50 シンポジウム「ソーシャル・イノベーションによる地方創生」
- 15:00-16:00 3 自治体(新庄市, 倉敷市, 仙台市)による事例発表

[第 2 部]

- 16:00-18:00 ワークショップ「地方創生のためのソーシャル・イノベーション実現のためのアイデア形成」
＜企画進行＞ 西村勇哉 NPO 法人ミラツク代表理事

[第 3 部]

- 18:30-20:30 交流会

2 日目 (12 月 18 日 (金曜日)) : 企業訪問「社会 (化) 見学」 Social Change Studies

- 10:00-12:00 ソーシャル・グッドな企業や取組の視察

①風伝館コース

日本を代表する社会的企業であるアミタグループの歴史や事業内容が展示される風伝館で, (公財) 信頼資本財団の熊野理事長に講演いただいた。

②KYOCA コース

リノベーション施設 KYOCA の視察や大学生, 行政, 企業が集いビジネスアイデアを練り上げる RELEASE;について紹介した。

③ソーシャルプロダクトマップコース

社会貢献型の商品やサービスを提供する事業者をマッピングしたソーシャルプロダクトマップの作成方法を解説した。

(6) 主催等

- 主催 京都市, 京都市ソーシャルイノベーション研究所
- 共催 同志社大学ソーシャル・ウェルネス研究センター, NPO 法人ミラツク
- 後援 同志社大学総合政策科学研究科

3 1日目（平成27年12月17日（木））

【講演録】

（1）成果発表（同志社大学ソーシャル・ウェルネス研究センター）

今里 滋 氏

同志社大学ソーシャル・ウェルネス研究センター センター長

同志社大学大学院総合政策科学研究科 教授



みなさん、こんにちは。師走のお忙しいところ、全国津々浦々から京都においでいただき、また同志社大学のこのハーディホールを利用していただきありがとうございます。ただいまご紹介預かりました、同志社大学ソーシャル・ウェルネス研究センター長の今里でございます。同志社大学ソーシャル・ウェルネス研究センターは 2014 年度まで 5 年間、ソーシャル・イノベーション研究センターという名前でございました。本当はその名前で継続したかったのですが、同志社大学の規則で、大学付属研究センターの存続期限は 5 年以内になっておりますので、やむなくソーシャル・ウェルネス研究センターにしたという次第です。

本日はパワー・ポイントを使ってお話させていただきたいと思います。約 60 枚のスライドを 15 分程度で話さないといけませんので、かなり早口になるかと思いますが、また後でゆっくり“巻き戻して”思い出してもらえたらと思います。

まずは私の自己紹介からさせていただきます。九州からお見えになった方おられると思いますけど、私は 2003 年まで九州大学法学研究院の教授でございました。九州大学を辞めましたのは福岡県知事選挙に出馬したからなんです。2000 年を過ぎた頃から、容量限界に達しつつある福岡空港に代替する新空港を建設しようという計画が現実味を帯びてきました。その当時の福岡県知事が先頭に立って計画を進めていたわけですが、私は、これはけしからん空港である、空港よりもホンネは公共工事が欲しいがための計画に他ならないということで、「いらんばい新福岡空港」、「借金残すな、海残せ!」というスローガンを掲げて、現職知事を落選させるべく、九大教授の職を辞して立候補に踏み切ったというわけです。結果は 72 万票対 112 万票で負けたんですけど、空港計画は白紙になり、立候補の目的は達成することができました。でも職を失ったので、ここにいる新川先生らがですね、大変寛大なことに、同志社大学大学院総合政策科学研究科教員公募に応募しないかと声をかけていただき、審査を経て 2003 年 10 月から同志社大学の教授になり今日に至るというわけです。

私は、九州大学在職時代から、私の言葉で言う様々な「市民公益事業」を手がけて

参りました。NPO 管崎まちづくり放談会という団体が私の活動ベースでした。そこで、例えば、「命と食と農をつなぐコミュニティ・レストラン管崎公会堂」を営んだりしました。有機無農薬の野菜や無添加の調味料を使うレストランですね。15 階建てマンションの 1 階にある管崎公会堂は私が実家の土地を売った代金から 2600 万円を投じて建設しました。おかげで、今でも“NPO 貧乏”に苦しんでおります。しかし、こうした体によい食べ物を提供するレストランをやっていると、いいこともありました。子宮内アトピーのために医者から「あんたは絶対子ども産まれんばい」と告げられた女性に赤ちゃんが生まれたりという、奇跡的なことも起こりました。これが、そのご夫妻の写真ですね。こういうレストランは材料費がかかるので経営は大変でしたが、他人様の幸福に貢献できたという点では、やりがいがありました。

それから、1 株 5 万円の株券 200 枚を発行——実際は、友人知人に酒を飲ませて無理矢理売りつけて——市民株式会社方式の「まちなか劇場テアトルはこぎき」というシアターを、「表現によるまちづくり」を实践しようという趣旨で、管崎公会堂の前に建設しました。

さらに、おそらく日本初と思っていますが、地域密着・協働型のカーシェアリング事業も立ち上げました。これは、福岡市と九州電力が出資し、私どものまちづくり NPO と環境 NGO が NPO カーシェアリング・ネットワーク——私がその初代理事長——を設立して実施主体になり、電気自動車を使ったカーシェアリング事業でした。ネットで予約し IC カードで無人機からキーを受け取るという先進的システムでしたが、九州電力が事業から撤退したこともあって、やがてマツダ・レンタリースに事業を売却しました。今はカーシェアリング全盛の時代になってきましたが、その先駆けになれたのではないかと思います。

あと「都会と田舎をつなぐ“いいなか”事業」も行って、都市農業交流事業や市民有機農業者を育成する上山田農楽校を設立したりもしました。（農楽校は、現在も絶賛継続中です。）

2005 年のことですが、文部科学省の「平成 17 年度魅力ある大学院教育イニシアチブ」という公募事業に大学院総合政策科学研究科として応募しようということになりました。当時の研究科長が、ここにおられる新川先生でした。新川先生とは、若い頃から日本行政学会を通じた旧知の仲であり、新川先生ご自身様々な NPO の理事や理事長を歴任されていますから、私とは大変波長が合うんですね。それで、「地域社会に生起する具体的な公共問題を解決できる実践能力を兼ね備えた行動型研究者」を育成する「ソーシャル・イノベーション研究コース」創設で応募しようという意思一致しました。

厳正審査の結果、採択に至りました。この競争的資金は 2 年間で約 1 億円（!）。しかも、珍しく物品費にほとんど制約がありませんでした。ということは、どんどん買えということです。そこで、これは買ってやろうということでトラクターとかおくどさんとか、もう色々買いましたね。3 カ月で 5 千万円使いましたが、それはそれで大変でした。

ここで、「ソーシャル・イノベーションとは一体何か」ということに言及しておか

なければいけません。簡単に言いますと、「この世の中を天国にする人間の営為や努力」と私は考えております。みなさんの中ですでに天国いらっしゃった方おられますか？おられませんよね。誰でも天国行きたいとは思いうけど、すぐ行きたいと思いませんね。現世は、天国と地獄の中間にあると思います。この世を天国にするか、地獄にするかは、これはもう人間の心がけ次第、努力次第ということになります。そのような心がけ、つまり意識を醸成し、現世の天国化に向けた営みを継続していくプロセス、それがソーシャル・イノベーションだと私は思っております。

同志社大学大学院総合政策科学研究科ソーシャル・イノベーション研究コースの特色の一つはリカレント教育にあります。「ソーシャル・イノベーション」をキーワードに、実践的な学びを通じて人生の価値と課題を見出して豊かで幸福なキャリアを發展させ社会に貢献するような人材を育成するということです。仕事はもう退職して辞めたけども、でもまだ何か納得がいかない、なんとか社会貢献で自分の人生を充実させたい、と思っておられる社会人の方がたくさんいらっしゃいます。そういう方のためのリカレント教育がこのコースのミッションの一つだと思っております。実際、社会人院生の数が大変多く、現在の最高齢は76歳。平均年齢は40歳を超えています。

もう一つの特色は、高度専門職業人、つまりプロフェッショナルの養成です。どのようなプロフェッショナルかと申しますと、いわゆる社会起業家、社会的企業やNPOの経営者、市民公益事業者、公務員といった、公益実現を仕事のミッションとする方々のキャリア形成をお手伝いするということです。

そして三つ目はソーシャル・イノベーションの研究者の養成です。様々な分野を横断しながらソーシャル・イノベーションの理論と技法を開発して発信し、さらに教育者ともなって人材を育成していくような人材を輩出することも大学院としての重要なミッションです。すでに、ソーシャル・イノベーション研究コースで博士学位を取得し、大学で教鞭を執っている修了生も何人かいます。

私どものソーシャル・イノベーション研究コースの標準的なカリキュラムはこのようなになっています。このカリキュラムの特徴は、地方自治論とか公共選択論といったいわゆる座学に加えて臨床系科目があることです。たとえば現代有機農業研究という科目では実際に圃場に出て春夏秋冬の野菜栽培や土壌・肥料作りを学びますし、自立自給型生活研究という科目では、持続可能な生活や社会のあり方を哲学的に考察しつつ、味噌、醤油、炭、納豆等の基本食品の製法を実習します。ソーシャル・イノベーターというのはいわば社会の病気を治すお医者さん。医者になるには、医学理論と臨床研修の両方を修めなければなりません。ソーシャル・イノベーターとなるには、教室で教えてもらったり研究室で本を読んだりするだけではなく、問題が起こっている現場に行って関係者の話を聴いたり、調査をしたり、あるいは自分で活動を経験してみることを通じて得られる実践知を身につけることが大事です。

すでに100名以上の方がこの前期課程および後期課程のカリキュラムを修了しておられます。ソーシャル・イノベーション研究コースに入学してくる方の研究テーマというか解決しようという社会的課題は実に様々です。例えば、京都でも老舗の瓦工務店の経営者の方は、社会から脱線しかけている青少年をベテラン職人と組ませて現

場に行かせて、共に働くことを通じて社会で働いて生きることの意義を理解させる研究を行いました。あるいは盲聾者に就業の機会を与えるためのマッサージ施術所を同志社大学のフィットネス施設に開いた方もいます。どちらも、青少年問題とか障がい者の就労問題を、こうすれば解決するのではないかという仮説を立て、その仮説を自分で準備し実行するプロジェクト——これを社会実験と呼んでいます——を通じて証明するというプロセスを経て、研究成果を出しています。

そのような社会実験を行う施設というのは大学やキャンパスの中にはありません。じゃあせつかく1億円もらったんだから、院生が気兼ねなく社会実験を行える施設を創ろうじゃないかということで、二つの学外社会実験施設を設けました。一つは、京町家を改装した社会実験施設で、江湖館と命名しました。これは、京都御所南西の衣棚通丸太町下ルにあります。築約100年の、元々法衣店を営んでいた町家を改装しまして、わがコースでは食とか農に重点を置いていますものですから、今では京都市内の町家でもほとんど見るものがなくなった、薪でご飯がたける「おくどさん」も新設しました。電気釜で炊いたご飯しか食べたことがない子どもたちは、少しお焦げの香りがする薪で炊いたご飯に素直に感動します。また、この江湖館では、自ら綿を育てて、綿を紡いで糸にし、衣服を自分で手作りしていく、「ソーシャル・クローズ」の実験を重ねて、立派な論文を書いた院生もいました。彼女は今は龍谷大学政策学部の准教授になっています。町家にはつきもののこういう蔵もあります。蔵の二階を改造してUストリームでの番組制作と発信ができるスタジオを作りました。このスタジオを使って、3.11東北大震災で大量の原発事故避難者が発生したわけですが、その被災者の支援問題を、世界各地で起きている難民問題とリンクさせて、「潜在的難民」という新たな視点から、このスタジオでの様々な関係者とのダイアログを通じて、考えるユニークな社会実験を行った院生もいました。この写真は、同志社大学政策学部の私のゼミ生たちが、ハロウィーンの時に、子どもたちを対象に一生に遊ぶイベントを行っているところです。楽しそうでしょう？

もう一つの社会実験施設は、京都市左京区の大原にあります。ここで、築24年経った有形文化財の藁葺きの農家と7反ほどの農地を借り受けました。共に農に係わることで人々の間に絆が生まれるようにと念じて農縁館と命名しました。ここでは、大学院生が住み込んで、自らを有機農業者に育成することをテーマとして研究を行っています。また、ここを拠点に一般市民を対象とした同志社有機農業塾も始めました。講師は、自らソーシャル・イノベーション研究コース博士前期課程の修了生でもある長澤源一さんです。京都市右京区太秦で室町時代から17代続く農家を営んでおられます。スローフード世界大会「テッラマードレ」に3回続けて講演に招請されたほど国際的にも有名な、わが国を代表する有機農業者です。この“長澤門下”から現在まで約30人ほどのプロないしセミプロの有機農業者が輩出しています。この中には、以前は呉服屋さんや学校の教師からの就農者も含まれています。

農縁館で約10年間継続しているプログラムとして、「食育ファーム in 大原」があります。これは、3歳から10歳くらいまでの子どもを対象に、食や農を研究テーマとする院生が、野菜の有機栽培や野菜の調理法を教え、みんなで収穫してみんなで美味

しくいただくというものです。長澤有機農法は土で味付けしますので、味覚が急速に発達する年齢の子どもたちは「よい土が野菜の美味しさに直結する」ことを体験していきます。

以上のような大学院ソーシャル・イノベーション研究コースから巣立ったソーシャル・イノベーター達を何人かご紹介したいと思います。

一人は三田果菜さんといって、新川先生のお弟子さんになります。後期課程も卒業して博士号を取得しています。彼女は元々美容師の国家資格を持っていて、美容技術によって人をエンパワーする「ハッピー・ビューティ・プロジェクト」ソーシャル・ビジネスを営んでいます。とくに、化学療法を受けて容貌に自身が持てなくなったがん患者さんに、特殊なメイキャップやかつらを使って、容貌を修正し、自信を持って外を歩けるようにするわけです。結構有名になって、台湾とか韓国からも引き合いがあるそうです。

もう一人は渡辺雄人君です。長澤講師の指導の下、有機農業者を目指した最初の大学院生です。元々東京のSEの会社に就職したんですが、合わないって戻ってきて大学院に入学しました。研究テーマの相談を受けたときに、私が「君は顔が農業向きだから有機ファーマーになりなさい。」と勧めると、「はい！」と素直に聞いてくれました。彼は今京都の若手農業者ではNO. 1と言ってもいいのではないかと思います。彼の年収はいくらだと思いますか？売り上げではなくて、年収ですよ。何と自称1200万円ほどだそうです。交通費も食費も服飾費もほとんどかからない自営農家の1200万円はサラリーマン世帯の2倍以上の価値があるのではないのでしょうか？和食のメッカ、京都では、いい野菜作ると必ず売れます。彼の功績は自らを有機農業者として成功させたことにとどまりません。彼が就農した京都左京区大原地区は、ソーシャル・イノベーション研究コースが農場を開いた頃は、ご多分に漏れず過疎化、高齢化が進み、耕作放棄地だらけという地域だったのですが、渡辺君の作る有機野菜が高値でどんどん売れるものだから、Uターンや新規就農者が増え、今は土地が足りないほどです。若い住民が増えたことで子どもの数も多くなり、ずっと前に閉園していた保育園が再開するほどになりました。今や、大原は有機農業の里として、多くの客を集めています。まさに、有機農業によってソーシャル・イノベーションが実現したわけですね。

この写真に写っているのは、渡辺君に次いで有機農業のプロとしての自立を目指している藤岡良君です。彼は福岡県の非農家出身です。農業と無関係な家庭出身の学生でも、①農地がある、②よき指導者がいる、そして③売り先があるという3条件を満たせば、プロの自営農になれるというのは、私の仮説でもあります。私は渡辺君や藤岡君を使って、私自身の社会実験をしているのかもしれませんが。

武田雅代さんという、専業主婦の大学院生がいます。彼女の研究テーマは、「ソーシャル・ママ・プロジェクト」です。ごく普通の専業主婦でも、何か他人や社会の役に立ちたいという志を持ち、その志を実践に移せば、社会を変えることができるという仮説を実証しようとしています。その仮説実証の社会実験として武田さんが実践しているプロジェクトの一つは、大阪にある児童養護施設があるんですけど、そこにず

っとボランティアで入って、ママ友に声をかけて定期的にバザーを開いたり、学習塾と組んで学習支援をしたりしています。こうしたボランティア活動に参加したママたちは、社会貢献活動の楽しさ、おもしろさに目覚めていき、自らソーシャル・ママになっていきます。専業主婦のママは日本の至る所にたくさんいるわけですから、武田さんの社会実験は普遍的なロールモデルを作ることにもつながります。そんなわけで、私は、「武田さん、あなたがソーシャル・ママになることで日本中にソーシャル・ママが増えたら、社会は変わるよ！」と目下修士論文執筆中の彼女を励ましているところです。

最後の例は、プロの猟師になった大学院生の兵田大和（ひょうだ・ひろかず）さんです。現在、シカやイノシシによる獣害の被害は急激に広がっていますが、その一方で、狩猟免許所持者、とくに銃猟の免許を持っている人は、激減しています。有害獣駆除は、主に各地の猟友会が担ってきましたが、猟友会自体が高齢化や会員減が著しく、猟友会同士の確執があったりして、獣害対策のガバナンスにたくさんの課題があります。そこで、単なる獣害“対策”ではなく、人間界と動物界のマクロな関係を適正な方向にコントロールしていくワイルドライフ・マネジメントという総合的なプロジェクトが必要ではないかということで、兵田さんはこれをテーマにしています。元々有名上場企業で人事畑の仕事をしていた人で狩猟とは何の関係もなかったのですが、アウトドアが好きだということを耳にした私が、単刀直入に「猟師になったら？」と勧誘し、今では年に何十頭も主にシカを捕獲し、ジビエにするプロ猟師になっています。

私が担当する同志社大学政策学部のゼミでは、学生にイノシシの解体法を実習させたりしています。兵田さんに狩猟を勧めて、自分は手をこまねいているのは気が引けますので、私も昨年に狩猟免許と銃所持許可を取得しまして、今年の猟期から銃猟を始めました。しかし、じじいの初心者ということもあって、いまのところ、鳥や獣にバカにされっぱなしです。この前など、40メートル先のカモに逃げられました。そのカモが禁漁区の池では目の前で悠然と泳いでいます。どなたかベテランハンターの方がいらっしゃったら教えを乞いたいと思います。どうもご清聴ありがとうございました。

新川 達郎 氏

同志社大学ソーシャル・ウェルネス研究センター 副センター長

同志社大学大学院総合政策科学研究科 教授



それでは、今里先生のような楽しい話にはならないんですが少し真面目に何でソーシャル・イノベーションをやったのか、そして今のソーシャル・ウェルネス研究所センターって名前に変わっておりますが、何を目指してるのかという事について少しだけお話させていただいて終わりにしたいと思います。

ソーシャル・イノベーションコース（註1）は今、今里先生から事例を含めてお話いただきましたけど、基本はやはり地域や社会の色々な問題をこれまでにないやり方で解決していこうとするもので、問題解決のためにこれまでにない目的へと組み立て直して、そしてそれを実現する方法もこれまでとは違う革新的な方法で解決していこうとしています。それがソーシャル・イノベーションという事ですし、それを今日本社会全体であるいは世界中で進めようとしているのがこのソーシャル・イノベーション・サミットにも共通する考え方だと思っています。

私たちはそれを大学院のコースの中で実現しようとした風を考えてきました。ですから、そのための大学院コースとしては必要な知識や技術、それを身に付けられるようなそういう研究の場をつくらないといけないということで進めてきたわけがあります。そうした中で今ご紹介がありましたように、一方では学部からそのまま上がってきた大学院生は社会との接点を一生懸命持ちたい、そしてより良い社会にしたい、そういう気持ちで入ってきてくださいますし、それから、社会人の方々の中で色々な想いをもちながら社会人生活を送る中で自分自身こんな夢をこんな理想を実現したい、そういう社会との接点を持っている方々、こういう方々が沢山参加をしていただいて実践とその理論化の場を創ることが出来ました。これが今私たちが実現してきたソーシャル・イノベーションコースであります。

そしてこのコースはただ単に大学院の学位課程を修了するということではなく、実はこの実践と理論を総合していただいた大学院課程での学びを終わって頂いた後、その実践を自分自身のキャリアにしていっていただく。大学で折角創り上げた学びの成果というのを将来の自分自身のいわば生業にしていっていただく、それを願っておりますし、そうなってる方々もいらっしゃいます。勿論失敗例も山ほどありますけどね。

さて、そういうソーシャル・イノベーションというのを何故ソーシャル・ウェルネスに変えたのか。今里先生曰く、同志社大学ではこうしたセンターは5年間で名前を変えよということだったのでという理由でございましたがもう少し積極的に考えた

いと思っています。ソーシャル・ウェルネスとは、つまり社会の元気、社会の健康、そして社会の活力です。これをどういうふうに作っていくのか。その元になるのはやっぱり社会の革新があつてその革新を社会の元気に繋いでいく。いわばソーシャル・イノベーションを次のソーシャル・ウェルネスの研究センターにした意味というのはここにあるというふうに思っています。ソーシャル・イノベーション・サミットもソーシャル・イノベーションということを広げたり、ソーシャル・イノベーションということを起こしたりということではなくて、それが結果的にこの社会をより良い社会に、住みやすい社会に変えていくということが目的だと思っています。健康で心豊かな社会をどう作っていけるか、いわばイノベーションを基礎にウェルネスな社会を実現していきたいというふうに思つて、このセンターを立ち上げてきているところです。

さて、私たちのこういうソーシャル・イノベーションについては是非勉強してみたい、あるいはどんなことをやっているのか知りたいという方には、実は今度の日曜日に、これは宣伝であります、「ソーシャル・イノベーションが開く世界」と題しまして同志社大学烏丸キャンパス志高館で入門講座を行います。資料代程度で参加できますので是非ご参加いただければと思います。

そこでは先ほどお話しましたように、このソーシャル・イノベーションというのを考えることで一体何が出来るのか。どのようにすれば革新的にそれぞれの想いを形に、夢を現実に、できるのか。そして自分自身の可能性やネットワークをどう広げていくのか。実際に仕事をしながら社会課題をどんな風に解決していったらいいのか。その仕事そのものをより社会の役に立つ仕事にどんな風に変えていったらいいのか。新しい社会の在り方に関して色んな事をやってみないと皆さん考えてこのソーシャル・イノベーション・サミットにお集まりだと思いますけれども、それを少しでもお手伝いできるような、そういう場を大学でも作りたいというふうに思っているところです。是非ご関心の方はチラシも受付に置いておりますのでご覧いただけたらと思っております。次のスライドをお願いします。こういうチラシでございますので宜しくお願い致します。私からは宣伝も兼ねて、そして私どもソーシャル・イノベーションコースのご紹介をさせていただきました。どうも有難うございました。

註1. コース名は 2012 年度に「ソーシャル・イノベーション研究コース」から「ソーシャル・イノベーションコース」に変更。

(2) シンポジウム「ソーシャル・イノベーションによる地方創生」

登壇者

門川 大作 京都市長
井上 英之 慶應義塾大学大学院 特別招聘准教授
一般社団法人 INNO-Lab International 共同代表
京都市ソーシャルイノベーション研究所 アドバイザー
大室 悦賀 京都産業大学経営学部 教授
京都市ソーシャルイノベーション研究所 所長



大室：はい、皆さんこんにちは。全国からお集まりいただきまして有難うございます。26都府県からお集まりいただいています。今里先生、新川先生からお話がありましたソーシャルイノベーションということをテーマにしながら今日、明日とお付き合いいただければなと思っております。

最初に僕の方から、この二日間の中で一点だけお願いがあります。今まで皆さんは色んな知識、色んな経験を沢山お持ちだと思います。でもそれを今日二日間だけはちょっと脱いでいただいて、今までの経験とか考え方を一回捨ててほしいなというふうに思っています。今日明日で行われるものを主観的に捉えてください。頭で分析をしないで非常に主観的に捉えてください。何でそんな事を考えるんだろうと分析をするのではなくて、面白いな、面白くないな、わくわくするな、わくわくしないなというふうに、主観的に捉えてほしいな、と思います。今まで皆さん沢山分析されて色んな知識を創られて、日本、あるいは世界というものが作られてきたわけですが、そ

れが上手くいっているところと、上手くいっていないところがあります。その上手くいっていないところを「どうすればうまくいくのか」について、これから話し合おうとしています。ですから、分析をされずに、主観的に、感覚的に捉えていただけたらと思います。

この後、市長と井上さんにお話していただきますけども、理解はしないでください。理解しないと皆困りますよね。頭の良い方ばかりなので。理解をせずに感覚的に捉えていただくと、明日、ちょっとモヤモヤとしたことが頭の中、心の中にあると思います。

今日、京都市ソーシャルイノベーション研究所のスタッフがお世話させていただきますけども、「きちっとするな」というのがスタッフに向けてのテーマです。それは違和感を持ってほしいからです。色んな違和感を持ち帰りいただきたい。その違和感をずっと持っていて下さい。そうすると、その違和感を解決してくれる人と出会います。それがネットワークだと僕は思いますので是非そのようにしていただきたいなと思います。

まず、昨年の12月に、京都市ソーシャル・イノベーション・クラスター構想というカタカナだけの構想を作ったのは何故かということを、門川市長の方からお話いただけますでしょうか。その後、井上さんに、なぜ今、ソーシャルイノベーションが、日本だけでなく、世界中で使われ、必要とされているのかをお話いただければと思います。では市長の方から宜しくお願い致します。

門川：こんにちは。門川大作です。主観で聞いて下さいね、ということなんですね。素晴らしいなと思いました。

私は8年前まで京都市の教育長をしていました。当時、教員の採用試験も、学校の入学試験も、評価は客観評価が大事だといわれていた。客観性、客観性ばかり言われていた。その極みの一つが偏差値ですね。人間の評価に客観性をもたすということで、とうとう偏差値になっていきました。

けれども、私は人間を主観で評価しようと、教員採用試験も2〜30年前から全員面接を実施しました。そしてペーパー試験も実施しました。全員面接は「この人はいいい先生になりそうか、どうか」という主観で評価しています。評価にはPTAの代表、経済界の代表、地域の代表に入ってもらう。その代り三年後に評価者を評価する。この時に大事なのがもう一つ。後から主観に客観性があるかどうかは自ら検証してもらおうということ。主観で考える・感じる、それが大事。世の中良くなっても、衣食住足りて不幸せになることもあるわけだから、主観が大事だと思っています。



ソーシャル・イノベーション・クラスター構想ということですが、カタカナばかりの構想であります。4,5年前から大室先生にお世話になりました。新川先生や色々な人にお世話になりました。今里先生、私の近所でよくお会いします。皆さんのおかげでまとまった構想なのです。

この構想を考えるときに、京都の最大の魅力について考えました。歴史都市、文化都市、文化芸術都市から宗教、自然との共生、京都にはあらゆるまちの特性があります。しかし究極、突き詰めれば地域力であり、それを支える人々の人間力が一番の魅力です。京都は1000年を超えて都でした。従って藩士はいない。殿様はいないという不思議なまちですね。商売人さん、お寺、神社、町衆が古くから自治をしてきた。都であるがゆえに町衆が自由に色々な事をしてきた、そういう不思議な自治のまちです。

そういう京都のまちが色々な危機にあう。まあ一番最近の危機といたら、明治維新です。その時人口が33万人から20万人余りに激減した。今、日本人が経験したことない人口急減を経験し、日本のまちの半分がいずれ無くなると言われている。その通りです。でも京都は既に150年前に人口が激減した経験がある。「京都はもうキツネやタヌキの住処になるだろう。」と150年前に言われた。

しかし私たちの先人は何をしたか。子どもさえ地域の宝としてしっかり育てれば未来は明るい。学校を創ろう、ということで64の小学校を「かまど金の精神」で作った。かまどのある家は学校設立のお金出そうということで、かまどの数ごとにお金を出し合った。例えば、大室先生はお金持ちだから六つ、七つかまどがある。だから、あなた六口お金を出す。私とこは一つや、私は一口お金を出す。そういう風に、皆がお金を出す。そして学校銀行を創り、運営する。これソーシャルビジネスでしょう。

その次に明治13年に御所の中に画学校が創られた。文化芸術の振興です。その頃は徒弟制度で人を育てていた。また、この京都の1200年の歴史っていうのは差別と偏見の歴史でもありましたが、皆平等に育てようという学校を、日本で最初に創った。文部省が出来たのがその2年後で、学校制度を作ったのが明治5年です。こんなふうに町衆が学校を創って、皆でお金を運用して学校を運営してきたからこそ、今の京都がある。人を育てる、そして文化芸術を大事にしようという精神が、今の京都を創っている。

ちょっと脱線しますが、私が市長になってから「門川さん、あなたは主語がはっきりしない」と言われました。オバマ大統領は「私を変える」と言った。けれど、門川はそれを言わない。私はその通りだと思っています。

実は、教育長の時に、「教育委員会が」「教育長が」という主語を無くした。皆でかまど金の精神をもう一回取り戻し、皆でやる、ということにした。そうすれば、すごいリーダーは必要ないのです。だから教育委員会がこうする、校長先生がこうする、と言っている時は京都の教育は良くならなかった。皆でやりましょうという言葉には、かまど金精神の遺伝子がある。その遺伝子を皆で呼び戻しましょうと呼びかけた時に、京都の教育が良くなってきた。そして、学校運営にPTAも地域も、皆が参画する仕組みを作った。

実は 4 年前にソーシャルイノベーションについて取り組むことをマニフェストに書きたかったのですが、書かなかった。ソーシャルイノベーションは市長が「やります」と言って取り組むものではないのです。だから我々は地道にシンポジウムを 5 年ほどずっと続けてきた。そうしたら、自然に取組や仕組みが出来てきた。例えば、先週の土曜日に同志社大学で「新しい価値創造シンポジウム」が開催されました。同志社の学生さん 50 人と他の学生さん 50 人が「今、京都の未来の為に私たちは何ができるのか」を考えるビジネスプランコンテストです。同志社の建学の精神に立ち返ったイベントでした。色々な発表聞かせて頂いて感動しました。こういうことがあちこちで起こってきています。

大室: 今の門川市長のお話の中で「学校が・政府が取り組む」ということだけではなくて、まちとして取り組み、まちを創ってこうというお話がありました。これがある意味ソーシャルイノベーションの一つですよ。だから社会にとって欠けているところ、自分達が必要と思うものを、民間の力を使って提供していくことが大きなソーシャルイノベーションの一つだと思います。

京都を表現するときに、よく「伝統と革新」という言い方をします。伝統という言葉がよく使われますが、伝統は伝統のままだと消えていくだけで、伝統として残らない。革新があったからこそ伝統として残っている。小さなイノベーションが絶え間なく起きているからこそ、伝統が残っている。

門川: 京都は 150 年前に危機を迎えたのですが、その後、バブルがはじけて、また危機になった。日本中が規制緩和の大合唱でした。その時に、2001 年から 25 年の京都市基本構想を策定した。徹底的に市民参加で作られた。そして議会でも満場一致で可決された。都心部が空洞化する。流出する大学、工場。想像力、発信力が影ってくる文化、芸術。風情ある町並みの喪失、京都は危機にある。こういう書き出しでした。

しかし、私たちはもう一度、京都が大事にしてきた暮らしの美学、生き方の哲学を考え直しました。その結果、基本構想の第一章は、「市民の生き方」で始まる。日本全国の自治体が基本構想を策定しているが、第一章は大抵、産業政策、あるいはインフラ整備をどうするか、です。しかし、京都は「市民の生き方」を第一章にした。

その中に何が書かれているか。大量生産、大量消費、環境破壊、経済優先、競争優先、そんな暮らしが人々の信頼、持続可能なまちづくりを怪しくしている。今もう一度、京都に伝わる生き方を再確認しようと呼びかけた。

更に、生き方だけではわからないということで、京都市民の一番大事にしてきた「得意技」をもう一度、考え直した。一つはめきき。本質を見抜く力。二つ目はきわめ。物事をとことん極めていく。三つはこころみ。挑戦する。四つ目はしまつ。もったいない。五つ目はおもてなし。六つ目はたくみ。

こんなふうにして、京都人が大事にしてきたものをもう一度呼び戻して、それをしっかりと政策の中に、暮らしの中に生かす。その時に京都の未来が開けると考えた。だからこそ、日本中が規制緩和の大合唱の時に高さ制限を強化した。屋上の看板、高

い看板、大きすぎる看板。これを7年かかり、25,000の建物から撤去してきました。相当な反発も感じています。更には車中心の社会から脱車中心社会を実現するために四条通歩道拡幅に取り組んだ。思いつきでやっているんじゃない、京都市基本構想に基づいてやっているのです。

およそ20年前は、京都に来られるお客さんのうち21~22%がマイカーを利用して。ところが、2年前は15.1%、去年は9.9%だった。もう自動車中心で都の中を走り回らないで、バス、地下鉄を可能な限り便利にし、公共交通を使って歩いて楽しい暮らしを取り戻しましょう、という事を掲げた。そういう理念はソーシャルイノベーションに繋がっています。

大室：京都市基本構想を具現化する装置としてこのソーシャル・イノベーション・クラスター構想を策定したということです。行政だけが社会課題の解決に取り組むのではなくて、個々の民間の企業、NPO、市民がベースで動く。可能な限り行政が何もしないということが一つの大きな役割です。

次に、井上さん喋ってもらおうと思うのですが、今日は同志社大学の会場をお借りしていて、今里先生と新川先生とお話がありました。東に行くと慶応大学SFCっていう所で、ソーシャルアントプレナーの育成に取り組んでおられます。そこに長らくおられたことや、2000年代の最初の頃からソーシャルイノベーションに取り組んでこられた経験からお話いただきたい。加えて、今は世界中飛び回っておられるので、世界の動向や日本の今の立ち位置を念頭に、これからどのように取り組んでいけばよいかを教えていただければと思います。

井上：市長の話が面白すぎました。僕はずっとメモを取っていましたが、楽しかったですね。ぼくは、これで満足して帰っていい感じなんですけど。

市長のお話に「産業政策を追求するより、根本的な市民の生き方から考えていくっていうところにフォーカスした」という点がありました。この点に関連して、ソーシャルイノベーション分野でよく話す「レバレッジが効く」ということについて説明します。

要は「てこの原理」なんです。予算は無限にあるわけではないし、人の時間も限られている。だったらすべての複雑な問題に対して一個一個対応するのではなく、大きなシステムとして見た時に、1の力でどう10を動かすかを考える必要がある。100人のケアをするために100人使うのではなく、クオリティを保ったまま一番いいポイントをおけるのかっていうことを社会起業家と言われる人達、個人のソーシャルリーダーの人、



学校の教室の先生、政策担当者、あらゆる場面で工夫のしどころになる。

次に、頭で考える分析も大事だけれども、同時にエモーション・気持ちが大事です。例えば、この空間にいる人たちが、今、どんな気持ちなのかを考えます。退屈しているのか、疲れているのか、わくわくしてちょっと体が温まってきているのか、前を見ているのか下を向いているのか。このエモーションが全部生きているんですね。

それから三つ目が体です。今、僕は立って歩いて話した方が良いのか、皆さんも立った方が頭に入るのか。会議はじっと座っていなければならないと思って、座っていますよね。しかし、本当は横になった方がクリエイティブかもしれない。結果に対して、色んなやり方があるかもしれない。今までにない新しい結果を出すための変化の作り方、社会の変え方そのものを変えようというのがソーシャルイノベーションだと思います。

ところで、僕が市長にどうしてもお聞きしたかったのが、かまど金の話だったのですが、いきなりお話しいただいて、「やったー」と思っていたんです。実は、この話、僕が鳩山政権の時に所属していた「新しい故郷」という円卓会議に関連します。毎週、毎回、必ず首相も顔を出していました。当時の鳩山首相はですね、この件に関しては本当に腹が据わっていました。生中継で流されて多くの方が見ていました。

この中で大きな成果を残したのが寄付税制を変えた事です。円卓会議の中で、寄付税制に関して担当の財務大臣の方がちょっと弱腰の発言をした時に、鳩山首相から「ちょっと待って下さい。前向きだけではダメです。結果を出してください。」という発言があった。この公共円卓会議で採択した宣言の冒頭で触れさせていただいた話がかまど金の話だったのです。ですから、本当にお聞きしたくてしょうがなかった。

ところで、あのこのかまど金、先ほど学校銀行とかそういう表現をされてましたけど…。

門川：学校歴史博物館に行ったら、学校銀行の木製の金庫が残っています。

井上：へ～。じゃあ目に見えるのですね。今だったら電子の口座になるかもしれませんが、目に見えるものがあるのですね。なるほどね。

かまど金の何がソーシャルイノベーションかと言いますと、特に大事だと思うのは、学校の運営を色んな人に開いていったことです。地域の方、子どもを持ってない人も含めて色んな方、事業者の方、様々な大人や子供が集まったことです。これを「コレクティブインパクト」って言います。集合的なインパクトを生み出すためにどのように共同していくか。行政が中心である必要は全くなく、色々な形で、結果の為によりよい共同をどうデザインするか。これに関しては今日の午後に色々なダイアログ、対話をすると思いますので、その手法ややり方のデザインの仕方が少しずつみえてくると思います。要するに、舞台を変えていく。大きな仕組みやシステムを変えていくために一人のプレーヤーや一人の起業家、もしくは役所という一つの組織ができる事には限界があるので、どのようにコレクティブな、集合的な力にしていくか。ここに今色んな知見があります。

僕は2年前にスタンフォードにいました。90年代終わり頃から、スタンフォードをはじめ、色んな所で社会起業家というスーパースターモデルが世界中を席卷した。「これからはアントレプレナーじゃない、ソーシャルアントレプレナーだ」と広がった時期があったんです。それが一通り落ち着いてきて、9.11があつて、金融危機があつて、東日本大震災があつた。色々な流れの中で、企業のあり方、政府のあり方が問われる中で「社会を変えるのはヒーローアントレプレナーだけじゃない」と言われた。社会起業家は意外とチャームで素敵だけれども弱い生き物もあつて、この人たちのアイデアを大事にしてあげつつ、企業の中にいる人、政府の中にいる人、色々なプレーヤーが協力して、編み物のように一つの流れを作るかが大切だという話になってきた。そういう流れから、社会起業家という言葉よりも、ソーシャルイノベーションという言葉が世界を席卷しているのが今の状況かなと思います。

もう一つ、「かまど金」の話の中で、何がソーシャルイノベーションかというところ、この結果、学校の制度が後から入ってきたことです。番組小学校が出来た後に、多分、明治政府のリードもあつて学校が出来た。その結果、今、僕たちの身の回りに学校があるのが当たり前になっています。大きなソーシャルイノベーションというのは、僕たちの身の回りに多分普通になっていると思います。学校は普通にありますよね。

ほかに、教科書の発明ってすごいことですよね。教科書がなかったら先生が何人教えられたか。試験をどのように広げられたか。教科書の発明によって、これが数十倍のインパクトに広がった。そんなものが普通に日本にも沢山あると思うのです。母子手帳であるとか。もしくは生活協同組合。日本の生協って非常によく出来た仕組みで、今では当たり前で生協があつたりしますよね。他にもソーシャルイノベーション、ビジネスの分野にあると思います。

例えば、クレジットカードとか。クレジットカードは普通に身の回りにありますけど、ダイナースクラブが最初ですよ。ニューヨークで行きつけのレストランがあつて、たまたま5人組が揃つて財布を忘れちゃった。「やばい、どうしよう」と。「僕たちは信用があるからお店の人に、ここは一旦前借する形にしよう、しかもカードを使って仕組みにできないかなあ。」っていうことで生まれたものなのです。クレジットカードのすごいところは、今お金がなくても未来にある、入るであろう収入から今のお金を作らせるところです。色々な良い所も、悪い所もあるかもしれないけれども、社会のあり方を大きく変えた。

ちょっと抽象的に聞こえるかもしれないのですが、なぜソーシャルイノベーションが必要なのかを考えます。普通の事業会社はイノベーションが必ず必要です。何故ならば、サステナビリティの為に必要です。普通の商品とかサービスには賞味期限がある。必ず今のサービスモデルが回って、資金を回収して、最終的にビジネスモデルには終わりが来る。だから、多くの企業の中で稼いでいる部門の人は、その回収に躍起になっている間に、その資金を使って新しいものを投入して次のものを生みださないと次にいけない。つまり中、長期的にはイノベーションを起こさないとサステナブルじゃない。つまりサステナビリティの為にイノベーションが必要です。そして、社会も一緒です。

特に今僕たちはおそらく長い人類の歴史を見ていると、時々ソーシャルイノベーションを起こしている。産業革命が起きたのもソーシャルイノベーションです。おそらく今の社会の均衡点みたいなのがあって、それがそのままだと、色々な良い点・悪い点があって、必ず何かの問題を生み出す。それが蓄積してきて、「このままだと貧富の差がひどすぎる」、「今の教育が悪すぎる」という皆のフラストレーション、問題意識、危機感がすごく高まった時に自然発生的にソーシャルイノベーションが起きるのです。放っておいても。環境問題も問題じゃないのです。放っておけばいつか絶対解決するから。なぜなら、人類が滅びるから。そうすると地球は数億年かけてまたもとに戻る。環境問題は人間的に問題なのです。

そこで、僕たちは、今、どういう状態に自分達がいるのかに気づく必要がある。例えば、僕が今座っているところから一步外に出て、市長と大室さんと三人でいる輪から一步離れてみる。すると、ちょっと違ってお二人が見える。「あ、この二人はこんな光の角度でこんな感じで座っていたのか」って。「あ、いいんじゃない、結構格好いいね。」「ここに座っている僕も光が当たってそれなりに格好いいっていう事がわかりました!」とかね。このように、今の状況にちょっと気づいて座り方を変えると、これまで三人が座って並んでいる状況では生まれなかった解決方法が出てくるかもしれない。これってソーシャルイノベーションの一つなのです。

そうすると、折角だったらこの三人の知恵だけじゃもったいないから、(会場の)数人をここに呼ぼう、ということになるかもしれない。それによって新しい物をどのように生み出していくかなのです。つまり、冒頭に「主観」という話が出ましたが、ここにいる一人一人が持っている「こんな世の中にしたいな」とか、「こんな地域にしたい」とか、「こんな役所にしたい」という様々な思いやアイディアを花開かせるために、互いの良い信頼の基にアイディアを公開し、共に創り上げて、新しい流れを創るということです。これを組織の中、グループ、都市空間、社会全般でうまくリスクを抑えながら、信頼のある形で生み出していくための方法論が随分と見え始めている。本日の後半に西村勇也さんが見せてくれる対話という方法も、もっとオープンな形で皆で考えようよ、そして実行していこうよというアイディア、手法、事例です。このような手法が随分出始めているのが今の時代だと思っています。

大室: 実際、「何でソーシャルイノベーションが必要なのか」と考える企業の方もいらっしゃると思います。最近では、自治体がようやくソーシャルビジネスという言葉を始め、何とかしなくちゃいけないというところまで来ていると思うのですが、実はもっと先を見ながらソーシャルビジネス、今のNPOのあり方、企業のあり方を問わないといけない。それはある意味でソーシャルイノベーションの一つだと思います。ですから、冒頭に「主観で捉えてくださいね」と申し上げたのは、それぞれの皆さんの立場を一回ちょっと脱いでいただいて、人として自分の子どもとか孫の世代にどんな素敵な日本を残せるだろうということを少し考えて頂きたい、ということなのです。

これまでの話を聞いていただいて、みなさんすごく違和感たっぷりだと思います。分析をして自分の頭のどこかに知っているというキーワードを付けて収めないと、人

間ってすごく気分が悪い。だけど分析して収めないでいただきたい。「知っている」という言語に変えないでください。違和感のまま皆さんの組織とか地域にお持ち帰り下さい。そうすると違和感を解いてくれる人と出会います。それが本当に出会いであり、必要なネットワークなのです。このような方法を、今、京都は実践しています。だから京都市ソーシャルイノベーション研究所のスタッフもすごく苦しいと思います。常に分析すると言われていています。違和感のまま常に持っていると、ちゃんとそれを解決する人と出会っていくので、それまで待つのです。「知っている」という言葉に変えないで、分析をせず、頭の中にもやもやしていただいたらいいなと思います。

ここでもう一回市長に、ソーシャルイノベーションを起こして、どんなことをしたいのか、どんな行政にしたいのか、行政の中でどういう変化が起きてきたのかをお聞かせいただきます。

門川：大室先生と井上先生の話聞いて私もぼや一っとしてしまって、上手くしゃべれないんですけど。

繰り返しになりますけど、京都の最大の魅力、宝は人です。人が社会を見て京都を見て、繋がって世のため人の為になることをしながら生計を立てて行く、また声を続けていく。こういう事に尽きると思う。今、京都がちょっとソーシャルイノベーションの聖地のような感じになってきて、それが若い人や学生さんにも刺激与えてもらっているなと思います。「そうだ、ソーシャルイノベーションを学びに京都へ行こう」という感じになったらいいなと思います。

教育の分野でのソーシャルイノベーションとしては、小学校・中学校が府庁前の統廃合した学校の跡地で実施している「スチューデントシティ学習」があります。ここでは、銀行、商店、新聞社、区役所などからなるまちで、消費者役と企業に勤める会社員役を担い、体験学習を通して、社会の働きや経済の仕組み、社会と自分との関わりなどを学びます。例えば、コンビニで働く子、新聞社で働く子など、色んな所で働く。そして働く子とお客さんになる子が三回交代する。

はじめは100円で売っていたけれど売れ残った。次に50円で売ったら赤字になった。70円で売ったらそこそこだった。税金を幾ら払うかを子供に全部計算させます。

また、まちには選ばれた区長がいる。学習の最後に区民集会があるのですが、そこで区長が「皆さまから納めて頂いた税金、一円も無駄なく皆さんの意見を聞いて使います」と言う。やらせではないです。学校で学んでいることと、社会に出てから体験すること、そして社会の仕組みと一緒に学ぶ。そうすると何のために学んでいるかということがわかるのです。

学習の運営は全部ボランティアの人に関わってもらっています。学習の中で、ボランティアの人が子どもに「口先だけで言っている。心から言える言い方しなさい」と言います。子どもが帰るときには、「この場でだけじゃ駄目だよ」、「帰ってからもそういう生き方しなさいね」と言います。そうすることで学校の学びと社会が卒業してからが繋がる。これは中学校バージョンもあります。

その次に市民参画では、京都市未来まちづくり100人委員会というのを創った。同

志社大学の谷口先生は一生懸命、市民の皆さんに説明してくださったけれど、市政参画ってなかなか理解してもらいにくい。でも、この100人委員会には、市民が勝手に集まって来てくれる。市役所は100人委員会の事務局を担わない。皆が何をやりたいか課題意識を投入する。次に伝統産業、環境問題といったテーマ別のグループに分かれる。そしてそこに自主的に参加した市役所の職員も一市民として議論して、様々な取組が立ち上がる。

私は必ず京都にいる限り100人委員会の役員会に出ます。最初の頃は「市長、実はこんな要望があるのだけれど」と要望する人がいた。それに対して「そんな場ではないよ」と伝えていました。最近、区役所ごとに100人委員会が広がっていて、伏見で「伏見をサカナにざっくばらん」、「伏ザク」というグループが出来た。ここに参加した人が「市長、実はこんな提案があるけど」と要望する人がいた。そこに、かつて私に提案や要望ばかりしていた人が来て「市長に提案するのは違う、まず自分達でやってみる。自分達でやってみて、その結果、自分達で出来ない事を市長に、この部分はこう変えて欲しいと言うべき。あなたは、まだ何もやってない。思いつきで市長に提案しても何もできない。」という事を説明してくれるようになったのです。

つまり、皆が一緒になってまず課題意識を、危機感を共有する。そして皆で目標を共有する。その次に行動を共有する。そして達成感を共有しながら次に進む。これがソーシャルイノベーションじゃないかと思います。ただし、熱い思いとそれぞれの経験だけでなかなかうまくいかないこともありますから、的確なアドバイザーが入って来ることも必要です。

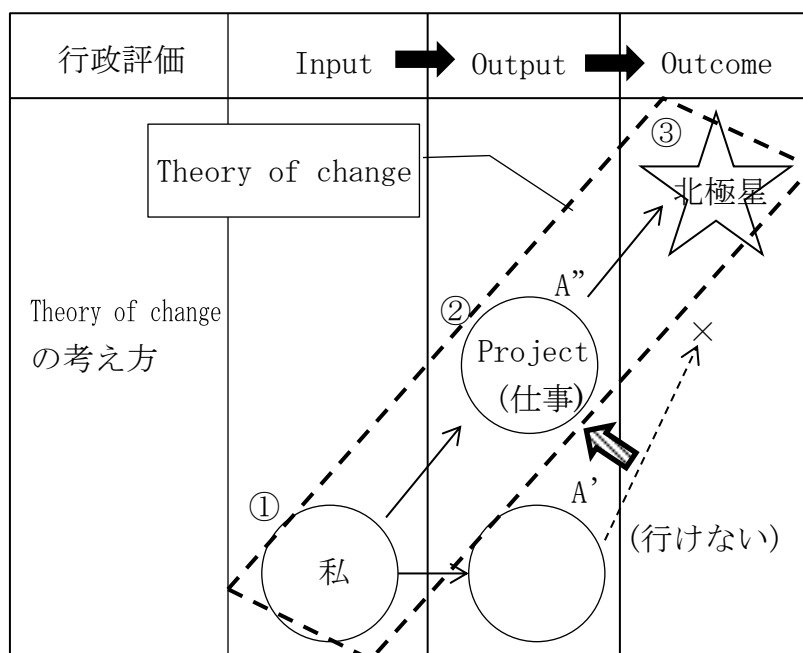
地下鉄増客に取り組んだときも同じようなことがありました。京都市の地下鉄は莫大な赤字を抱えていたので、1日あたり5万人増客しなければならなかった。それで交通局の職員も入って、市民の皆さんと一緒に、一生懸命議論して、何時間も議論してやるべき政策をまとめた。それに対して交通局の職員が「全部、これまでに私たちが考えた政策の中に入っています」と言った。ある人は「はやく言ってくれよ!」と怒った。ところが、多くの人が「私たちが何も知らないで練り上げた政策が交通局の政策と一緒に、協力してやろうじゃないか」ということになった。ちょっと回り道だけど、かえって共感になっていく事もある。市民を主体に。市民の生き方を主体に。しかしそれだけでなく、そこに専門家が入り、行政がうまく関わっていく。そしてまちを元気にしていく。

井上：今、市長がおっしゃっていたのは、プロセスを共有することだと思います。例えば行政のプロセスで起きていることは、市民が知らないこともあります。結果だけ聞くと「えーっ」と思うこともある。本当はそのプロセスで何が悩みなのかを市民が知っていれば、全然結果が違ってくる。

このことは、一般のビジネスプランコンペにすごく似ているところがあります。ビジネスプランコンテストに行くと、必死に審査員たちが昔の「マネーの虎」みたいに左脳で分析的・批判的なことを言っている。ちょっとしか進んでいないアイデアに対して批判を加えて、批判に耐えた奴は生き残れるんだ、みたいなノリになってい

マイプロジェクトとは、学生たちがずっとやりたかったこととか、自分の気持ちにチャンスをあけて、プロジェクトにしようというものです。プロジェクトにすると名前が付きます。名前が付くと人に話せるようになる。それからプロジェクトにすると期限もできる。時々シェアリングもできる。お父さんともっと話せるようになりたい、英語が上手になりたいだけでもいいです。それが皆のものになるし、自分だけのものではなく何か動き出すきっかけになります。

大事なのが北極星。僕はビジョンっていう言い方をよくします。こんな世の中になって欲しいとか、それこそ家族に、妹に障がいを持った子がいるからそういう子が普通にもっと暮らせる世の中になりたいとか。そういう夢を語ってもらいます。これは、先ほど話題に出てきた主観ですね。それを実現するのがプロジェクトです。



北極星やビジョンを共有したうえで、例えばイベントを開いてみて誰も集まらなかったことをシェアすると、みんなの目がキラーンと光る。そして、「どんなチラシを配った?」「どんな広報したの?聞かせてよ」って。「ああ、これだったら誰々連れてきたのに」「このコピー引っかからないよね」というふうに、上手いかなないと、人が寄ってきます。皆、助けたい。それによってプロジェクトが進化してプランAがプランA'に、A'になり、失敗して変化して進歩する。この体感を覚えると、失敗したら上手くなるから、無敵ですよ。この失敗できる環境をどう作れるかがすごく大事。ちょっとしたアイディアは皆持っている。それを共有できる空間の作り方のデザインを、また機会があったら話したいです。

例えば、「ワクワークイングリッシュ」というフィリピンと日本を繋ぐ英会話教室があります。実は和えるの矢島里佳さんもこれに関わっていました。他にも、身近な例では、ある女の子が日韓関係に興味があって日韓学生会議とかやっている。大変難しい問題なので、どうすればいいか分からないでいた。ある日彼女は気づいた。もっと身近な外国人みたいな存在で、本人にとって実は全然普段会話できてない「お父さん」と、どうしたらうまく会話できるだろうって。そこから生まれたのは親子と国際を繋いだ「親国際プロジェクト」です。

最初、彼女は、人の話を聞いた方がいいということが書いてある「Yes and で、すべてはうまくいく！」という本をお父さんは読むべきだ、と考えた。食卓に置いて、お父さんは読んでくれない。読んでくれないからトイレに置いたけど読んでくれない。仕方がないからお母さんと「あの本読んだ？面白いよね」と言うとますます読んでくれない。だんだん気づいたのは「きっとお父さん押し付けられるのが嫌なんだ」ということだった。それで彼女はどうしたかというと、お父さんの話を聞くことにした。すごい進歩ですよ。お父さんの話を聞いている時に、目をそらしたり、「っていうか〜」と言わずに、「うん」って言うようになったら、お父さんの態度が変わり始めた。これって日韓関係の第一歩かもしれない。今ここで起きている小さな変化はより大きなシステムの一部なんですよ。

こういった試行錯誤を仲間たちで共有することによって、この周りにいたコミュニティ自体も成長していく。とても身近な所で起きている話をしましたが、実際にソーシャルイノベーションは色々な事の縮図だと思います。ソーシャルイノベーションという横文字だとややこしいけども、日々のオーディナル、普通の日常にあることなのです。例えば、「ゆっくりご飯を噛んで食べてみる」「掃除をもうちょっと丁寧に心を込めてやってみる」「料理をする」「野菜をつくってみる」「隣の人にご挨拶をする」というところに潜んでいる。これはエキストラオーディナルって言い方をします。特別なエキストラオーディナルな幸福感や、変化の兆しを見つけて、意識化してプログラム化することで、今、ここで起きていることから世界が変わっていくかもしれない。そのきっかけが日常にいっぱいあることがソーシャルイノベーションの要だと思います。

門川: 変化を起こす、変えていく。過去と相手は変えられない。自分と未来は変えられる。変化は自分が起こさないと変わらない。相手と社会に変化を求めることがあるけれど、自分がちょっと変わった時に相手も変わるんだ、未来も変わるんだということを感じました。

大室: 本日の同志社大学の今里先生のお話の中にありましたが、社会実験というのが重要なテーマになっていました。実は今、京都でも色々な社会実験をしています。今、井上さんのお話にもありましたが、プロジェクトをターゲットにすると、その先の試行錯誤ができなくなる。京都の場合は、その北極星が京都市基本構想です。そこに向かって僕らは試行錯誤させていただいている。

今日に至るまで、僕等はいっぱい失敗しています。市長には言えない事も沢山ありますが、いっぱい失敗しています。けれど、僕らは失敗したことを沢山皆さんにお伝えしたいなと思っています。後ほど開催しますワークショップでシェアさせていただきたいと思います。これから発表していただく自治体さんも色んな試みをされています。企業さんも輪に入って頂きたいと思いますし、実際そういうお問い合わせも沢山出て来ています。企業さんも関心を持って動いていただいて、全国の自治体の方とこの動きを加速させるようにしたいというのが、サミットの一つの目的です。

今、井上さんに言っていたように、はじめから大きな事をするのではなく、自分を中心に、身近にあることを少しずつ変えて行きましょう。多分、自治体さんの中にはなかなか変えられない、なかなか難しい、っていう方々が多数いらっしゃると思います。だけど自分のことをちょっと変えることによって、周りも変わるということが沢山あります。いくつかの自治体さんの中では、ちょっとした変化が起き始めていますので、そういう試みをシェアするのが一つの大きな目的です。

井上: 先ほど、「私」、「プロジェクト」、「世界」と書きましたが、「私」、「仕事」、「世の中」とも書けます。これをどう繋げるかの練習なのです。

行政関係の方はわかると思うのですが、実はこれ、行政評価です。元々、大学院の時、僕は行政評価が専門だったのです。「私」、「予算」、「人」が「インプット」なのです。プロジェクト、仕事は「アウトプット」。最後の北極星、ビジョンが「アウトカム」です。わかる人は納得できると思います。

わからない人向けに簡単に説明します。例えば、予算をかけて道路を作ります。このとき、アウトプットが何m道路作った、ということです。アウトカムがそもそもどうして道路を作ったのかという話です。もしも「A地点からB地点への移動時間を短くする」というアウトカムなら、結局どれだけ移動時間が短くなったのか。

別の例で言うと、「ボランティア講習をする」という事業の場合、アウトプットが「講習会に何人が集まったか」ですが、「結局、ボランティアしたのは何人なのか」がアウトカムになります。

実はソーシャルイノベーションにとって、このアウトカムに結びつくのが結構難しい。理由は、地域に元気になってもらう、やる気を出してもらう、産業精神や企業家精神を持ってもらうといった皆さんが掲げている目標が、特定のマインドの話だからです。けれども、マインドの話ってダイレクトにアクセスできない。「なんかこの薬を飲むと急に元気になってうちの子は受験勉強やる気になりました」ということは、ない。普通気持ちにアクセスできないから、何らかのボタンなり、ツボが欲しいのです。これを「トリガー」と言います。

例えば、家庭教師に行くと「この子野球の話から始めるとやる気になってくれる」「今、彼女とどうなっているの?というところから始めると動き出す」ということがあります。何らかの動き出すツボがあって、そこがプログラムの起点となって欲しい何かを得るというデザインです。ですから、「親国際プロジェクト」の例では、「本を読んでほしいから、あちこちに置く」というプログラムは上手くいかなかったけれど

も「話を聞く」というプログラムでお父さんのマインドが変わり始める。どこがツボなのかをリアルの中であれこれやり直してみるとというのがすごく大事です。

例えば、ビッグイシュー基金という組織がありますが、会社の方ではホームレスの方が雑誌を売っています。大阪、東京、福岡など全国7,8拠点でやっています。駅前でホームレスの方が雑誌を売ることによって経済的な収入を得ると同時に、彼らのマインドの中に周囲とのコミュニティができる。ファンができたりする。毎日話かけてくれる人ができる。お客さんとの関係性ができる。それによって失いかけた自尊心を取り戻して、自分は世の中に戻っていこうという気持ちになっていく。

このようなアウトプットとアウトカムの関係、つまり世の中の変え方を「theory of change」と言います。これが社会的企業、優れたソーシャルイノベーション的な政府のプログラム、民間企業で言うところのビジネスモデルです。100円当たり、税金1万円あたりのインパクトが大きければ大きいほど、システムを変える深い変化であればあるほど、投資価値がある。だから、考えるだけじゃなくて色々やってみる事が大事なのです。

さて、今の話はアウトプットとアウトカムの関係が大事ということでしたが、もう一個、インプットである私とこのプロジェクトの関係も大事です。僕自身もだいぶ一時期やっちゃったんですけど、東日本大震災の後、自分の会社を辞めたりとか、特に若手が、20代30代の人たちが随分東北に行って起業したりしました。僕も何人も知っていますが、彼ら・彼女らの中には、バーンアウト、つまり燃え尽きかけたり、体調を壊したり、自律神経がおかしいまま走り続けている人がいます。最初は「私」のモチベーションで始めたけども、彼らは大きな期待を背負っていると思って、仕事と世の中のことばかりをフォーカスしすぎて、だんだん疲れてきた。自分が本当にやりたかったことじゃない事にも手を出してしまった。これによってインパクトが落ちています。

先ほどの「親国際プロジェクト」でも、日韓関係を何故やりたいかを見ると、実は自分自身の中に理由がある。先ほど、お父さんが家の中では外国人だと言いましたけど、実際に外国人です。その子はハーフの子です。やっぱり自分の中にすごく根の深いモチベーションがあります。組織で働いている人はこのジレンマって必ずあると思います。何故、私がこの職場にいて、この仕事をして、このプロジェクトを自分でやりたいかという「私と仕事」の繋がりが大変重要です。ここがいわゆる、最近言われるレジリエンスっていうやつです。転んでも立ち上がれるかどうか。創意工夫し続けられるかどうか。それは、どれだけ仕事が私に基づいているかに関係があります。「何のためにこれをしているのか」と、人間は迷います。これでいいのかなって。でも「何のためにこれをしているのか」ということを共有できる仲間がいる場をどう創ることが大切です。

自治体とソーシャルイノベーションという分野に話を戻します。よく聞く話だと思いますけど、グーグルが従業員の20%の時間を本業でない仕事の何か別のことをやれ、という時間にしています。あれはすごく重要な話です。今、皆さんがされている仕事の一部の時間を使って、一個でもいいから「これは自分の魂が入っているな」という

仕事やプロジェクトを作る。そしてそれを共有し合う同じ部署の人、違う部署の人たち、役所の外の人と繋がる。先ほどの先生のお話の中でもありましたけど、今里先生が狩りに行ったり、有機農業に取り組んだり、色んな事をされています。自分がすごく楽しいと思うもの、元気になるものにアクセスするポイント、接点を増やす。それが自分の中の大事なリソースになってくると思います。自分のプライベートや仕事の中の一部でいいので、自分の魂と繋がり、なおかつその先に世の中と繋がっていくマイプロジェクトを是非始めていただければと思います。

門川：徹底した市民参画のもとで、京都市基本構想に基づく京都市基本計画を5年前に策定しました。京都市の場合、計画を作る時には、中間時点で必ずパブリックコメントを実施します。京都市基本計画を策定するときには、35歳以下の若者で構成する「未来の担い手・若者会議U35」というチームを作りました。彼らが市民の皆さんの意見を聞いてくれて、反映させていこう、としてくれた。

中間時点で、京都市基本計画の中に目指すべきまちづくりの未来像が5つ掲げてあった。それに「未来の担い手・若者会議U35」が、もう一つ付け加えた。それが「真のワークライフバランス」というものです。

何で「真」がついているかを説明します。私は市長になってから、市民と語らう「おむすびミーティング」と職員と語らう「ハートミーティング」を実施しています。このうち、建設局の職員とハートミーティングを実施しました。そのとき、参加した女性職員がこう言った。

「ワークライフバランスっていうと、仕事を割り切って家庭も大事にするというふうに考えられているが。誤解だ。違う。徹底的に仕事を能率よくやるために、仕組みを整え、情報の共有管理をびしっとやる。そうすると、突然、子育てのときとか介護の時に誰かが休んでも、他の職員がカバーできるし、仕事が回っていく。更に、そのことによってコミュニケーションが円滑になり、仕事が上手くいく。結果として人間らしくいきいきと働ける。」

もう一つ追加すると、「真の」というのは「社会貢献、地域貢献しよう」ということです。社会や地域と関わることで、生き方を豊かにし、仕事の能率も高める。この真のワークライフバランスは、まだまだ認知度が広まってないですけど、まず市役所の職員の理想としています。

もう一つ、ソーシャルイノベーションのためには、沢山の失敗もある。そこに京都市政としてどう伴走できるかが大切です。私が市長になった時には16,000人の職員がいましたが、財政赤字で13,000人まで減りました。でも、まだ13,000人いる。13,000人の職員が地域で伴走する人になれた時に社会は変わっていくと思う。そういう関係を作りたいなと思いますね。

大室：最近、よく移住という言葉聞きます。移住したらお金を支援するとか、住む所をご用意しますっていうのがよくありますけれど、それだけでは移住は成立しない。移住を本当に促進しようとするなら、その人の生き方、その人の働き方、未来を繋ぐ必

要がある。

例えば京都では、京北、京丹波という自然豊かなところに多くの人が住みたいと言います。しかし、実際には、働くところがコンビニエンスストアだったり、工場しかない、私の生き方と一致しないこともある。だからそこを一致させるような政策を地方創生として創っていくべき。そうするためには、我々が働きたいと思う、自分を表現できる



空間っていうのを創らないと、うまくいかない。そういう空間は、行政の中かもしれない、NPOかもしれない、企業かもしれない。井上さんも僕もたまに東京行きますけど、やっぱり東京から離れたって人が沢山います。その人達をちゃんと救助できるように地方が頑張らないといけない。そのためにお金を用意するとか、家を用意するとかじゃなくて、生き方を用意することだと思います。そこが大きなポイントになると思う。井上さんが最後に言っていたことが大きなポイントで、ソーシャルイノベーションとは「僕らの生き方」であり、「もっと素直に僕等が素直に生きたいように生きようということ」というくらい、アバウトな感じで捉えてもらえたらいいのかなと思います。

さて、今回は京都でサミットを開催させていただき、多くの自治体に全国から集まっていたいただきました。今後、別に京都だけがやるという事ではなく、色々な人達、全国の人たちが情報をシェアしていただければと思います。ソーシャルイノベーションサミットは京都でスタートしましたが、できれば色んな所で色んな人と情報交換をしたいなと思っています。そのあたり、市長はどう思われますか。

門川：ちょっとだけええ恰好します。90歳になられた哲学者の梅原猛先生は仙台のご出身です。梅原先生が18歳の時に、東京の大学で学ぶか、京都の大学で学ぶかを迷われた。その時に「100年の真理は東京で調べ、1000年の真理は京都で調べ。」と言われた。結果として京都にいらっしゃった。90歳になって「京都で学んで良かった。この京都には1000年の知恵と自然との共生と持続可能であったその哲学がある」とおっしゃっていた。

京都だけが勝ち残る事は絶対出来ない。全国津々浦々としつかりと繋がって、全国の元気をいただき、また全国に元気を発信できる、こんな京都創生に取り組んでいきたいと思っています。

井上：今、市長が京都にあるものの話をおっしゃったのですが、これは今のビジョンだと思います。最初の話に戻って、やっぱり主観っていうのはどんなイノベーションでも前提になっています。どうありたい、どうなりたいって夢を描く力って個人にしか

い。その上に、星が光っている、つまりビジョンがある。それはエゴでもいいかもしれないけど、もっと大きなエゴを持つと、色々な人と繋がり、共感を得なければいけなくなります。NPO全般を見ていると、問題解決型といわれているものが、実はビジョン実現型ではないかと思います。東京にあるエティックもそうですけど、何かの問題を解決しようというよりも、こういう世の中にしたいということが大切です。

エティックの場合は、若者たちが色々な精神を持ち、色々な地域で元気を出せば日本は良くなるだろうと思い、インターンシップ事業を始めています。例えば、商店街活性化はすごくいい取組ですけど、商店街が問題だから変えようとするのではなくて、この商店街が変化した先の世の中や、この地域全体はどうなっているだろうという明るい夢を持っていれば、人とリソースが引き寄せられて新しい物を作りだします。

ポジティブティという言葉があります。ポジティブ心理学というものがありますが、ポジティブティとポジティブシンキングは違います。ポジティブシンキングは、落ち込んで暗くなっている自分に対して否定的です。「笑って、笑って、笑って、キャンディ」じゃないけど、鏡見て笑う、みたいな。そうではなくて、ポジティブティは、自分が持っているネガティブな反応や落ち込んでいる事、そういう事も受け止め、「うん、そうだよ」って肯定感を持つこと。実際にリサーチがありますが、このポジティブティを持つことが、人間の視野を広めるそうです。ネガティブで危険回避モードに入っているときは視野が狭くなる。車を運転している時と一緒です。何かがちょっと目の前に入るだけで、確かめもせず、ぱっと避けようとする。これは危険回避のために重要な力ではありますが、創造性には欠けます。

一方ポジティブティが高いと視野が広がります。ポジティブティを高めて何かをしていこうということ自体が、創造性を高め、生産性を高め、何かを生み出す。そういう意味で、私っていうのを大事にしていく。そして誰かと繋がってそして主観的に新しい世の中を一緒に創りたいと思います。

最後に1個だけ、どうしても言いたかったことがあります。先ほど少し言いましたマイプロジェクトは、2年前ぐらいから全国で高校生向けに始めています。先日は東京で全国から高校生が集まって開催しました。そこで一番の評価を得たのが京都の子だったのですが、とても素敵なプロジェクトでした。その後、東北と九州でもやりました。これを全国マイプロジェクトアワードということで、NPOカタリバさんと実施しています。是非、これを皆さんに誘致していただきたい。色んな所でやりたいです。ですから自治体の方、是非お願いします。高校生が色々な地域から集まって、開催地の高校生と一緒に取り組みます。プロジェクト型の学習を、しかも自分のストーリーと重ねあわせて実施します。そうすると高校生の素敵な風がいっぱい見えます。京都に呼んで下さい。是非お願いします。京都でやりたいです。他の自治体の方もご興味があれば後でお声掛けいただければと思います。

大室：先ほど市長もおっしゃっていましたが、別にソーシャルイノベーションの取組を京都だけでやろうとは思っていません。是非、全国の皆さんと手と手を取り合って、東京とは違う価値観を作り出したいと思います。このサミットも終わりにしたくないの

で、うちの市町村でやりたいぞ、という方は是非手を挙げていただき、全国でこういう動きをたくさん作っていただきたいなと思っております。今回、京都は市長のお許しをいただいてこういう形で開催させていただいていますので、是非、行動を共にしていただける自治体の方は、是非次回はうちでやりたいよと手を挙げていただければと思います。全国でこういうことをやれたらいいなと思っております。

それでは、時間になりましたのでこの辺りで終わりにしたいと思います。どうも有難うございました。

(3) 3自治体による事例発表

住民と共に創りあげ農村を活性化する

ソーシャル・プロジェクト kitokito MARCHE

加藤 明 氏

新庄市 商工観光課クールジャパン新庄推進室



はい、宜しくお願いします。山形県新庄市から参りました加藤明と申します。すみません、ちょっと緊張してます。4月くらいでしたかね、ウェブアンケート調査ということで、ソーシャルイノベーションに関するアンケートをいただいて、我々のやってるプロジェクトがそれに当たるかどうかって甚だ疑問もあったんですけども7月くらいでしたかね、貴方の街が当たりました、みたい。発表して下さいっていうのが突然ありまして。本当に小さな町の小さなプロジェクトではありますがこのような機会をちょうだいしまして有難うございます。それでは早速発表させていただきたいと思います。

今日のお話の流れですけれどもまずはじめに山形県新庄市のご紹介を簡単にさせていただいて、このプロジェクトの場所となっている新庄市のエコロジーガーデンという所がございますけれどもそちらの施設概要を少しお話して、本題のキトキトマルシェのプロジェクト計画についてご報告させていただきたいと思います。

はじめに、山形県ですけれども、南東北にありまして日本海側の宮城県のお隣でございます。で、山形県全体でも113万人ちょっとということで非常に人口減少が進んでいる県でございます。それと4ブロックに分かれてまして、県庁所在地のあります山形市を周辺とした村山地方、それから米沢周辺の置賜地方。それから日本海沿岸の酒田、鶴岡を中心とした庄内地方。それからもう一つが新庄、最上、ということで、最上8市町村、1市4町3村でございますけれども、こちらも人口合わせまして7万9千人しかいないという県内でも人口減少が進んでいる地域でございます。その中の人口の半分くらいがこの中心地新庄市でございますけれども、人口が3万7千人でございます。アクセスですけれども、東京駅からですと山形新幹線つばさに乗って頂いて終着駅がこの新庄市になります。で、夏の8月24日から三日間「新庄まつり」というのがございますけれどもこの三日間だけは人口が倍増するというような事がございまして。下に写真がございまして、このように各町内がつくる山車、20台くらいが街中を練り歩くというお祭りでございまして、来年ユネスコの無形文化遺産の審議ということで無事承認されますと京都市さんの祇園祭の御仲間入りをさせていただくというような運びになってます。それから日本有数の豪雪地帯でありまして昔ながらの雪国文化が今でも色濃く残ってる地域でもあります。雪国ですので、春になるとこういった光景が見れる所でございます。こちらが先ほど申し上げました「新庄まつり」という

ことで一番街が活気づく瞬間でございます。で、こちらは市内南部に最上川が流れておりまして、俳人松尾芭蕉がこの辺りで船に乗って日本海に向かっていったというところでございます。ちょっと今日ここだけの話なんですけど、この芭蕉さん、これ私でございます。これから冬のシーズン、このような雪景色にも出会える四季折々のこういった田舎の町ということで覚えていただければと思います。

続きましてエコロジーガーデンといってそのプロジェクトの舞台になっているところをご紹介します。こちらのエコロジーガーデンですけれども旧農林省の蚕糸試験場跡地でございます。南と北に分かれてまして合わせて 10 ヘクタールくらいの広大な敷地の中に歴史的な建造物が立ち並んでいるというところでございます。昭和 9 年から建設が始まりまして 12 年に 10 棟くらいの建物が揃ったわけですが、その後ずっと研究が続いてきたんですが、国の機関が 12 年に撤退ということでその後平成 14 年に市が国から譲り受けた形となりましてエコロジーガーデンとして開園した施設であります。このように当時のままの古い建物が残っていて全国的にも珍しいという事で国の登録有形文化財ということで指定されているところでございます。そして多くの木々や緑に囲まれた所ですけれどもこちらにも四季折々に色んな表情を見せてくれるところがございます。こちらの施設を舞台に始まったのがキトキトマルシェプロジェクトでございますけれども、その前に市全体として非常に若い人達の人口の流出が著しいとか何となく地域に活力がない、あとはその地元の田舎の暮らしの良さとか住んでる人が気づいていない、とかそういう課題を抱えておりました。で、施設運営の方としても文化財としてこれからどうやって活かしていったらいいのか、とかあとは施設の希少価値を市民にわからせるにはどういうふうにしていったらいいのか。そもそもその場所を知らないとかそういう課題がありました。利用計画というのがあるんですけども平成 24 年に第三期計画が作成されて今までは右の写真のようにどちらかと言うと農業寄りに使っていたんですけどもこれからは観光交流の視点で使っていくなさいというのがございました。で、平成 24 年に農林課から商工観光課へということで、市役所内部の話ではあるんですけども管理が我々の方に移ってきました。私どもで実行委員会というプロジェクトを立ち上げることにしました。

施設に関係する団体さんですとか、あとはまあ若手農業者の方とか、Uターンしてきた若手デザイナーとか。色んな関係者、キーマンを束ねましてプロジェクトチームを作ったところです。で、こちらのメンバーからの提案によってマルシェをやったかどうかということで、このキーマンになっているのが写真右から二番目のビビる大木さんみたいなこの彼はデザイナーなんですけど、東京から戻ってきて農業をしながらデザインをやっているという方なんですけども。この方からの提案でキトキトマルシェを始めようということになりました。

先ほどより話が出てますけれども、大量消費とかそういう時代の中で今まで暮らしてきた知恵とかそういったものをもう一度見つめなおそうというコンセプトでやっております。キトキトというのは北陸の方では生きがいいとかそういう意味で使われているんですが蚕とか青虫が葉っぱの上をこうゆっくり歩く表現、方言なんですけども、そのプロジェクトがゆっくり進化していったらいいという事でキトキトマルシェ

にしました。で、5月から11月までの毎月第三日曜日に開催してるところでございます。こちらが2014年からのフライヤーなんですけども、若い人をターゲットにするってなのでちょっとかわいいデザインにしてもらってやっております。最初は人もまばらでのんびりやってたんですけども今年度は売り上げも集客も共にだんだん増えて来て上もちょっと大変になってきてるところでございます。ちょっとここで写真で紹介させていただきたいと思います。こちらが会場の朝の状態ですけども、外にテントがずらーっと並びまして毎回大体30店舗くらいですかね。こういった地域の農産物とか、このトマトがよずべえトマトさんと言ってすごく甘くておいしくて東京のファーマーズマーケットなんかにも出してるトマトです。それからお米の量り売りをしたり、あとは山形県でするので果物、リンゴ屋さんが加工品ジュースを持ってきて販売したり、それからあのクラフトということで手作りの工芸作家さんの作品があったり、ブローチとか・・・今日私が付けてるブローチもネクタイと、キトキトマルシェで買った物です。こちらは建物内での販売の様子ですけども、非常にいい雰囲気です。それからワークショップということでこれは前回のマルシェだったんですけども、クリスマスリース作り。園内に落ちてる松ぼっくりを拾ってきて子供たちと一緒に作るということをやっています。ちょっとこれ見づらいんですけど、熊ですね。

先ほど先生の方で狩猟という話が出ましたが、熊さんが山から山菜を採ってきてパクチーと一緒に売ってたり、熊さんがポエムを販売したり、餅つきをしたりしています。こちらの熊さんですが、クマノヒロシという彼自身が芸術作品、アート作品なんです。先ほど先生からもありましたけど、自然との共生をテーマにした芸術作品が今年度グランプリを受賞しまして、マルシェに出展するようになったというお話です。

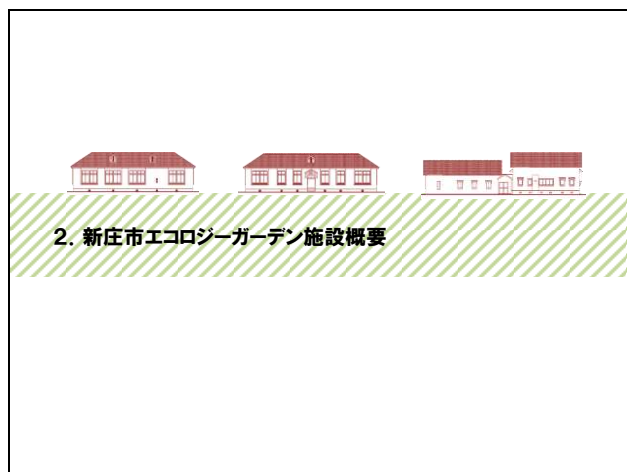
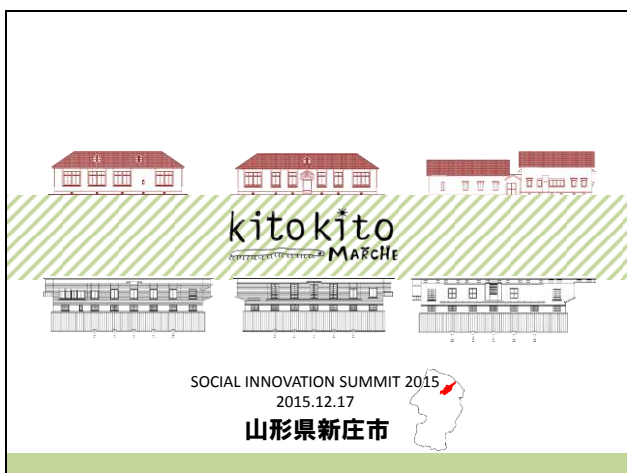
で、毎年9月にキトキト環境芸術祭ということで開催しております。県内外から色々なアーティストさんが滞在をしてこういった芸術作品を展示していくという期間もあってこちらでも非常に人気のあるイベントに成長してきたところです。それからあの、蚕室を活用した企画展示ってということで蚕を実際に飼育していたところ、木造の非常に雰囲気の良い所ですけども、そちらに地元の暮らしに焦点を当てた伝承野菜の種を守ってきたストーリーですとか後は雪国の手仕事と言いますか、そういったものを展示して・・・昨日表彰式があったのですが、山形県のデザインコンペで受賞をした展示になりました。

それからこれ今年の様子なんですけどもキトキトマルシェ、月一回じゃなくて毎週やってほしいという要望もありまして毎週やってしまうと我々が死んでしまいますので、建物の一角をカフェにしようという話もありまして、ちょっと市役所的には色々大変なところもあったんですけども市民手作りで右上の写真載せますけども、私も加わっております。で、8月にオープンをいたしました。で、外観は写真左みたいな感じですけども内装はもうカウンターとか作ってこちらは高校生カフェということで新米の時期におにぎりをしてもらったところです。左下が地域おこし協力隊なんですけども、元イタリアンのシェフということでかなり本格的なメニューもたまに出ます。二階にはですね、写真中央になりますけども地元の伝統工芸品ですとかそうい

ったものを展示販売しているコーナーがあつて、写真右下のキトキトブックスというのがありますけどもこちらは誰かに読んでもらいたい本を二冊持ってくると一冊持って帰れるというシステムでやってます。

で、こちらも徐々に蔵書が増えてきている状態になってます。2012 年にキトキトマルシェとワークショップ、それからキトキト大学っていう暮らしのセミナーみたいなものを不定期に開催してるんですけども、こういったものから派生して翌年には環境芸術祭アートフェスティバルが開催されたり、今年度になってコミュニケーションアオムシということでカフェ、ギャラリー、ブックスということで色々プロジェクトが展開しているところでございます。色々メディアでも取り上げていただきまして去年はソトコトさんの方でアイディア溢れる社会貢献プロジェクトということでご紹介いただいたところでございます。最後になりますけども農村イノベーションということでキトキトマルシェを契機にいろんな人が関わりを持ってきて色々プロジェクトが発展してきているところでございます。それを通して地元地域の持つ豊かさとか奥深さとかそういったところで暮らす人たちが気づき始めてきているのかなというふうに思っております。人口減少とか地域の活性化とか社会的な課題とか色々抱えておりますけどもそういうものに貢献できるようなプロジェクトとしてこれからも続けていきたいなと思っております。写真はですね、今年度高校生ボランティアが大変多く協力してくれるようになってこのように楽しく・・・これ撤収作業終わった後に集合写真毎回撮ってるんですけども、このような形で若い人たちがプロジェクトを支えて行ってくれている状況です。商工観光課のfacebookページ、キトキトマルシェ、コミュニケーションアオムシそれぞれページがありますので興味のある方は是非、いいね！をしていただければと思います。時間過ぎて申し訳ないです。ご清聴有難うございました。

【新庄市発表資料】



kitokito
Marché

kitokitoMARCHÉの舞台、 旧蚕糸試験場新庄支場 「新庄市エコロジーガーデン」概要

JR新庄駅から約2キロ北上した田園地帯に位置しています。
南北約10ヘクタールの広大な敷地に歴史的建造物が立ち並び、桜や樺、大桑などの緑の木々に囲まれた市民の憩いの空間となっています。

South area
南側約6 h a

North area
北側約4 h a

kitokito
Marché

歴史・沿革

昭和 9年12月 蚕糸試験場福島支場新庄出張所として開設
昭和12年 2月 蚕糸試験場福島支場新庄出張所に改称
5月 蚕糸試験場新庄支場に改称
昭和33年10月 蚕糸試験場新庄原蚕種製造所となる
昭和43年 4月 蚕糸試験場新庄原蚕種試験所に改称
昭和58年12月 蚕育種部原蚕種第一研究室に改組
昭和63年10月 農業生物資源研究所遺伝資源第二部植物栄養体保存研究チームに改称
平成 5年10月 東北農業試験場作物開発部遺伝資源利用研究室に改組
その後、東北農業試験場畑地利用部畑作物栽培生理研究室に改称
平成12年 3月 閉所
平成14年 2月 新庄市が国から跡地の譲受を受ける
9月 新庄市エコロジーガーデン「原蚕の杜」として開園
平成25年 3月 建造物登録有形文化財に指定

kitokito
Marché

現存する蚕糸試験場は全国的でも希少。 登録有形文化財建物群

半世紀以上にわたり、日本の蚕糸業を支えてきた蚕糸試験場。当時の姿で現存するのは全国的でも唯一となり、その価値が認められ、平成25年3月に建造物登録有形文化財に指定されました。

kitokito
Marché

エコロジーガーデンの四季の風景

緑の木々に囲まれたエコロジーガーデンは、四季折々の風景でわたしたちを楽しませてくれます。

春 Spring

Summer 夏

秋 Autumn

冬 Winter

3. キトキトマルシェ・プロジェクト経過

kitokito
Marché

kitokito
Marché

現状と課題。

市全体として

- ①若者の人口流出
- ②地域の活力不足
- ③閉塞感がある
- ④地域の魅力の認識不足

施設運営では

- ①文化財としての保存・活用方法
- ②施設の希少性や価値の再認識
- ③知名度不足
- ④利用計画の推進と団体との協働

第3期利用計画

- ①地域農業の振興
- ②観光交流の拡大
- ③歴史文化資源と景観の保全

2012年、交流拡大プロジェクト始動。

2012年(平成24年)、施設の所管が農林課から商工観光課へ移管されたことを契機に、エコロジーガーデンの利用団体を中心として、エコロジーガーデン交流拡大プロジェクト実行委員会を設立。日ごろから施設を拠点に活動する団体や若手農業者団体、Uターン、若手デザイナーなどを中心に組織化し、施設の保存・活用と、交流の場づくり目的とした事業展開を目指します。

キトキトマルシェ誕生。

実行委員会のメンバーからの提案により地元の農産物や加工品、手作りの雑貨などを販売するマルシェを開催することに。

kitokito
ECOLOGY GARDEN MARCHE

【運営理念・コンセプト】
経済成長が生活を便利にする一方で、文化や風習などが失われつつある。これまでの雪国での生活の知恵を活かし、お金だけではできない豊かな暮らしを目指します。また、失われたつながりを再生し地域の生活を楽しめるようになることを目指します。

「きときと」とは、蚕や青虫が葉っぱの上をゆっくりと歩く様子を表した方言です。5月から11月までの毎月第3日曜日に開催しているキトキトマルシェには、手づくりこだわった農産物や、加工品、手づくり雑貨やご当地の食材を使った食べ物など、毎回30店舗以上の店が軒を連ねます。それを目的に多くの人々が集まるようになり、新たな交流の場が広がっています。

市民による産業振興と交流の拡大

kitokito キトキトマルシェ
ECOLOGY GARDEN MARCHE

年 度	集客数(人)	出展数(件)	売上額(円)
平成27年度(前年比)	10,150 (14%増)	258 (25%増)	8,262,000 (32%増)
平成26年度(前年比)	8,908 (33%増)	205 (9%減)	6,238,500 (12%増)
平成25年度(前年比)	6,685 (114%増)	225 (129%増)	5,527,400 (144%増)
平成24年度(当年比)	3,120 (100%)	98 (100%)	2,258,500 (100%)

景観を生かした環境芸術の祭典

キトキト環境芸術祭 / kitokito ART EXHIBITION

旧蚕糸試験場の建造物や緑の木々に囲まれた園内にアートを展示。県内外のアーティストがランドスケープによる作品を制作。9月の開催期間中は、歴史と文化が漂う空間で、環境芸術に触れることができます。

蚕室を活用した企画展示

種と手 ～最上を受け継ぐモノ～

「最上伝承野菜」の種が守られてきたストーリーと最上地方の雪国の厳しい暮らしの中でモノづくりを行ってきた職人さんたちの「最上暮らしの技」を展示。この地域に残ってきたもの。そして、地域の未来に残さなければならないものを展示。地元の若者を中心となり、歴史的な建造物のロケーションを生かした企画展示に多くの市民が訪れました。

施設のリノベーションによる活用

週末カフェ AOMUSHI

今年8月に週末カフェをオープン。使用用途のなかった空間をボランティアによる手づくりでリノベーションし、1階は地域の食材を使ったカフェ、2階には、地元の手仕事による民芸品や生活雑貨を展示・販売するギャラリー、本の交換ができるキトキトブックスをオープンしました。



AOMUSHI
週末カフェ

kitokito MARCHÉ

- 芸術祭 ART.FES Since2013
- カフェ CAFE since2015
- ギャラリー GALLERY since2015
- 本 BOOKS since2015
- ワークショップ WORKSHOP since2012
- マルシェ MARCHÉ since2012
- ダイガク COLLEGE since2012

kitokito MARCHÉ × AOMUSHI



マスコミ報道等でも注目のプロジェクトに

地域活性を担うソーシャルプロジェクトとして、県内外の新聞、雑誌、テレビ等のメディアに取り上げられました。



市民手作り「ツリーデッキ」

自然重視の市場開設

分庁舎移入と交流の場

アイデアにあふれる社会貢献プロジェクト

社会的課題解決に向けて

農村イノベーション

キトキトマルシェの開催を契機に、エコロジーガーデンを舞台とした市民が提案し市民が実施するさまざまなプロジェクトが展開されています。また、その盛り上がりとともに施設の永続的な保存と利活用の気運が醸成されてきました。さらには、その場所に流れるゆつくりとした時間のなかで、新庄・最上地域のもつ豊かさや奥深さに、そこに暮らす人々が気づきはじめています。今後も人口減少や地域の活性化などの社会的課題解決に向けたソーシャルプロジェクトとして継続していきたいと思います。

kitokito MARCHÉ Volunteer Staff



ご清聴ありがとうございました。



山形県新庄市商工観光課
<http://www.facebook.com/shinjocity>

キトキトマルシェ
<https://www.facebook.com/kitokitomarche/>

コミュニケーション・アオムシ
<https://www.facebook.com/kitokitomarche/>

SOCIAL INNOVATION SUMMIT 2015
2015.12.17

自治体×自治体でイノベーションをおこす

～高梁川流域連携の取り組み～

前田 幸宏 氏

倉敷市 文化産業局商工課



倉敷市商工課の前田と申します。どうぞ宜しくお願い致します。先ほど新庄市さんもおっしゃっていらっしゃったんですけど、4月に、このサミットについて京都市さんからご案内をいただきまして、是非行きたいというふうにアンケートを返したら、その後事例発表をしてくださいとありまして。ソーシャルイノベーションってすごく大きなお話で倉敷市はそのレベルではないと上司と相談をして、一度お断りをしました。それでも「何でもいいから発表して下さい」、ということで、倉敷市では、新たな広域連携ということ全国の自治体に先駆けてやらせていただいております。そういうことについてであれば説明をさせていただくと。広域連携は企画部署、企画経営室という部署が担当しているんですけども、私は商工課です。私は元々そこの部署で広域連携を担当していたんですが、今は商工課なので経済分野の取り組みについて話をさせていただきたいと思います。今日、実は上司と来ているんですけども、上司から個人の責任で好きなように喋っていいと許可をいただいておりますので、あくまで個人的な見解もございまして、説明させていただきます。

まず、高梁川流域について説明させていただきたいと思うんですけども、こういった川ですね。高梁川は岡山県の西部に大きな高梁川という一級河川が流れておりまして、それを運命的共有物っていうふうに捉えまして、流域に住む人々の連帯意識を育み、流域全体の文化向上を目的として文化、産業、環境の活動を行ってきた。これは、クラレとかクラブウと言う大きな会社があるんですけども、そこの創業者である大原さんという方がおっしゃっていた言葉がございまして。少し紹介させていただきますと、「高梁川流域の人はこの川を機縁としてお互い理解を深め愛親しみ協力してこの川を守り、この川で培われた文化や産業の共同体をより美しく、より合理的に築きあげなければならないと思う。また、この流れによって生きた人々によって守られ利用され郷土の文化を生み産業を育て、歴史の流れと共に人々の生命の糧となり魂の故郷だ」と。つまり、倉敷市は今、中核市 48 万人位の都市なんですけども倉敷市があるのは新見市から流れてる高梁川のお陰なんだ。水の恵みのお陰なんだと。上流の方々がちゃんと川や森を守ってきたという事を忘れてはならない、ということで、自然的、歴史的な繋がりがあります。先ほど広域連携ということ申し上げたんですけども、取り組みの背景について少し説明をさせていただきます。

「我々の描く最悪のシナリオは地方から東京へ人口流出に歯止めがかからずやが

て地方の都市が消滅する一方、東京は超過密都市として残る極限社会になること」、これは、地方創生の増田元総務大臣さんがおっしゃったお言葉です。もう一つ、「超高齢人口減少社会においてこのまま居住地の拡大や人口拡散が続けば自治経営が破たんすることは必至である。これに対して解決方法はシンプルだ。それは人口減少や高齢化に対して集約化や連携強化を図ると同時に長期において出生率を回復させること。連携中枢都市には東京圏の受け皿に匹敵する、高度専門的な機能集積が期待される。」これは一橋大学の辻琢也という先生、行政学の先生なんですけども。その方がおっしゃったことです。つまり、地方創生、人口減少の中にあってはですね、自治経営が破たんしますよ、と。これまでのように、過疎の町や村に大量のお金をばらまいてきた、それはもう通用しなくなる。そういう意味で集約化をして自治体同士が広域連携をしていきなさい、ということをおっしゃっています。

じゃあ連携中枢都市圏って何だということなんですけども、京都市さんは三大都市圏、大阪とか神戸とかございますし、首都圏、東京とか神奈川とかすごく大きな圏域で人が集まっていくところというふうに思います。倉敷市はそんなに現時点では減ってないんですけども、新見市さんとか高梁市さんとか、岡山県の北の方はかなり減っています。実際、レポートの人口消滅可能都市について、新見市さん、高梁市さんが挙げられているという形です。そういった中で、やはり若者が外に出ていくという事がすごく、若者だけじゃないんですけどもやはり、都市機能が備わっていないといけなわけですね。そういう意味で、例えば「映画館がない、映画も観れない街は嫌だ」と。それで東京に出ていく。だけど、倉敷に行けば映画館あるんですね。イオンモール倉敷っていうのがあって。そこに行けば、倉敷市に行けばまあ用が足るよね、とか。マクドナルドのハンバーガーが食べたい、だとか、そういう人がいるかどうかはわかりませんけども。ある程度の都市機能が、商業施設が倉敷市にあるといいよね、とか。後は高齢者の方や、女性にとって、病院、産婦人科機能は、生活をするうえで深刻な問題だと思うんですけども、倉敷市には大きな病院が多数あります。倉敷市の病院をですね、圏域の新見市、高梁市、まあ笠岡とか遠くの方々が使えればいいよね、出て行かなくてもいいよねっていうのが大きな考え方です。要するに、倉敷市に集約というように書いてますけど。ここに、国の方がある程度財源を集中的に投資して、その機能を圏域に波及させる、というのが考え方です。

ただですね、通勤通学 10%圏っていう通常の経済圏の捉え方で言うと、新見市さんとか高梁市さんとかはですね、ちょっと倉敷市から遠いです。ただ、新見市、高梁市さんは元々先ほどお話ししたように文化的なつながりもあるので、連携できる、一緒にやりましょう、ということです。

また、今まで、広域連携をやってなかったのかと言うと、そうじゃなくてやってました。平成 20 年度にこの広域市町村圏っていうのが地方自治法が改正されてなくなったんですけども、それまではここにある都道府県が主導で、広域計画を策定してやってきましたが、実際にはあまり機能しなかったんですね。要するに、都道府県、岡山市と倉敷市が一緒になった、岡山県南行政圏域っていうのがあったんですけども、岡山市と倉敷市はそれなりに機能が違ったり、文化的なところも違う、と。だけどそ

れを一緒にした計画を作ると。県の方もですね、すごく広い圏域について事業をやろうとしても、個性といったものがなかなか生みだせない。ということで、実際会議を実施したり、事業計画は立案するけどなかなか実現しにくいので、国が制度を廃止しましょうというのが平成 20 年度です。で、地方自治法が改正されてその後、定住自立圏構想という制度ができ、昨年地方自治法が改正されて、こういった今までの県主導ではなくて拠点となる都市が中心になって連携をなささいという連携注中都市圏構想ができました。で、違うのはですね、一対一の協約、契約に基づくんですね。議会の承認が必要なんですけども。要するに、制度上、新見市さんと高梁市さんとは連携していないんです。あくまでも倉敷市と新見市、倉敷市と高梁市というのがすごく大きな特徴だと思います。詳細を説明すると長くなるので飛ばします。

で、この概要についてはですね、要件が政令都市、人口 20 万人以上の中核市とかですね三大都市圏以外の区域、とか京都市さんは違うということになるんですけども。制度の仕組みとしては倉敷市がやります、というものです。勿論強制ではないので、やらなくてもいいんです。倉敷市が他の市の面倒まで見る必要がないという考え方もあると思います。とは言いながら、先ほどの文化的なつながり、歴史的なつながりがありますので、倉敷市としては、流域は大事なんだ、新見市も大事なんだということで、消滅しては困るということで、連携中枢都市宣言をして、協約を結びました。

で、事業的なことも申し上げると成長戦略ビジョンという計画、計画と言っても、もうちょっとぼやとしたものですが、これはホームページにあるので検索して頂ければ出てくるんですけども。その中で経済成長とかですね、都市機能とか生活関連機能サービスについて事業をやっていくということになっております。そして、この成長戦略ビジョンに記載している事業に対して国から財源が受けられると。私は先ほど申し上げた商工課で、経済成長を担当しているのですが、まあ生きていくため仕事がないと駄目だよ、経済成長というのは大事だということで、経済成長戦略というのが大きな柱の 1 つになっております。昨年度モデル事業で応募する時に、経済成長戦略を策定しなさいというふうに言われたんですけども、すぐに出来るわけがないんですね。私、新見市の事も高梁市の事も笠岡市の事も分からないんです。ただし、やれと言われた以上はやらざるを得ないので、最初にまあ考えた事としてはまあ広域連携の使えるメリットを活かすことができないかという視点と、ヒトとモノとカネを地域内で循環させるという考え方が有効ではないかということ。そのためには調査をしなければならぬ、実態把握が必要だと考えました。経済成長戦略の方向性について先に説明させていただくと、地域循環という考え方があります。例えば倉敷市は、ジーンズがすごく有名なんですけども、児島っていう地域でジーンズを国内で生産、販売しています。すごく儲かってるんですね。ジーンズが。2 万、3 万、10 万のジーンズがどんどん売れていくと。そしたらそのお金が倉敷市に入ってくる。そのお金で投資をして雇用をしてまたジーンズを作ってまたそれを売っていく、という流れでお金が循環していくんですけど。その倉敷市の中でお金がずっと回っていればいいんですけど、実は、流出もしています。

調査の結果、人材派遣とかですね、人材雇用の分を岡山市に依存しているところが

ございまして、そういう意味で左にあるマネーの流出と人と物の調達っていうところについては、できるだけ少なくして右側の輸出とか域外マネーの獲得というのを多く入れた方が良いという考え方です。井原市っていうジーンズの生地を作っている所なんですね。ここを例えば倉敷市の調達を井原市からすることができれば、大きな経済圏域として圏域の中でお金が回っている。つまり、岡山市から人材派遣を採るんじゃないかと、その圏域の中で雇用すれば外からお金が入って圏域の中で回って、それがどんどんどんどん増えていく。こういうことが、東京とか大阪ではできないのではないかと、経済規模や、会社規模では大都市にはかなわないですが、地方都市ではこういう考え方で成長できるんじゃないかと、考えています。社会的共通資本としての高梁川の存在。川の上流と下流は産業の上流と下流と同じ。役割分担と機能分担の在り方について検討が必要、というふうに考えています。

残り1分なんでざっといきます。ヒトとモノとカネの動きについて、昨年度ビッグデータを使って調査をしたんですけども、倉敷市は観光都市としてまあまあ有名なんですけど、すごく日帰りが多いんです、実は。感覚的には、大体それはわかってたんですけども、実態はつかめていなかった。結果、来訪者数は、圏域の中で倉敷地域、美観地区が圧倒的に多い。一方、平均滞在時間も4時間に満たない。課題はですね、ここです。宿泊客が、岡山市に相当流出してるんですね。倉敷市には来るけれども岡山市の方が泊まる所が安いんですね。なので岡山市に行ってしまう、と。これをどうにかしないといけない、というのが課題。課題が見えてきました。周遊箇所を増やせば増やすほどですね、地域の中に宿泊する確率が高くなるということも分析の結果わかってきました。ここはもう年齢層とか、色々分析して、こういうルートを考えられないかなということ、今、分析試行錯誤しているところです。もう時間なので割愛させていただきますけども、あとは物とお金を先ほどのどういう取引をしてるかっていう事について、経済センサスですとか、産業連関表っていうものを使って、岡山大学の中村良平先生っていう先生と協力して、今、分析を進めています。高梁川流域のその他連携事業については、地域資源を活用するとか、町家、古民家というものについて・・・まあ京都市さんの前で、こういうことを言うのもちょっと憚れるんですけども、そういうものを活かしていこうよという取り組みでございます。最後に、課題なんですけども連携強化っていうのがすごく大事だと思ってます。

今でもですね、倉敷市は合併するんじゃないかとかですね騙されないぞっていう方もいらっしゃると思うので、そこはしっかり市町の方、住民の皆様に丁寧に説明していかないといけない。あとは、こういう取り組みがこれから広がっていくので、倉敷らしさ、高梁川流域らしさっていうのを出さないといけない、と。そういうところを丁寧にやらないといけないということ。あとはですね、「ソーシャルイノベーションを起こす！」って申し上げましたけど、今は、イノベーションを起こせるかな？っていう程度です。経済構造を改革する、先程の井原のデニムも調達するっていうのは民間の動きなのでそういったことが本当に出来るかどうかについては、チャレンジな事業だと思っています。すみません、時間が過ぎてしまって。以上でございます。ご清聴ありがとうございました。

高梁川流域連携中枢都市圏の取り組み
～流域でソーシャルイノベーションをおこす～



高梁川流域

1



高梁川流域

圏域を流れる一級河川「高梁川」を流域の「運命的共有物」と捉え、流域に暮らす人々の連帯意識を育み、流域全体の文化向上を目的として、文化・体育・環境の各分野で活動を行ってきた。



取り組みの背景

5

取り組みの背景

“我々が描く最悪のシナリオは、地方から東京への人口流出に歯止めがかからず、やがて地方の都市が「消滅」する一方、東京が超過密都市として残る「極点社会」になること”

6

取り組みの背景

“超高齢・人口減少社会において、このまま居住地の拡大や人口拡散が続けば、自治経営が破綻することは必至である。これに対して解決方法はシンプルだ。それは、人口減少や高齢化に対応して集約化や連携強化を図ると同時に、長期においては出生率を回復させること”

“連携中枢都市には、東京圏の受け皿に匹敵する高度・専門的な機能集積が期待される”

7

連携中枢都市圏

8

連携中枢都市圏

三大都市圏に出なくても生活可能な都市圏域を形成する。



9

新たな広域連携の流れ

広域市町村圏

- ・都道府県が主導で、計画を策定し、事業実施。
圏域や機能の設定を国や都道府県に委ねる。

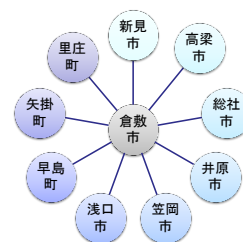


10

新たな広域連携の流れ

連携中枢都市圏（定住自立圏構想）

- ・核となる都市が中心となって、市町村間で、独自に圏域を形成。
- ・連携は、1対1の協約（契約）に基づく。



11

連携中枢都市圏の概要

連携中枢都市圏の形成



12

連携中枢都市圏の概要

③成長戦略ビジョンの策定

- ・ 圏域全体の経済成長のけん引
- ・ 高次の都市機能の集積・強化
- ・ 圏域全体の生活関連機能サービスの向上



13

圏域全体の経済成長のけん引

14

圏域全体の経済成長のけん引

- ・ 圏域全体の経済成長戦略が必要。



- ・ 広域連携のスケールメリットを活かすことができないか。
- ・ ヒト、モノ、カネを地域内で循環させる地域経済循環の考え方が有効ではないか。

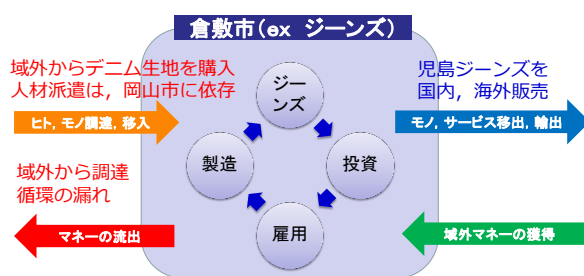


- ・ 圏域の経済実態把握が必要
(ヒト・モノ・カネの動き)

15

経済成長戦略の方向性

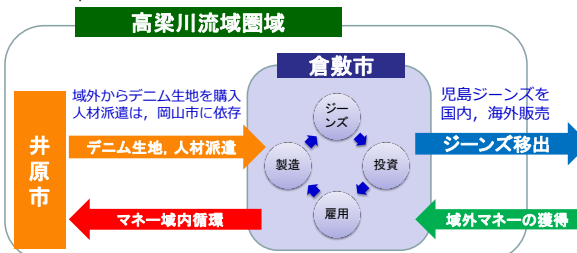
比較優位を活かした財やサービスを創出し、移出力や循環力を高め、域外へのマネー流出を最小限にすることにより、地域経済が循環する。



16

経済成長戦略の方向性

高梁川流域圏域において、域内調達を高めることにより、地域経済循環効率を高めることが可能ではないか。



社会的共通資本としての高梁川が存在、川の上流と下流は、産業の上流と下流と同じ。役割分担、機能分担のあり方について検討が必要。

17

ヒト・モノ・カネの分析

18

ビッグデータを活用したヒトの動態調査

携帯電話の位置情報である**ビッグデータ**を活用して、広範囲の調査を効率的に実施し、実態を把握する。



19

観光動態調査結果概要

域外に**マナー**が流出している。
倉敷市は、岡山県1の観光都市だが、経済効果は限定的。

図1) 圏域来訪者の旅程
- 日帰りが6割

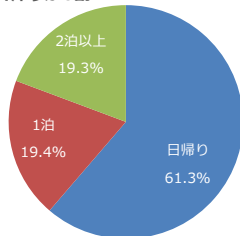
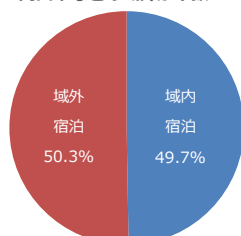
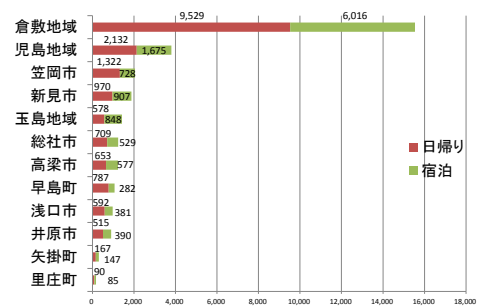


図2) 圏域来訪者の宿泊地
- 岡山市などの域外が半数



20

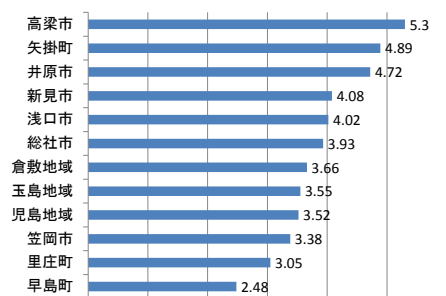
観光エリア別 来訪者宿泊区分別数・構成比



21

観光エリア別 平均滞在時間

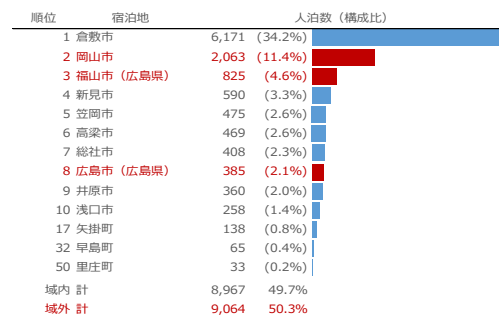
・平均滞在時間は、**3.74時間**。



22

来訪者宿泊先

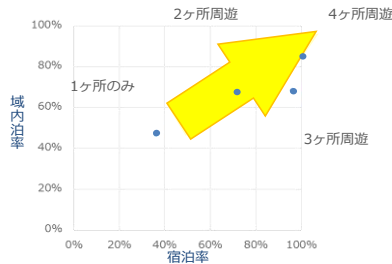
- ・宿泊先は、倉敷市に次いで、岡山市が2番目に多い。
- ・高梁川流域圏外に**50%以上**流出している



23

分析調査

- ・周遊箇所数増加の影響を分析すると、2ヶ所周遊で 宿泊率 36%→71%、域内泊率47%→68%にUPする。
- ・2ヶ所周遊により、宿泊率、域内泊率ともに大幅に改善
- ・周遊箇所を増やすことにより、域内宿泊率が高まる。



24

どんな周遊プランが考えられるか。

- ・観光エリア別の性年齢層比率
- ・来訪者属性に近い観光エリア同士が周遊しやすいのではないかな？

観光エリア名	来訪者数	10～29歳		30～49歳		50歳以上	
		男性	女性	男性	女性	男性	女性
倉敷地域	15,545	12.8%	14.8%	17.1%	16.4%	19.0%	19.9%
児島地域	3,807	12.6%	11.4%	18.9%	16.7%	22.6%	17.8%
笠岡市	2,050	13.2%	10.8%	25.6%	15.2%	21.0%	14.0%
新見市	1,877	13.0%	8.6%	23.2%	18.0%	20.9%	16.4%
玉島地域	1,426	14.6%	14.0%	26.0%	12.2%	21.3%	12.0%
総社市	1,238	14.1%	16.5%	21.7%	16.1%	21.1%	10.5%
高梁市	1,230	12.6%	11.7%	22.4%	16.9%	27.4%	9.0%
早島町	1,069	12.3%	11.5%	19.9%	18.1%	20.6%	17.6%
浅口市	973	13.9%	8.3%	23.9%	15.1%	22.3%	16.5%
井原市	905	12.4%	13.3%	21.7%	20.8%	21.7%	10.1%
矢掛町	314	12.4%	10.7%	24.4%	20.1%	25.8%	6.6%
里庄町	175	5.6%	8.1%	22.0%	21.8%	34.2%	8.2%

は、相対的に高い割合、 は、相対的に低い割合を指す。

25

どんな周遊プランが考えられるか。

- ・歴史、伝統ある観光資源をめぐる周遊プランが考えられるのではないかな？



26

ビッグデータを活用したモノ、カネの調査

高梁川流域圏の産業連関表を作成、地域経済構造分析により数値データに基づく地域経済の特性分析と理解

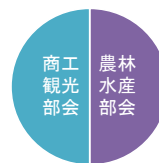
- ・経済センサスデータ
- ・圏域内事業所調査
- ・消費者購買動向調査

27

高梁川流域連携事業

28

高梁川流域経済成長戦略会議



戦略に基づく施策の立案事業実施調査結果をもとに、戦略協議

- ・産学官民一体となった**経済戦略の策定**、国の成長戦略実施のための体制整備
- ・**産業クラスター**の形成、**イノベーション**実現、**新規創業促進**、地域の中堅企業等を核とした**戦略事業**
- ・地域資源を活用した**地域経済の裾野拡大**
- ・**戦略的な観光施策**
- ・その他、**圏域全体の経済成長**に係る施策

29

高梁川流域地域資源活用推進事業

高梁川流域圏における地域資源で
付加価値の高い（競争力のある）ものは、積極的に移出。

高梁川流域地域資源



桃、マスカットなどの農産品、デニム、ジーンズなどの製造品の国内販路開拓、海外販路開拓

30

町家・古民家イノベーション事業

圏域内の町家・古民家138件の実態調査を行い、活用案を作成。町家・古民家を改修するなど、町並みを活かした特徴ある取り組みを実施。点と点の地域資源を結びつけ、圏域の魅力を高める。



31

データで紡ぐ高梁川流域事業

圏域の自治体等が保有しているオープンデータ、ビッグデータ（人口・経済等のデータ）を一元的に集約し、地域の住民や事業所等がまちづくりやビジネスに活用できるよう加工・分析・ビジュアル化する「仕組み」と「人材」を整備する。人口予測データをベースにした買い物難民等の発生予測を今年度中に実施予定。



32

今後の課題

33

今後の課題

- ・市町との連携強化、関係強化、都道府県との役割分担。
- ・圏域の個性と魅力を活用した総合力の発揮。
- ・経済構造を改革できるか。

34

おわり

35

“仕事を通じて地域や社会に貢献する起業”

その増加を実現させる支援とは

白川 裕也 氏

仙台市 経済局産業政策部地域産業支援課



改めまして仙台市役所で起業支援の仕事をしております、白川と申します。宜しくお願ひします。このソーシャルイノベーションサミットへの参加のきっかけですが、4月にアンケートがありまして、こういったものがあるのであれば是非参加したいと回答して、今年たまたま政令市の会議が仙台市でありまして、サミットやるので来ませんかとお声がけを頂きました。

私は市役所入って8年目ですが、最初の3年間は福祉の仕事をしておりました。障がい者福祉でして日々課題のある方のご相談に乗るケースワークのような事をしていました。その後震災が起きまして残りの5年間、今までですが、経済局の産業政策の部署に長くおまして、そこで経済の面から復興を考え続けてきた人間です。宜しくお願いします。

最初に、宮城県の仙台市についてお話をさせていただきますが、仙台市はご存知でしょうか。東北のだいたい真中にありまして、宮城県の県庁所在地になります。東北地方唯一の政令都市でございまして市域も広くて山形県から太平洋までつながったようなエリアになります。仙台は杜の都と呼ばれていまして、シンボルストリートが定禅寺通という非常に大きなケヤキの木に覆われた緑豊かな通りになります。左上の写真からいきますと、春は仙台・青葉まつりという伊達政宗公を祀るお祭りでして、山鉦が沢山練り歩きます。前の方で踊っている人たちですが、仙臺・すずめ踊りという踊りがありまして、仙台城を造るときに石工さんたちが伊達政宗公に舞いを披露したというのが始まりとなっています。右上が仙台七夕まつりの写真でして、東北三大祭りと呼ばれているのですが、動きが全くないお祭りです。こういった吹流しが吊ってあるだけではあります、非常に多くの方に目で楽しんでいただくお祭りになります。左下の写真が秋の様子ですが、定禅寺通りを封鎖しましてケヤキの木の下でジャズフェスティバルをしています。年々人が増え、参加する方も増えて非常に音楽で盛り上がるそんな時期です。右下の写真がキラキラしているのですが、12月6日に始まりまして、SENDAI 光のページェントと言いましてケヤキ並木に電球を付けて、3、4百メートルくらいでしょうか、ライトアップされる、電飾できれいに光るイベントです。今年でちょうど30年経ちまして、これは市民の活動から始まったイベントになります。

今年の仙台のトピックスとしては、今まで南北線という一本の地下鉄が走っていたのですが、今年の12月6日に東西線という横の地下鉄が新しく出来上がりました。

南北線は住宅街を結ぶバブルの後くらいにできた路線ですが、東西線は仙台の産業構造を結ぶ地下鉄と言われています。西の終着駅が八木山動物公園という日本で一番高い地下鉄駅になります。そこが山になっていまして、その周辺に東北大学等の高等教育機関が集積しています。ここから山を下ってきて、コンベンション施設等があつて、広瀬川を渡って中心市街地があり、そこを過ぎて国分寺など歴史的に伝統のあるエリアがあり、そこから郊外の卸売団地ですとか工業団地がありまして、そこから東部の畑や田んぼが広がっているような田園地帯に繋がっています。この東西線ができることによって今までばらばらだった色々な産業支援機関が鉄道で繋がる、人の動き活発になってきます。

今、この東西線に対して色んな期待が込められています。私たち仙台市が起業支援に力を入れるきっかけになったのは、もうすぐ5年を迎えますが、2011年3月の東日本大震災が大きなきっかけになりました。市内だけでも1000名近い方が亡くなりまして、東北全体でいうと2万人近い方が亡くなって、それ以上の方が仕事を無くし、家を亡くし、家族を亡くした、そんな大きな災害だったのですが、その後に東北のなかに、本当に規模は小さくても何かしたいという方が増えてきました。先ほどのお話にもありましたけれど、東北以外からも沢山の人が来て何かを始めたり、職を失ったので起業するしかないという方も含め、そういった思いを持ってやっている人たちが増えてきています。私たちは、東北で起業家が増えているという状況が非常に望ましいと思っていまして、新たな未来を切り開いてくれる人材であり、私たちはこういった人達を積極的に応援していきたいと考えています。仙台は幸い、1000名の方々は亡くなりましたけれど、中心市街地はほとんど被害がありませんでした。復興のベースキャンプとして沿岸部ですとか、より被害のひどかったエリアに人を送り出して行った、そんな経過もありましたので、沿岸部でまだ復興が終わっていない所がある中で、例えば仙台に来ていただいて、学んで、また沿岸部に戻ってそこで地域を元気にしていく、そんな人達を育てていける街を目指したいなという想いがあります。ただ、こういった起業家の動きもありながら、仙台のある東北地方というのは、復興した後は、震災前からの課題があります。

先ほどお二人もお話されていましたが、東北も人口減少が進んでいます。しかも他の地域に比べてより早く人口が減っていく。さらに人口が減ると共に少子高齢化が進んでいます。こういった状況は、仙台はやはり東北に支えられて発展してきた歴史がありますので、東北の人口が減って元気がなくなっていく、そうすると仙台も元気がなくなっていく。これをどう私たちは手を打っていくのか。そうした中で、地方に魅力的な仕事を作っていく。そして、新しい働き方として起業という選択肢を提案していく。何かこうしたいという思いを持った人達を支援するようなことができないだろうかと考えました。特に復興後を見据えた新たな経済成長が、イノベーションが必要だという想いをもちまして、2014年の2月に、復興後を見据えた仙台市の発展を確実にするための仙台経済成長デザインという仙台市の経済の中期計画を作りました。大体一カ月くらいをかけて、経済局では100人位職員がいるのですが、ほぼ徹夜でずっとブレストをして、空いた時間でポストイットを貼りまくってこんなことがで

きないかな、とかそんな話をして創り上げた計画になります。その中の4つの数値目標の一つとして、平成29年までに新規開業率を日本一にしよう、「日本一起業しやすいまち」を目指そうという事を打ち出しました。この目標を実現するために、9つの戦略プロジェクトのうちの一つに「スタートアップ・センダイ」というものがあります。この計画に基づいて私たちは仙台市起業支援センター“アシ☆スタ”というものを立ち上げました。

仙台市はこれまでも起業支援を10年以上、本当に長い間やってきましたが、今までは仙台市産業振興事業団という組織の中の経営相談の一つとしてやっていました。産業とか振興と言われると、普通の人はいあんまり寄り付かないんですよね。なんだか重たいイメージがあって、企業を誘致しているんじゃないかとか、製造業を支援しているんじゃないかとか、そんな思いを持たれる方が多く、ほとんど起業の相談に来る方がいらっしやいませんでした。そこで、起業しやすい街を目指すのだったら旗を立てようと、起業支援センターという名前を付けました。別に新しい箱を作ったわけではないです。係一つに名前を付けて、看板を一枚作っただけですけど、それだけで相談の数は劇的に増えました。あとはアシ☆スタという愛称も付けまして、親しみやすい存在になろうと。起業家に寄り添った存在として私たちはやっていくんだという想いも込めました。あとはちょっとキャッチーなロゴも作りました。こういった物を打ち出して、とにかくどんな小さな相談でもいいので来てください、そういうことをPRしています。このアシ☆スタという言葉には3つ意味が込められています。「スタートアップ＝起業家をアシストする」ですとか、「明日スタートしよう」、「明日のスターを生み出す」、という想いが込められています。アシスタの支援メニューですけども、そんなにとがったことはやっていなくて、起業相談で色々なことをやっていきます。ポイントとしては、ライターとかデザイナーとか普通のコンサルタントだけではなくて、色々な文章をつくる支援、キャッチコピーをつくる支援をしています。

女性の相談が増えてきていますが、ネクタイを締めた男性には相談しづらいよという声がありまして、女性のための起業相談DAYといったものを作っています。その他に、セミナーでもいろいろなテーマで開催したり、女性限定、シニア限定、あとはすべてのセミナーに託児を付けるといった工夫をしています。新しいホームページも作りまして、通常支援機関のホームページは自分の所の情報だけでつくるのですが、アシ☆スタの場合、色々な連携している団体の情報も全てここで見られるようにしてまして、ここに来れば大体色々な事がわかる状態にしています。その他には、10月26日にオープンしたばかりですが、起業家として経営を専門家に相談するというのはいいんですが、そうじゃなくて同じような起業家の人達と繋がりたい、そんな人達と意識を共有したい、というニーズがありまして、アシ☆スタ交流サロンというものをつくりました。ちょっとやわらかい感じで、居心地のいいような空間を目指して、ビジネス書なども置いて、自由に利用して頂ける場所です。ここで起業家の交流会をやったりミニセミナーをやったりしています。

また、起業家を増やしたいという想いの中で、何で増えないんだろうかなと思った時に、起業家ってあんまり身近にいないんじゃないだろうかと思いました。職業体験

をするとその仕事がわかるのですが、起業家の体験ってなかなかできないんですよ。それだったら、その起業家を見られる場をつくろうということで、起業家応援イベント「SENDAI for Startups! (センダイ・フォー・スタートアップス)」を始めました。中身としては、著名なスター起業家を基調講演に呼び、どうして起業したの?とか、どういう苦労をしてきたの?といったことを生の声で語っていただいて、その後に仙台や東北で活躍するちょっと先に行っている人たちからのプレゼンテーションをしています。昨年度は、ビジネスグランプリの最終プレゼンテーションをここでやりまして、今こんな人たちがこんなことをやろうとしている、これいいね、やりたい、参加したい、といったことがありまして、そのあとに交流会があってもものすごく盛り上がりました。そこで商談があって、採用の話がこうあった、といったことを聞いているんです。

もう一つ、ソーシャル・イノベーション特区というものを国家戦略特区に申請しました。中身としては、起業しやすい仕組みですとか、女性活躍や社会企業を促進する、大学で色んな実験をしているので、そういったものを規制緩和することでやりやすくする。そんな中身になります。起業に関してそんなに規制はないのですが、ソーシャル・イノベーションを東北から起こしていくぞと、そういった想いで国に申請したのになります。色々なメニューがありますので、そういったものを使いながら起業家を増やして行ければなと考えているところです。今年の新たな取り組みとしては、デザイン思考のワークショップをやります。デザイン思考は、新しく何かを始める時に早めに試作品を作ってマーケットに入れ、フィードバックを受けて更に修正するといった仕組みですが、このデザイン思考をちょっとカスタマイズしまして、あるエリアを選び、その地域課題をフィールドワークを通して拾い集めて、その中で住んでいる人達ってどういうことで困っているのか、それに対して起業で解決できることはないかを考える、そんな取り組みを今年新しく始めます。

もう一つが、「SENDAI Entrepreneur Week (センダイ・アントレプレナー・ウィーク)」です。先ほどご説明した「SENDAI for Startups! (センダイ・フォー・スタートアップス)」は3年間やってきたのですが、1日で終わってしまうので、ぱーっと盛り上がって、ぱーっと終わるんですね。今年はそれを10日間くらい続けてずーっと起業のイベントをやり続ける、そんな事ができないだろうかと考えました。起業に関するイベントを、最初にお話した地下鉄東西線の沿線の施設を使って多発的に毎日やっているという状態を作りだして、色んな支援機関のメニューを見られる、そういった人たちに色々関わっていける、そんなウィークを今年やろうと思っています。裏のテーマとしては、イベント1本だけだとなかなか東京などからUターン、Iターンしにくいのですが、1週間くらいやっていると、シェアハウスなどに泊まりながら、そこにいる人達と繋がって、コミュニティに巻き込まれて、あわよくばUターン起業などしてくれないかなと、そんなことを思っています。開催されるイベントのイメージとしては、チャレンジショップの卒業生のマルシェとか、ちょっとした相談会ですとか、起業家セミナーですとか、デザイン思考のワークショップ、トークセッション、先輩起業家を訪れるツアーですとか、そんな事を今計画しています。仙台市の取り組

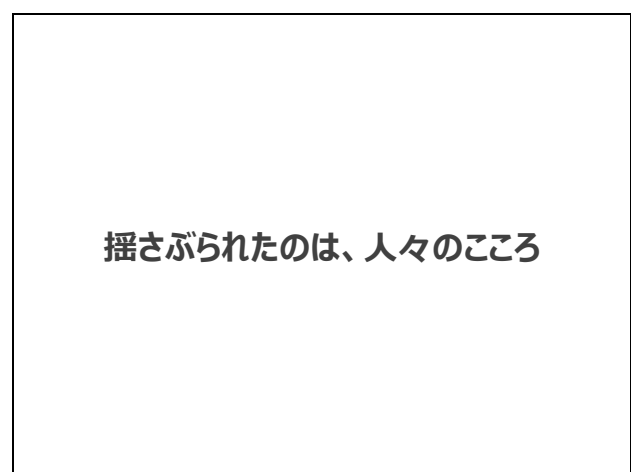
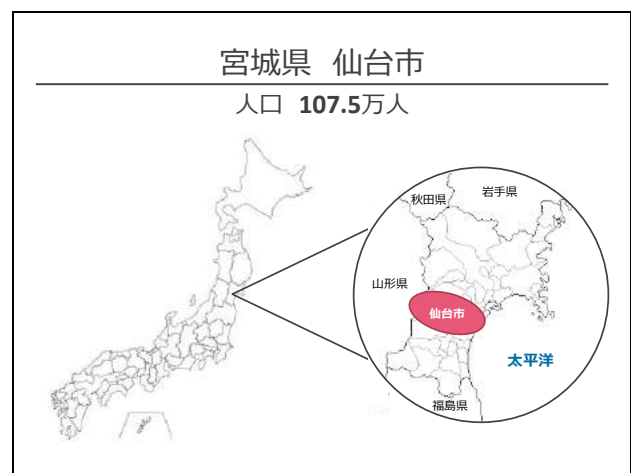
みとしましては、ちょっと駆け足になりましたが、ご説明させていただいた通り、色々なことをやっています。

最後に、私たちがキャッチフレーズとして使っているこの「SENDAI for Startups!」についてです。これには2つの想いが込められています。一つは、起業家のための仙台、日本一起業しやすいまちを目指して色んな事やっていこう、という想い。もう一つは、仙台自体が起業家のような方向に向かっていく、もっとチャレンジングな市になっていこうという想いが込められていまして、とにかく面白いなと思ったらそんなに予算を掛けずにちょっとやってみて、そして、フィードバックを受けてまたちょっと改善して来年やってみる、といった形です。そんな事を今仙台では、やっています。

これからも色々なことをやっていきたいと思いますので、この後もワークショップなどありますので、もしいいアイデアですとか面白いお話を聞かせていただければと思います。

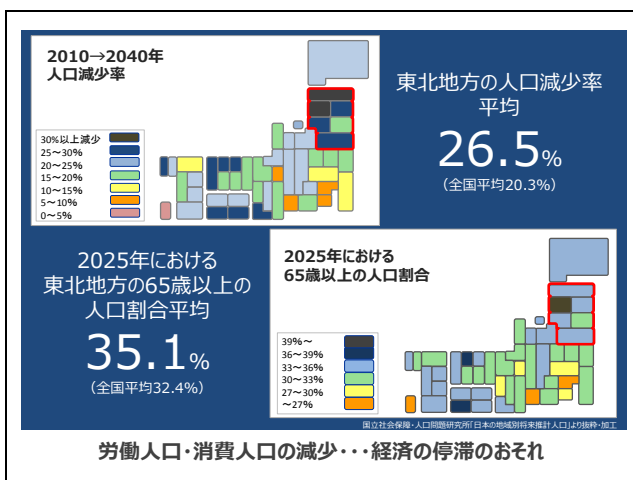
以上です。ご清聴ありがとうございました。

【仙台市発表資料】

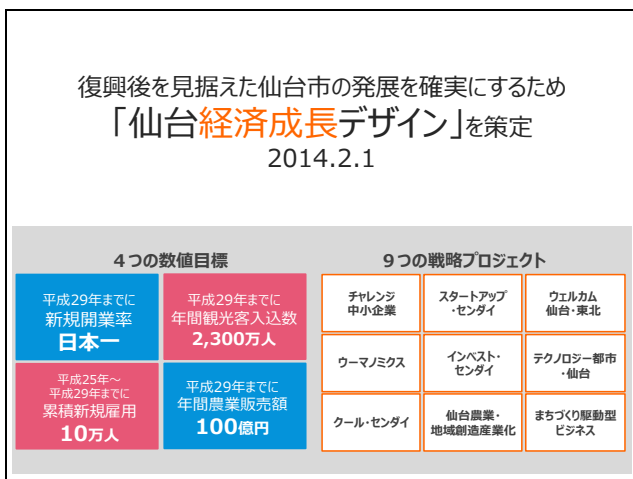




復興後には、震災前からの課題



復興後を見据えた 「新たな経済成長」が必要



仙台市起業支援センター

アシスタ

“スタートアップをアシスト”
“明日、スタートしよう”
“明日のスターを生み出す”

起業相談

- ・平日毎日相談員2名が常駐
(中小企業診断士、金融機関OB)
この他に**ライター、デザイナー**が内容に応じて対応
- ・**女性のための**起業相談Day (火・木・金)
- ・**週末・夜間**の起業相談 (それぞれ月1回)
- ・起業**ワンストップ**相談Day (月1回程度)

POINT!

起業家セミナー

- ・起業の**段階・課題**に応じた**テーマ**
入門編、事業計画編、営業戦略編、
準備・手続き編、販促力UP編
- ・**女性限定・シニア限定**のセミナーを開催
- ・内部講師を活用し、受講者を**個別相談に誘導**
- ・セミナーは**全て託児サービス付**

POINT!



仙台市の起業支援情報ポータルサイト

アシスタ



支援情報ピックアップ

仙台 起業

<http://www.siip.city.sendai.jp/assista/>

夢が集まり、つながる。アイデアを、カタチに。
明日の仙台をつくる起業家たちのスタートアップサロン。

アシスタ交流サロン

2015.10.26オープン



熱く 蒼く



起業家応援イベント

SENDAI for Startups!



2015.2.8 地方最大738名の起業家・支援者が集結

仙台
Social Innovation SENDAI
特区

地方創生特区
女性活躍・社会起業の改革拠点
2015.8.28指定

起業しやすい
しくみづくり

女性の
社会参加と起業
を後押しする
環境づくり

大学との連携に
よる近未来技術
の実証

ソーシャル・イノベーションを東北から

Design Thinking Workshop
@OROSHI-MACHI
2016.1.30(Fri) – 31(Sun)



仙台市若林区卸町に新設された
“INTILAQ東北イノベーションセンター”を中心に、
デザイン思考を用いて、
卸町の既存施設や特徴、地域資源、
さらには空き家や空き倉庫などを活かして、
新しい“まちづくりアイデア”の創造を目指す。

SENDAI Entrepreneur Week
2016.1.22(Fri) – 31(Sun)

起業・創業に関する様々なイベントを
地下鉄東西線沿線で集中的に実施し、
“SENDAI Entrepreneur Week”を通じて、
“起業”という選択肢を東北に根付かせ、
起業への憧れを創出し、起業家を増加させ、
“日本一起業しやすいまち”の実現へとつなげる



(4) ワークショップ

①企画・運営

NPO法人ミラツク

②概要

2つのワークショップ会場に分かれて実施した。

【ワークショップ①】

「事前に自治体等から提案された課題について取組内容を知りたい・一緒に取り組みたいという課題がある方」、「現在、具体的な行動を起こすための準備をしている方」を対象に、「地方創生のためのソーシャルイノベーション」に取り組む実践者の課題をもとに、マルチセクターによる意見交換の場を設けた。

ワークショップはワールドカフェ形式で行い、多様な人々との対話と、対話後の実践を促すことを目指した。

なお、当日出された課題は、次頁を参照していただきたい。



【ワークショップ②】

「ソーシャルイノベーションについて学びを得たい方」、「ソーシャルデザインの考え方を生かした市民協働や多セクター協働による課題解決のアイデア形成について体験してみたい方」を対象に、「地方創生のためのソーシャルイノベーション」をテーマに、概論のレクチャーとアイデア形成ワークショップを実施した。



冒頭、NPO法人ミラツク代表の西村勇也氏によるレクチャーの後、ワールドカフェ形式による対話を実施した。

(5) 交流会

①参加者数

93名

③概要

立食形式により、闊達な意見交換が行われた。

【ワークショップ①で提案された課題】

1 神戸市の玄関口である三宮駅前を整備をめざすクロススクエアを使って何をする。＜秋田 大介さん（神戸市役所）＞

神戸市では今年の9月に、神戸の中心地である三宮とその周辺の将来ビジョンと再整備に関する構想を策定した。

その中で、三宮駅前を走る東西8～10車線と南北6～8車線の幹線道路の一般の自動車の流入を規制し、歩行者と公共交通だけが入れやすいような広場（クロススクエア）を整備しようと打ち出しました。今後はクロススクエアを駅前の滞留、交流拠点として活用し、神戸の玄関口に相応しい場所にしていこうと考えています。

神戸の玄関口の三宮、その駅前の空間において、いかに神戸らしい景観を形成し、五感に響く心地良い空間を創っていくにはどうしたらいいのか、何をすればよいのか、議論できればと思います。

2 SILKがあなたの街にある未来＜秋葉 芳江（京都市ソーシャルイノベーション研究所）＞

4月に設立したSILKの8か月間の事業内容とSILKが目指す未来を共有した上で、もしも、SILKがあなたの街にできれば（あれば）どんな未来が描けるだろう。

皆様と未来イメージを膨らませていきたい。

3 町内会（自治会）をリデザインする。地方創生は町内会単位で考える。＜秋山 怜史さん（一級建築士事務所 秋山立花）＞

町内会をリデザインすることで、地域の課題を「新しい仕事」として解決していけるためのアイデアを語り合いたいと思っています。

4 「福岡が世界のLiving Lab 先進都市になるための方法を考える」＜石丸 修平さん（福岡地域戦略推進協議会）＞

福岡を中心とする9市8町は250万人規模の福岡都市圏を構成しています。

産官学民のプラットフォームである福岡地域戦略推進協議会（Fukuoka D.C.）は、福岡市と共同提案し採択された国家戦略特区や様々なまちの機能、施設等を活用し、Living Lab（社会実験）のフィールドを提供します。

福岡が世界のLiving Lab 先進都市となるための、課題の解決策や手段、あるいはビジネスと一緒に考えませんか。

5 イノベーション創出と地域経済循環に向けて～どんな事業が考えられるか～＜今井 透さん（滋賀県庁）＞

人口減少・少子高齢化の急速な進行や経済のグローバル化の進展など、経済・社会の構造的な変化が進む中、滋賀県の資源や強みをしっかりと引き継ぎ、最大限に活かしながら、滋賀から、これからの時代を切り拓く「新しい価値」を創造、発信し、本県経済の発展や雇用の維持・拡大、地域の活性化につなげていくことが重要です。

○環境保全と経済発展の両立など、国内外の課題解決への貢献

○地域の多様性や固有の資源を活かした魅力向上

○地域での人と人のつながりの構築など、暮らしの安全・安心

これらの実現に向け、産業に携わるすべての関係者が一体となって、「変革と創造」に挑戦し、国内外の需要を開拓し、取り込むことのできる、本県経済の成長の“エンジン”となる産業の創出・振興を図るとともに、県内の産業や企業、人のつながりを一層深め、地域において、人・モノ・資金が活発に循環する経済社会づくりを進める必要があります。以上の認識のもと、平成 27 年 3 月に「滋賀県産業振興ビジョン」を策定しています。

ワークショップでは、産業振興ビジョンについて簡単に紹介させていただいた後、①イノベーション創出と②地域経済循環に向けてどんな事業が考えられるか、みなさんと議論できればと考えています。

6 あなたのまちでも kitokito しませんか？＜加藤 明さん（新庄市役所）＞

買うだけじゃない。売るだけじゃない。手作りされた物を通して人と人が触れあう場所。そして時間。kitokito MARCHE(キトキトマルシェ)は、作った人から直接買い、感想を直接伝えることができる場所です。キトキトとは、蚕やアオムシが葉っぱの上をゆっくりと歩く様子を表すお国ことば。お客さまにゆっくりとした休日を過ごしてほしい、そしてこのプロジェクトがゆっくりと一步一步、着実に歩んでいきたいという想いがこめられていいです。kitokito MARCHE は、大量生産、大量消費ではない、身近にある「食」、暮らしの中にある「手しごと」、失われつつある「つながり」を再生し、地方での暮らしを楽しむことを目指しています。昭和初期に建てられた旧蚕糸試験場の歴史的建造物を背景に、農村を活性化するソーシャル・プロジェクト。あなたのまちでも kitokito してみませんか。ぜひソーシャル・イノベーション・サミットで情報を共有しましょう。

7 県外CSO（NPO、NGO）と一緒に地域を盛り上げたい！＜川崎 まり子さん（佐賀県庁）＞

社会の課題解決に向けて活動しているCSO（市民社会組織：NPO、NGO）。

今の地では、自らの想い、ノウハウをいかしきれない。

そこで、佐賀県で社会らの課題解決を行いながら、県内NPO・NGOや行政と一緒に地域を盛り上げてくれる全国各地のCSO（NPO、NGO）の進出をお待ちしています。ふるさと納税（NPO等指定寄附）、行政への協働提案制度等、佐賀にはCSO（NPO、NGO）を支援する基盤が揃っています。

ぜひ、佐賀県をフィールドとして一緒に活動しませんか！

8 日本一起業しやすいまちをめざして＜白川 裕也さん（仙台市役所）＞

未曾有の被害をもたらした東日本大震災から 4 年 10 ヶ月。この間被災地では、復興のため、地域課題の解決のため、数多くの起業家が立ち上がっています。

仙台市では、こうした起業家の動きを加速させ、被災地の復興とその先の地域経済の発展のため、「日本一起業しやすいまち」をめざし、仙台市起業支援センター“アシ☆スタ”を立ち上げ、地方創生特区の指定を受けるなど、様々な取り組みを行っています。

今、東北の最大の課題は復興ですが、これに加え、少子高齢化や人口減少、過疎化など震災前からの

様々な課題があり、どの地域よりもイノベーションを必要としています。

仙台市には、東北唯一の政令指定都市として、被災地の復興・東北の成長を牽引し、イノベーションを起こす人材を育成し、東北へ輩出する役割があると私たちは考えています。

震災以降、仙台市では、TRY & ERROR の精神で様々なことにチャレンジをしています。

ソーシャル・イノベーション・サミットでは、仙台市のこれまでの取り組みをご紹介させていただくとともに、東北でイノベーションを起こす人を増やすエコシステムをつくるため、皆さんとディスカッションをさせていただきたいと考えております。

9 はたらき暮らすリアルを魅せて学生の定着をはかろう＜田畑 真理さん（京都リサーチパーク（株））＞

産学公連携による新しいビジネス創出の拠点として、大阪ガスの工場跡地に 26 年前に開業した京都リサーチパークの管理運営会社の者です。当社は、京都の産業界・行政のサポートを得て、快適かつ安全・安心なオフィスとラボを 350 社・団体に属する約 4 千人提供している民間企業です。

私たちの問題意識は、京都は、今世紀になってから大企業を創出できていないこと、全国一高い大学生人口密度を誇っているにも関わらず、その多くを卒業時に市外へ逃してしまっていることの二つです。特に後者は、京都に限った話ではありません。高等教育を受けた若者をそこにとどめるための仕掛けについて、ご一緒にお話しましょう。学生時代を過ごした土地で、卒業後もはたらき暮らしたい、と思えるように、大人にできることは何でしょうか？

私は、さまざまな大人がはたらき暮らすリアルを体感してもらうことではないか、と考え、ワーク＆ライフ・インターンという仕掛けに注目しています。

10 小さな子どもと一緒に日本にやってくる外国人家族が安心して暮らせるまちづくり＜西 恵味さん（【SILK 伴走事業者】京都オリエンテーション）＞

外国から京都にやってきた家族の子育てや生活を応援するコミュニティ活動を、仲間と一緒につくってきました。より専門的で使いやすいサービスを持続可能な方法で提供できるビジネスの立ち上げを目指しています。

11 「シンライノテーブル」を全国に広げたい！＜西島 有紀さん（公益財団法人信託資本財団）＞

あなたはどんな社会になったら良いと思っていますか。その理想に向かって解決していきたいことは何ですか。そんな自分の欲求を見つめませんか。そしてその自分の欲求を社会の解決欲求と重ねられたら、それが世直しにつながるのではないかと考えています。信託資本財団では、この実践の場「シンライノテーブル」の参加者・主催者を募集しています。

＼合言葉は「テーブルからヨナオシ！」／

まずは参加者同士が自分のやりたいことや想いをシェアし、共に社会の解決欲求につながる部分を探し、仲間と行動に結び付ける場です。京都の他に熊本市、滋賀県彦根市でもスタートしました。興味を持っていただける方、自分の地域で開催したいという方、ぜひソーシャル・イノベーション・サミットでお話しましょう！

12 地元が必要とされる病院を！＜伴 正海さん（高知医療再生機構企画広報戦略室特任医師）＞

治療を必要とせず健康で長生きし、もし仮に治療が必要になっても質の高い医療をなるべく安価に受けられる地域。

介護が必要となっても、なるべく自立しながら人々に支えてもらって暮らし続けられる地域。

そんな地域の核になる病院をつくってみませんか？

13 「商業施設における有償の地域ボランティアによる託児サービスの仕組み」を考えた
い！＜深川 光耀さん（京都市 まちづくりアドバイザー）＞

洛西ニュータウンの子育て環境の向上を目的に、2013年からラクセーナ商店会、京都市住宅供給公社洛西事業部と連携して、商業施設内での託児サービスに取り組んでいます。

子育て支援や高齢者福祉などを多様な主体の連携によって地域で担っていくことの可能性やその仕組みをどう構築していくかについて、本事例を題材にしながら、みなさまと対話できればうれしいです。

14 「田舎を守るために、何が必要なのか。何ができるのか。」＜前田 幸宏さん（倉敷市役所）＞

今後、人口急減社会の到来により、地方、特に中山間地のスーパー、ガソリンスタンド、公共交通等の社会インフラは維持できなくなると言われています。また、社会インフラの消失により働く場所がなくなると、若者の流出に歯止めがかからなくなり、地域のコミュニティは崩壊、地域の歴史、文化、伝統が失われ、地方は消滅すると言われています。

地方で生き残る圏域をつくるため、倉敷市をはじめとする「高梁川流域」の7市3町は、「高梁川流域圏連携中枢都市圏」として、自治体間広域連携による広域生活圏の形成を目指し、平成27年度から取り組みを本格化させました。

地方には、都会にない魅力、良さがあります。都会とは違う生活スタイルが田舎にあります。地方が消滅しないために、田舎を守るために、何が必要なのか。何ができるのか。地方圏が目指すべき将来ビジョンについて、皆さんと議論できたらと思います。

15 「ソーシャルビジネスの評価のポイント」＜真下 隆三さん（京都信用金庫）＞

地域の絆づくりに取り組む金融機関から見る、ソーシャルビジネスの評価のポイントについて、サミットに参加の皆さんと意見交換をしたいと考えています。キーワードは公益性。そして、事業性。

16 「内省（リフレクション）があたりまえの社会をつくりたい」＜松原 明美さん（【SILK 伴走事業者】一般社団法人こころ館）＞

ココロカンでは、若者（中学～大学生）やママに向けて内省（リフレクション）プログラムを届けています。ひとりひとりが内面を感じ取り、内省を行うことで気づきがおこり、内発的意欲が高まります。団体では、自己の内面を鏡のように映し出してくれる内省絵本（作・代表松原）を通したプログラムを実践。現在、内省（リフレクション）とダイアログ（対話）を組み合わせながら、自己と他者とのかわりから学べるよう企業研修用プログラムの開発をしています。皆さんとは、これからの教育の在り方、これからの企業の人材育成について、お話させて頂きたいと思っています。得に企業研修について

は、今後のプログラム開発の参考にしたいのでご意見を頂けると嬉しいです。

17 「「四方よしクラスター」の形成に向けて」＜松山 圭介さん（水俣市役所）＞

水俣市では、平成26年度に策定した「水俣市産業振興戦略2015」の中で、市の歴史や多様な自然、人のつながりなどに最大限配慮しながら事業に取り組む事業者を増やし、よりよい水俣の未来をつくる「四方よしクラスター」を形成することとしています。

これは、行き過ぎた経済効率化の末に発生した水俣病を経験した水俣だからこそ、このような問題を生まない新しい経済の姿を示していきたいとの思いがこめられています。

現在、社会課題を生まない経営についての勉強会や先進企業へのスタディーツアーなどを行っていますが、今後さらに「四方よしクラスター」の形成に向けた取組みを強化する必要があります。

ソーシャル・イノベーション・サミットでは、参加者の皆さんとお話をさせていただきながら、知恵をいただくとともに、一緒に社会をよくしていく仲間づくりができればと考えています。

18 「「美しい」村を実現するために、地域を超えてできることは？」＜依田 真美さん（NPO 法人「日本で最も美しい村」連合）＞

美しい村運動は1980年代にフランスで始まった農村の自立支援運動です。日本でも10年の歴史がありますが、「住んで良し訪れて良し」の「美しい」田舎の実現には沢山のハードルが。チャーミングな田舎の実現のために、地域を超えてできることは？

4 2日目（平成27年12月18日（金））

（１）風伝館コース

①会場

風伝館

②参加者数

11名

③概要

- ・アマタホールディングス(株)及び（公財）信頼資本財団の取組説明

風伝館と、同館2階に併設されているアマタミュージアムに設置されている資料を用いて、（公財）信頼資本財団理事長熊野英介氏の解説により、アマタホールディングス(株)及び（公財）信頼資本財団の取組説明を実施した。

- ・質疑応答

参加者からの質問に熊野英介氏が回答する形で質疑応答を実施した。



（２）KYOCAコース

①会場

KYOCA

②参加者数

40名

③概要

- ・KYOCA見学

（株）ウエダ本社代表取締役社長岡村充泰氏とKYOCA担当の前田結香氏の案内によりKYOCA内の見学を行った。

- ・（株）ウエダ本社の取組説明

岡村充泰氏の解説により、（株）ウエダ本社が手掛けるリノベーション事業について説明を実施した。

- ・KYOCAを活用した取組説明

一般社団法人オープン・ガーデン代表理事桜井肖典氏の解説により、KYOCAを活用した取組として、RELEASE;の活動について説明を行った。

- ・ダイアログ

参加者が抱えている課題や説明を聞きながら出てきた疑問点に、岡村充泰氏と桜井肖典氏が回答する形で、ダイアログを実施した。



(3) 京都市ソーシャルプロダクトマップコース

①会場

KYOCA

②参加者数

16名

③概要

- ・京都市ソーシャルプロダクトマップの作成方法紹介

京都市ソーシャルプロダクトマップの作成方法を通じて、消費者目線から多様な連携や事業者が見える状況を作るケーススタディーを解説した。

- ・ダイアログ

参加者の感じたこと、抱える課題をテーブルごとに共有した。

- ・質疑応答

参加者からの質問に前田展広が回答する形で質疑応答を実施した。



資料1 ソーシャル・イノベーション・サミット 2015 アンケート集計結果

1 アンケートの目的

ソーシャル・イノベーション・サミット 2015 に参加して感じたことや考えたこと等意見を収集し、全国の皆様と一緒に、「より良い社会」を実現するための参考とすること。

2 アンケートの概要

(1) 実施主体

京都市

(2) 実施日

平成 27 年 12 月 22 日～平成 28 年 1 月 22 日

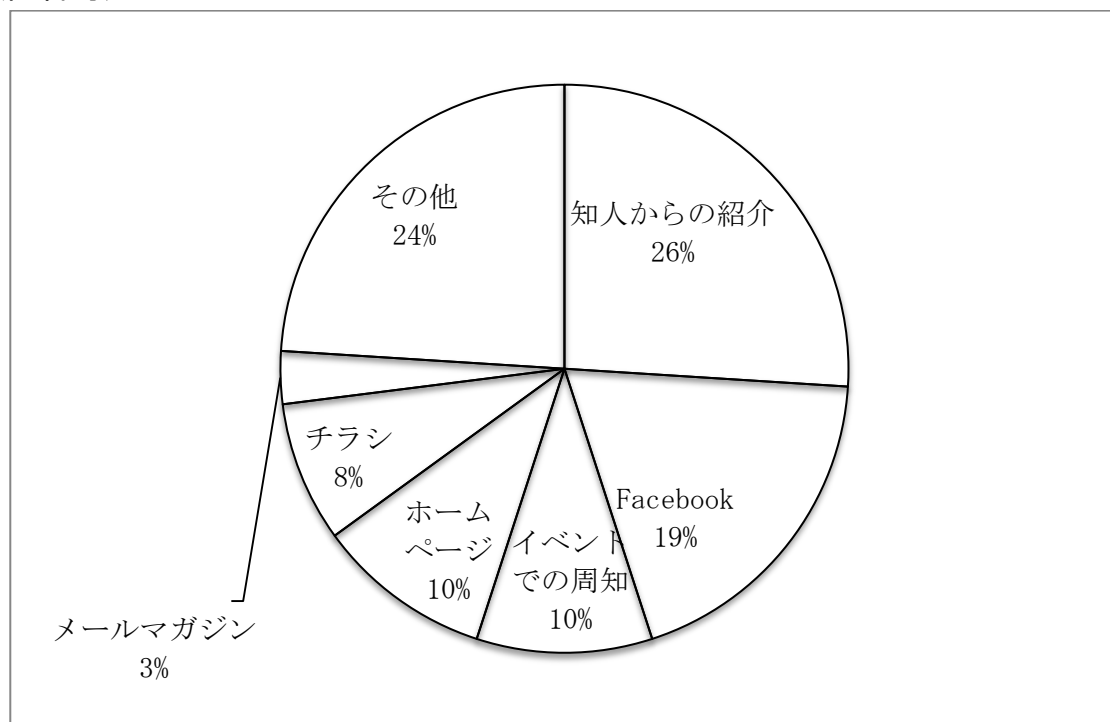
(3) アンケートの依頼方法

電子メールによる

(4) 回答状況

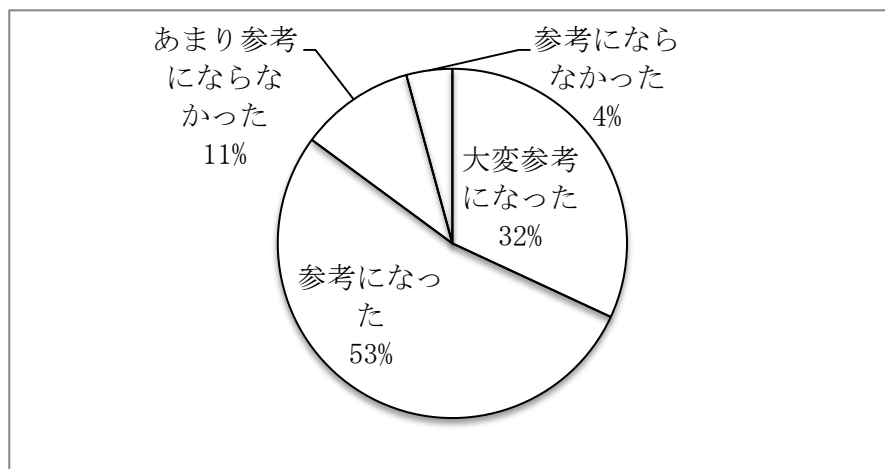
48 名から回答（参加者 207 名に依頼，回答率 23 %）

1 「ソーシャル・イノベーション・サミット 2015」を何でお知りになりましたか。 （複数回答可）

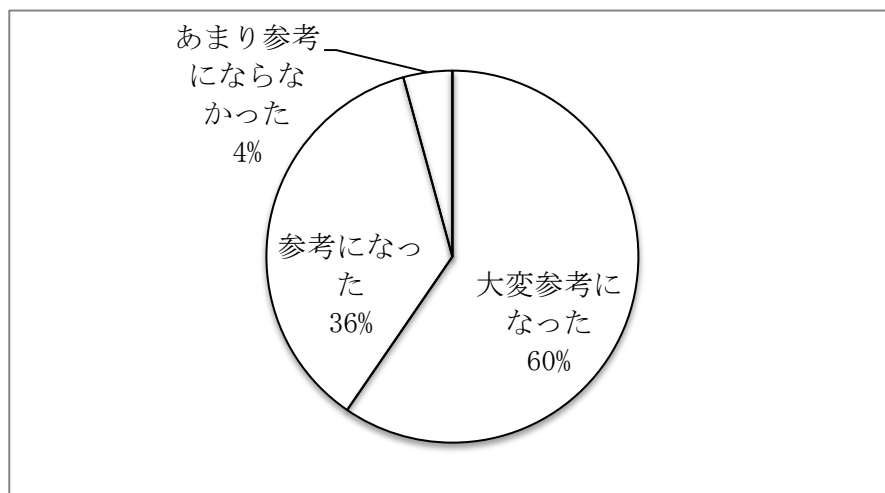


2 サミットの各プログラムは参考になりましたか。

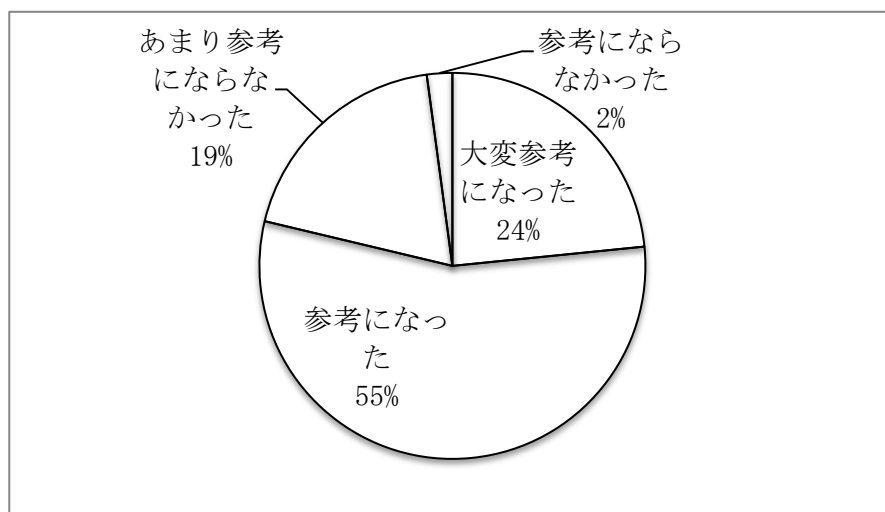
(1) 同志社大学ソーシャルウェルネス研究センターからの成果発表



(2) シンポジウム（門川大作，井上英之，大室悦賀）

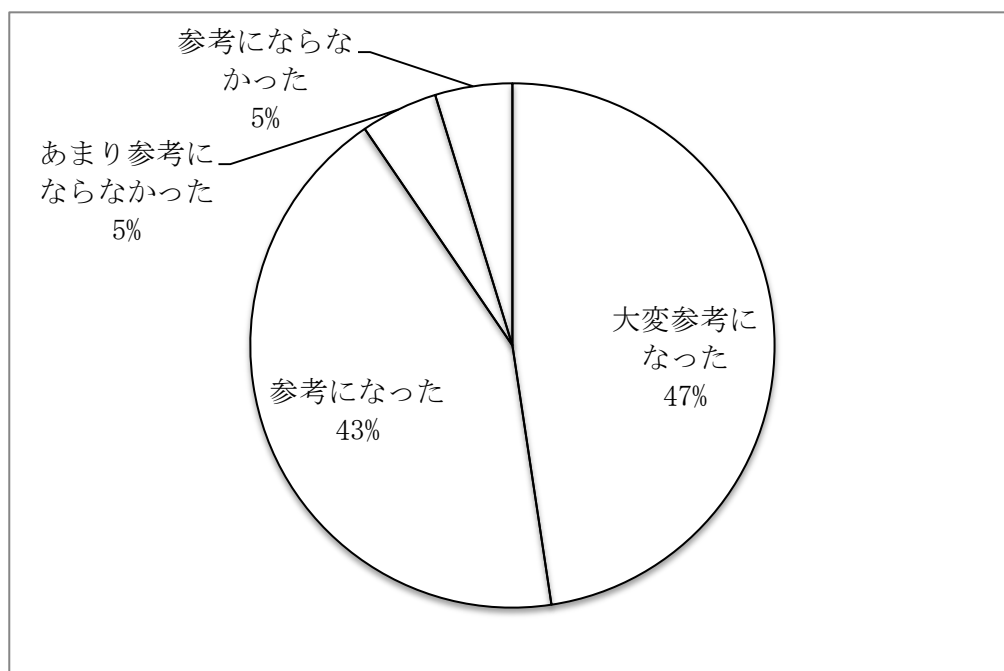


(3) 3自治体による事例発表（新庄市，倉敷市，仙台市）



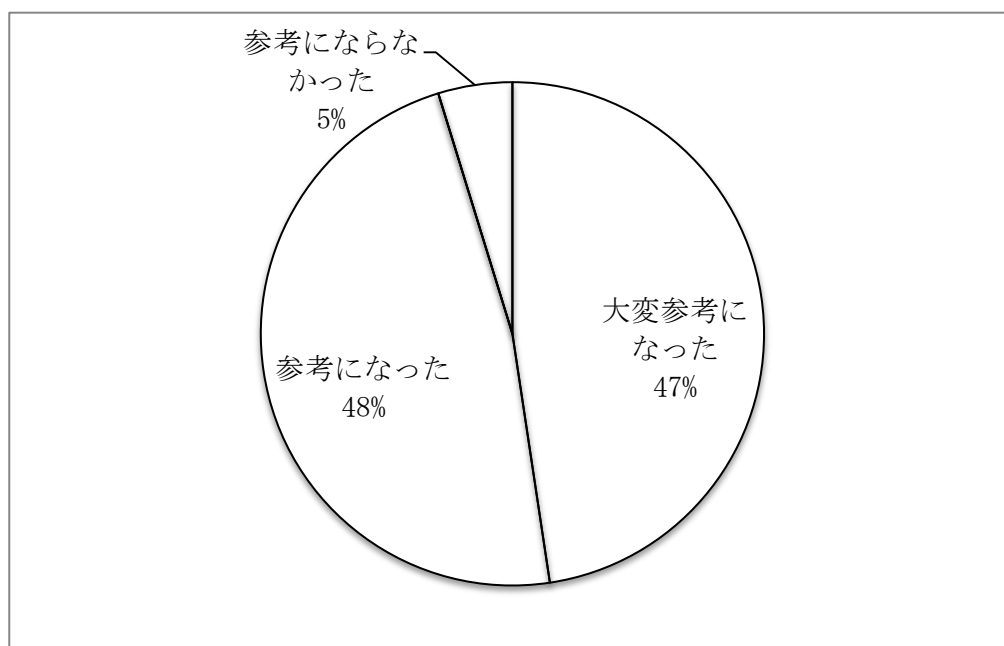
(4) -① ワークショップ 1

(実践者から出された18のテーマをもとにした意見交換の場)

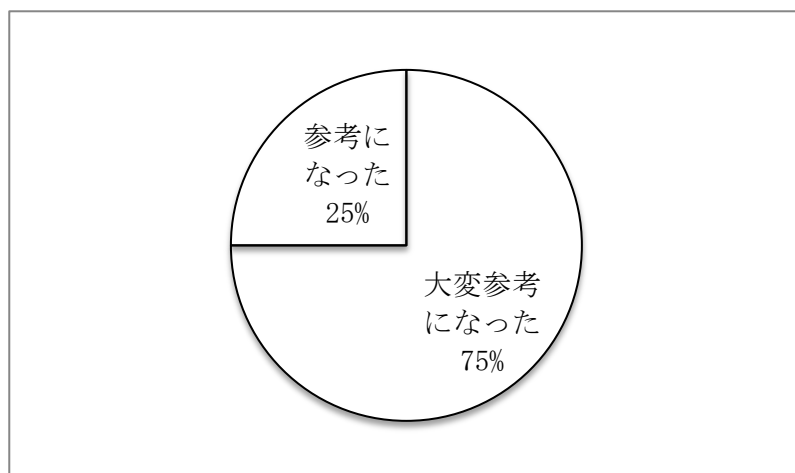


(4) -② ワークショップ 2

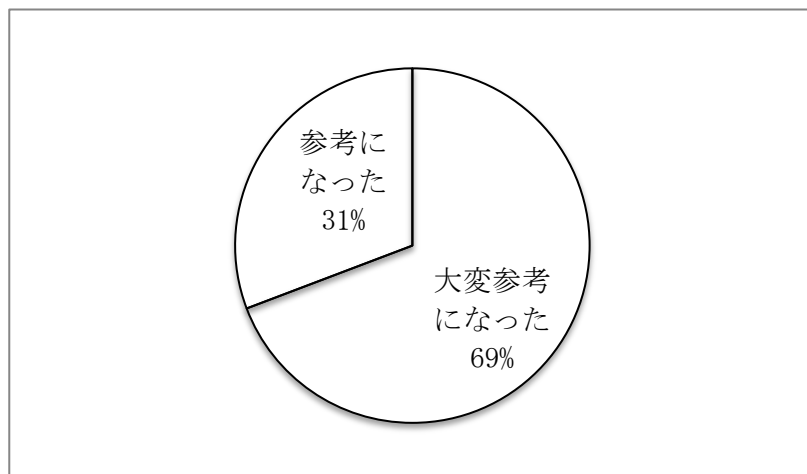
(NPO 法人ミラツク西村勇哉氏のレクチャーに基づく意見交換の場)



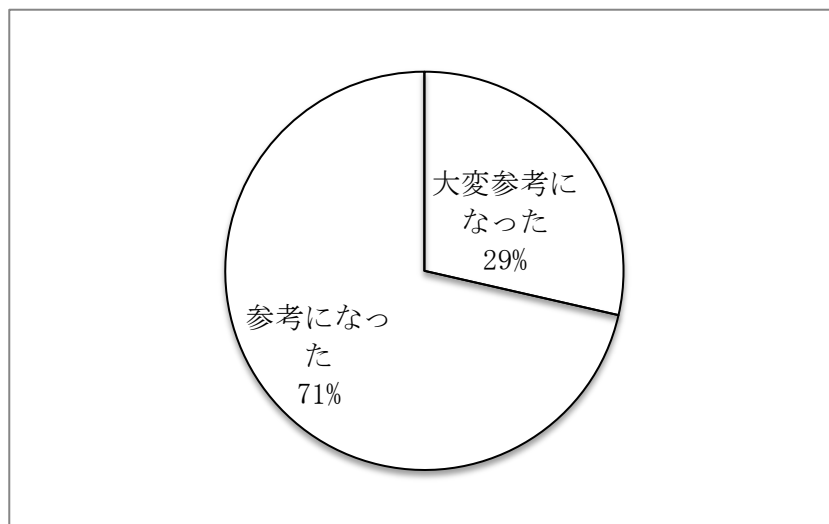
(5) -① 社会（化）見学 風伝館コース



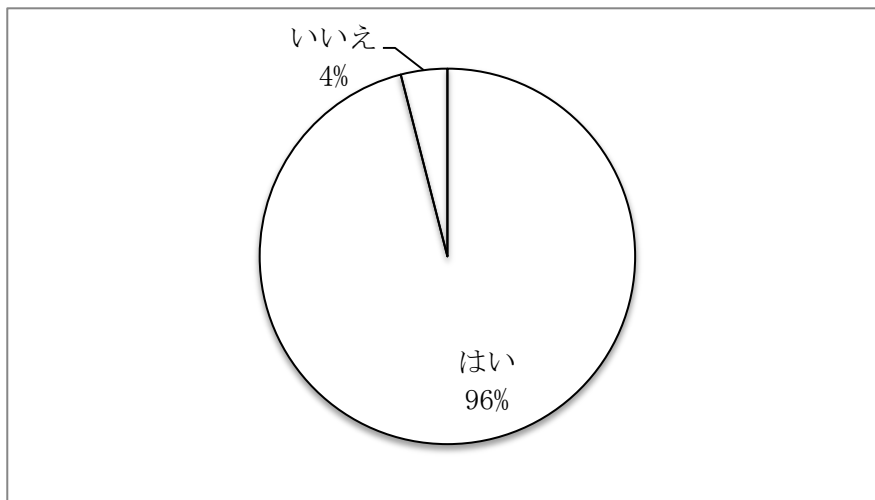
(5) -② 社会（化）見学 KYOCA コース



(5) -③ 社会（化）見学 京都市ソーシャルプロダクトマップコース



3－① 今回のサミットで、今後の施策・事業・活動の新たなヒントやアイデア，気づきを得ることができましたか。



3－② それはどのようなヒント，アイデア，気づきですか。（自由記入）

- ・違和感をもっておくという考え方。
- ・自分の中で解決してしまわず，分かったつもりにならず違和感を持ち続けることが大切ということが，実感できた。
- ・今さらながら，ですが，イノベーションとは「新結合」とのこと。余り堅く考えないで，今までにない「組合せ」を考えればいい，ということに改めて気付かされました。
- ・井上先生のお話に，事業のあり方がこれからは課題解決型から将来ビジョン実現型へと変わってゆく必要性というものがあり，日常の活動でも同じところに着目してきたのでその裏付けとなったこと。
- ・さまざまな地域の自治体の方とお話しし，自治体の意識が変わっているのだという実感を持った。またそういう地域では自治体と民間の相互の歩み寄りがあることや関係性がしなやかな印象を受けたことが大きな刺激となった。
- ・内発的なワクワク感が活動の出発点。
- ・自分や回りだけでなく，もっと広い視野や心ざしは，人の心に響くという事実を再確認できました。
- ・今回のサミットは，物事を考える姿勢などの学びも得ましたし，具体的連携の可能性ある取り組みとも出会えて意義あるものになりました。
- ・サードスペースに当事者となりうる関係者が集まり，理想を共有できる場を作ることでイノベーションを促すという仕組みづくり。
- ・行政の関与のあり方。本市の取り組みは実施主体への財政支援に偏向しており，成果検証も机上の整理に留まっているため，あらためて再考の必要性を感じた。
- ・行政が関われる可能性
- ・中小企業こそ地域課題を解決していく上でキーとなるのではないかと感じた。
- ・従来型の行政主導の地域活性化策ではなく，市民や企業とともに地域の課題を洗い出し，意見交換する中で目標を設定しながら進め，達成感を共有できることが重要だと思いました。それに

は、人と人が結びつき、自然と共存できる社会を実現していくことを考えなければならない。産業活動と生活活動を発展させる循環型社会を目指していくことだと学びました。

- ・まちづくり活動の基本的考え方のように感じた。まちづくり活動を支援する立場として、助成金ありきではなく、自身で資金を生む発想を伝え、そのための支援をしていきたいと思った。

- ・すでにあるものの組み合わせを変えることで新たな課題解決につながるという点。

- ・「良い地域」を目指すために、どのような思考で、どのようなプロセスで行動をしていけばよいのかのヒントをいただきました。

- ・ソーシャルビジネスを展開するうえでの手法など

- ・事例紹介を通じて、具体的な施策を知ることができました。

- ・ソーシャルイノベーション事業を社会貢献効果（評価）として定量測定を計画に盛り込んでおく

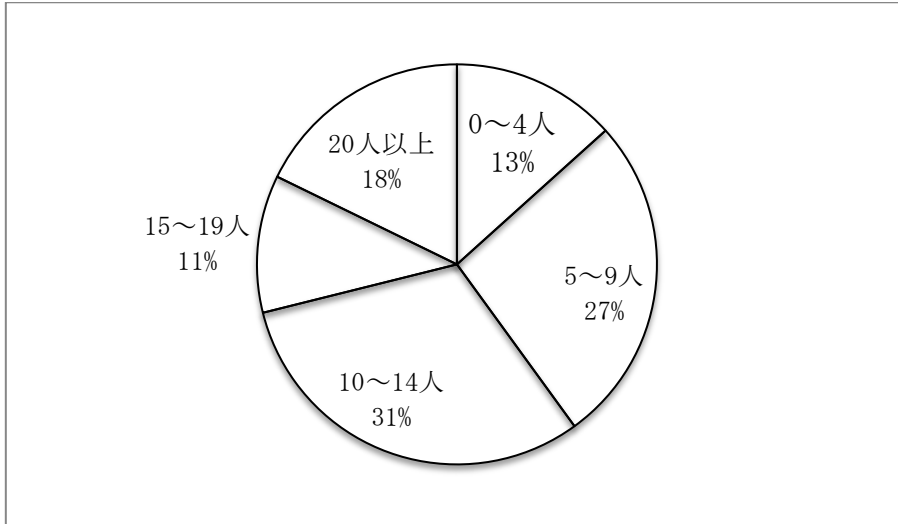
- ・先進的な事例を外部に出していく際の見せ方や公平性の担保などの課題をクリアする具体的な方法が勉強になった。

- ・ソーシャルイノベーションに取り組もうとしている人がこんなにも大勢いる。新たな社会ブームにもなりえる勢いを感じました。そういいながら、単なるブームで終わらせない、手段としての共創（ファシリテーション）や、これまですでに取り組んでこられた諸先輩方の存在（コメント）など、そのプロセスにも言及がされており、近い将来成果に結びつくであろう示唆がいくつもあったように感じました。

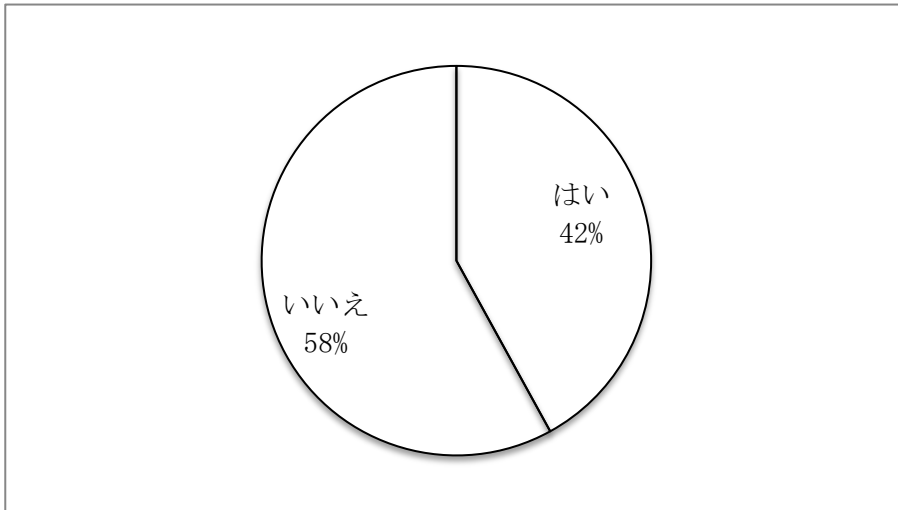
- ・人が集まりディスカッションする場の重要性を感じた。まずは場づくりから。

- ・場をコーディネートする力、市民活動の分野だけでなく経済界など幅広いネットワークを持つことが必要となってくる。

6 今回のサミットで、新たに知り合うことができた方は何人おられましたか。



7ー① ワークショップ等を通じて、新たなプロジェクトが生まれそうな予感がありますか。



7ー② それはどのようなプロジェクトですか。

- ・起業家に対する支援のありかたについて。
- ・起業家に寄り添い、導くような支援をプロジェクト化したい。
- ・まちの人間国宝さん探しプロジェクト（多世代交流を目的とした、「人間力UP」プロジェクト）
- ・健康や医療に関する意識改革
- ・行政への政策提言を地元で作るプロジェクト
- ・産後等のケアを民間とともに実施する
- ・初日のとあるテーブル主催者と企業さんとのコラボ。
- ・地元の空き施設を活用した地域ビジネス創出プロジェクト
- ・地域や社会の課題を見える化
- ・課題解決の担い手と未来をつくる実験開発

8 今回のサミットでお気づきになられた点をお教えてください。

(良かった点)

- ・多くの自治体でソーシャルイノベーションに関する取り組みをしていることに気付けて良かった。自治体による発表も特色があり良かった。
- ・盛り沢山の内容に驚きました。平日だったこともあり、定員より大幅に少なかったことが、もったいないと感じました。ただ、ワークショップを考えると、ちょうど良かったのかも？
- ・学びと交流のバランスが素晴らしかった。
- ・自分はコミュニティサイドの部局におりますが、行政組織に横串をさし、地域課題を把握し、組織内での共有と解消に向けた取り組みの調整役になることが求められております。今回のイベントを通じて、各自治体の方々と情報交換できたことは非常に有益でした。
- ・これまでの考えではなく、新たなことをしていけないといけないと思った。
- ・京都で開催されたことが良かったと思います。大学との連携もありますし、社会科見学（アマタHD(株)）もでき、感銘を受けました。
- ・ぼんやりとしていたソーシャルの世界が、さらにぼんやりしました。ただ、いろんな取り組みを知ることで、その先に自分の分野でも活用できればと思い参加させていただきました。
- ・多くの事例を発表いただけたことがよかったと思います。
- ・貴重な機会をお作り頂き、ありがとうございました。
- ・ソーシャルイノベーションに興味のある人を集める機会を設定していただいたことがとても良かった。
- ・フィールドワークとワークショップがあり、より実践的な形式で開催されたことで、知識およびノウハウを得ることが出来ました。

(改善すべき点)

- ・ワークショップでのテーマが少し漠然としていて参加者各人のとらえ方が異なり拡散、かみ合わない、また、考えあねぐところがあった。
- ・事前にワークショップの内容やファシリテーターの方の詳細など、ホームページでもっと発表してほしかった。
- ・ワークショップの具体的テーマが多く幅広い問題意識に対応できたと思います。一方で、じっくり深めることができず残念でした。1テーマに最低30分は必要です。テーマの説明を受けて問具体的題意識を理解するだけで15～20分はかかります。ともかくテーマと出会うことに主眼をおくとしても、時間不足の感がします。次回以降に生かされると楽しみです。
- ・もうすこし参加者が交わる時間が多い方が良いと思われた。なぜなら、ああいった場に来るような人どうしが繋がるのが、あの場にきた価値であり、事例等は持ち帰り資料でも共有できるから。
- ・ワークショップについて事前にもっと情報が共有されているとよかった。(テーマ、手法)
- ・テーマを担当した人にとってはよかったが、それ以外の人にとってのメリットが明確でない。
- ・パワーポイント等の手持資料を配布してほしい。
- ・自治体の発表で感じたのは、ソーシャルイノベーションについての考え方がはっきりせず、焦点が絞られていなかったと感じた。多くの自治体関係者が、何かアイデアがほしいと期待して参

加なさっているのはよく分かったが、どこも何をしたいのか分からないという印象を持った。難しい問題だが、地域創生も含めて、何かしなければという焦りだけで、ほかの先進事例をまねるか、どこかにお宝が隠されていないかと探すばかりで、独自に何をしたいのかを分かりかねているというのが、様々なイベントに参加した際の感想です。

- ・初日テーブルに別れるセッションは、準備きちんとしていないのであれば、普通に「自由に興味あるテーマのテーブルにいて自由に話してください。自己紹介はしてくださいって言えばよいし、紙に事業内容かいてあるから18テーブルの口頭説明は時間の無駄。

- ・最初のパートでの事例紹介が自治体だけって、自治体向けのイベントだったのでしょうか？ まったくそういう意図が事前には分からなかった。

- ・事例紹介は特に必要性を感じなかった。

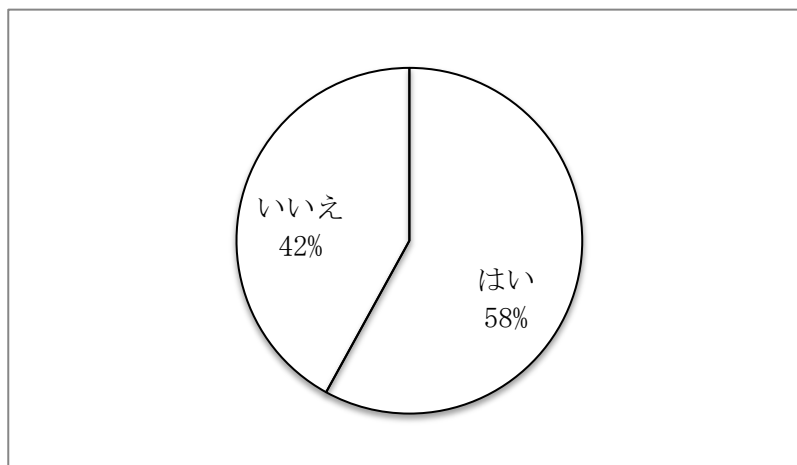
- ・具体的な活動内容が不明瞭な自治体の事例報告があった点。

- ・内容が少し難しかったので、講演の資料（パワーポイント）をいただけるとありがたかったです。

- ・各地の事例をもう少しじっくりと聞く機会があれば良かったと思う。

- ・今回は第一回でもあり、親会的位置づけだと思いますが、今後回数を重ねる中ではテーマごとの分科会のような形をとってもいいかと思いました。

9 京都で始まったソーシャル・イノベーション・サミットは、今後、全国の自治体で開催いただきたいと考えておりますが、お住まいの自治体で開催したいと思いませんか。



10 今後開催される「ソーシャル・イノベーション・サミット」に望むことは何ですか。

- ・全国的に、継続して開催されること。
- ・開催場所を変えるというアイデアは面白いと思います。場所が変わると、得られる情報も幅広くなりそうだから。
- ・ワークショップでの取組みも参考になりましたが、参加者の個々の活動やプロフィールも興味深いものがありました。
- ・継続的な開催。
- ・医療や健康に関する活動をしている人達とのネットワークづくりのための交流の場。
- ・市町村だけでなく、個人事業で経済的に利益もあげながら活動している人達との交流の場。
- ・企業人の参加促進が課題でしょうか。自らの取組みも含めてのことですが。
- ・責任と権限を持つが、その権限を生かしきれていない人（例えば、アイディアは無いが、だからといって若手に任せてその責任を負うということまではできない人）を巻き込むこと。
- ・小規模な自治体でのイノベーションのあり方についてもっと知りたい
- ・成功事例だけでなく、失敗事例も共有できるような会になればいいと思います。
- ・引き続き東京以外でやった方がいい。
- ・自治体職員以外の参加者の割合がもっと高まっていくと良いと思いました。ただし、それはサミットの広報等がどうこうということではなく、このサミットを受けて今回参加したそれぞれが取組を進めていくことによる結果として、そうなれば良いと思っています。
- ・一過性に終わることなく継続して開催してほしい。
- ・事例発表は具体的でわかりやすいので、もっと掘り下げて聞いてみたいと思います。
- ・事業性を兼ね備えた価値あるビジネスモデルが幾つも生まれていくよう、「みんなが考える、みんなで考える」文化をつくる起点になってほしい。これまでの自治体主導の課題解決型ではスポットで事業が終わってしまう。継続性も加味して、じっくり考える機会を企画いただければありがたいです。

資料2 自治体アンケート集計結果

1 アンケートの目的

全国市長会加盟の市を対象に、ソーシャルビジネス育成策への取組状況について調査し、他都市との連携の可能性を探るとともに、施策の推進への参考とすること。

2 アンケートの概要

(1) 実施主体

京都市

(2) 実施日

平成27年4月6日～5月1日

(3) アンケートの依頼方法

郵送による

(4) 回答状況

458自治体から回答（813自治体に依頼，回答率56％）

(5) ソーシャルビジネスの定義

本アンケートにおいては、「経済産業省ソーシャルビジネス研究会」による定義を準用した。

①社会性

現在解決が求められる社会的課題に取り組むことを事業活動のミッションとすること。

②事業性

①のミッションをビジネスの形に表し、継続的に事業活動を進めていくこと。

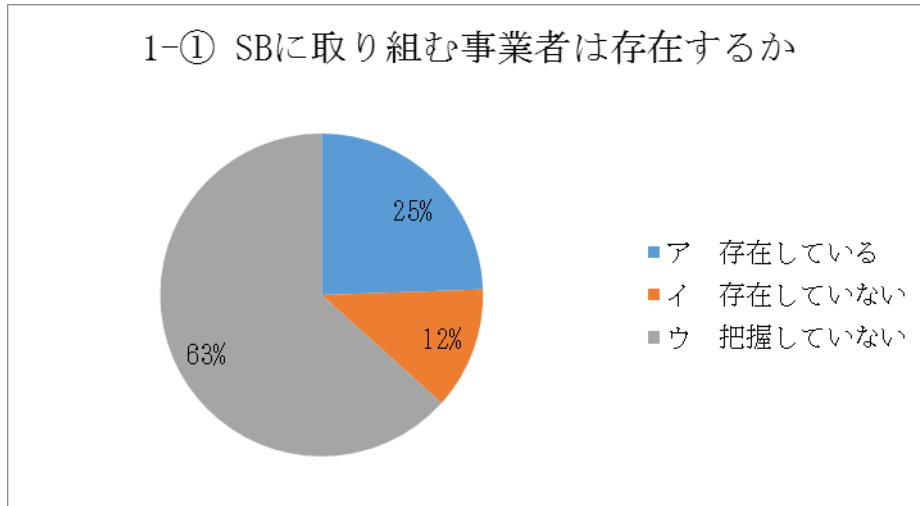
③革新性

新しい社会的商品・サービスやそれを提供するための仕組みを開発したり，活用したりすること。また，その活動が社会に広がることを通じて，新しい社会的価値を創出すること。

※なお，ソーシャルビジネスは，コミュニティビジネス（地域資源を活かしながら地域課題の解決を「ビジネス」の手法で取り組むもの）を含む概念として捉えるよう依頼した。

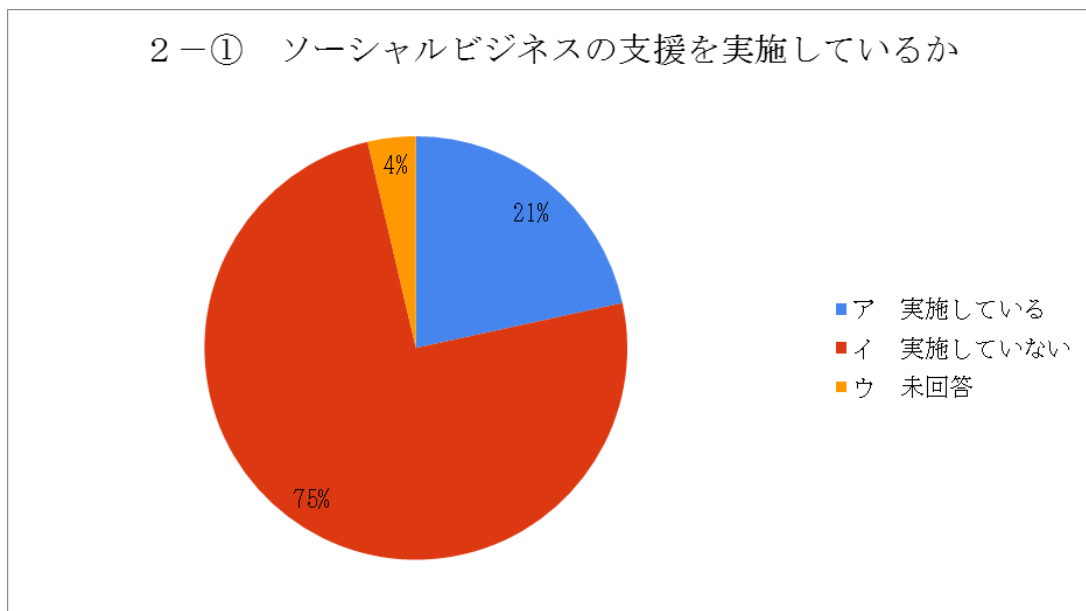
【1 貴市の現状について】

- 1－① 貴市には、ソーシャルビジネスに取り組む事業者が存在していますか。
- ア 存在している。(1－②へ)
- イ 存在していない。
- ウ 把握していない。



【2 貴市の支援策について】

- 2－① 貴市では、ソーシャルビジネスの支援を実施されていますか。
- ア 実施している。(⇒2－②～③へ)
- イ 実施していない。(⇒2－④へ)



2—② 貴市の支援対象は、どのような組織ですか。(複数回答可)

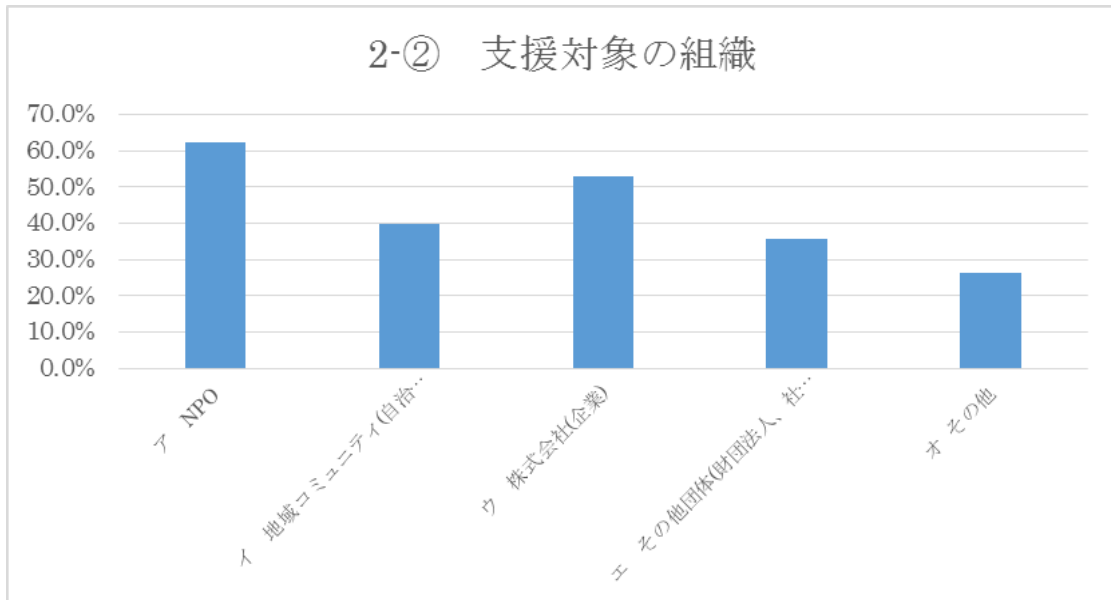
ア NPO

イ 地域コミュニティ(自治会, 町内会など)

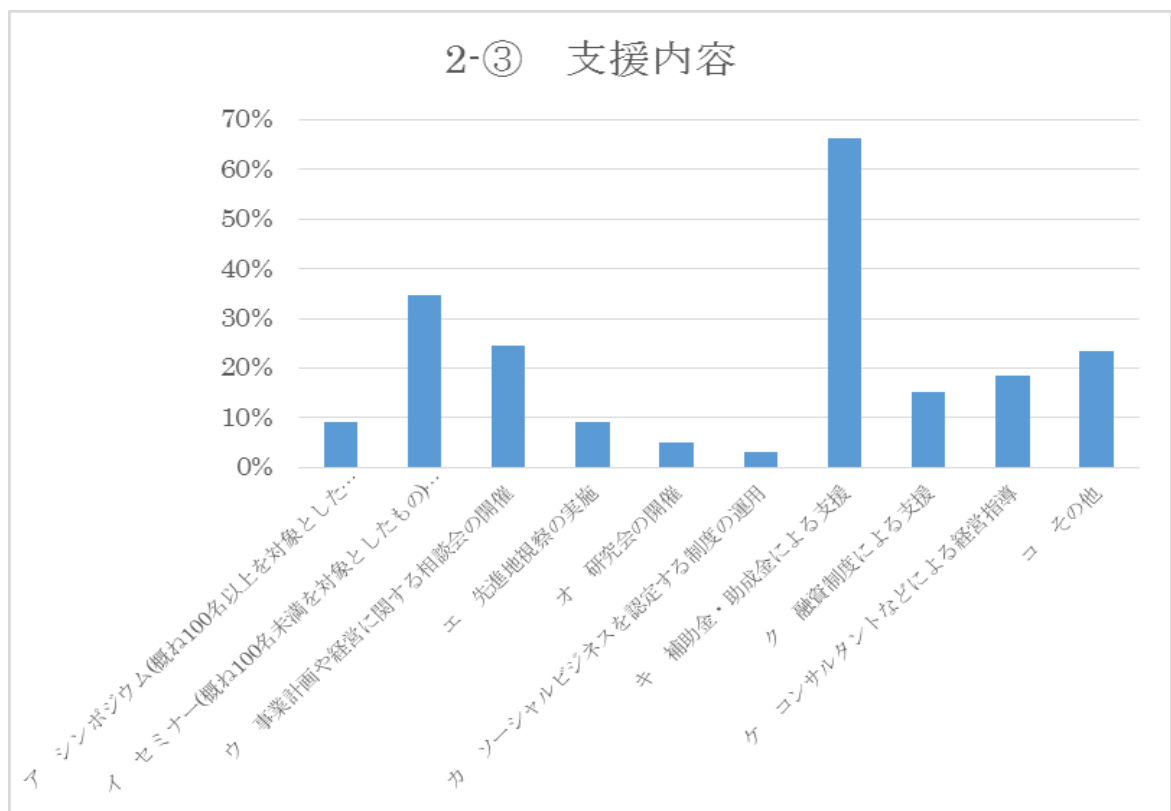
ウ 株式会社(企業)

エ その他団体(財団法人, 社団法人など)

オ その他()



- 2-③ 貴市の支援内容は、どのようなものですか。(複数回答可)
- ア シンポジウム(概ね100名以上を対象としたもの)の開催
 - イ セミナー(概ね100名未満を対象としたもの)の開催
 - ウ 事業計画や経営に関する相談会の開催
 - エ 先進地視察の実施
 - オ 研究会の開催
 - カ ソーシャルビジネスを認定する制度の運用
 - キ 補助金・助成金による支援
 - ク 融資制度による支援
 - ケ コンサルタントなどによる経営指導
 - コ その他()

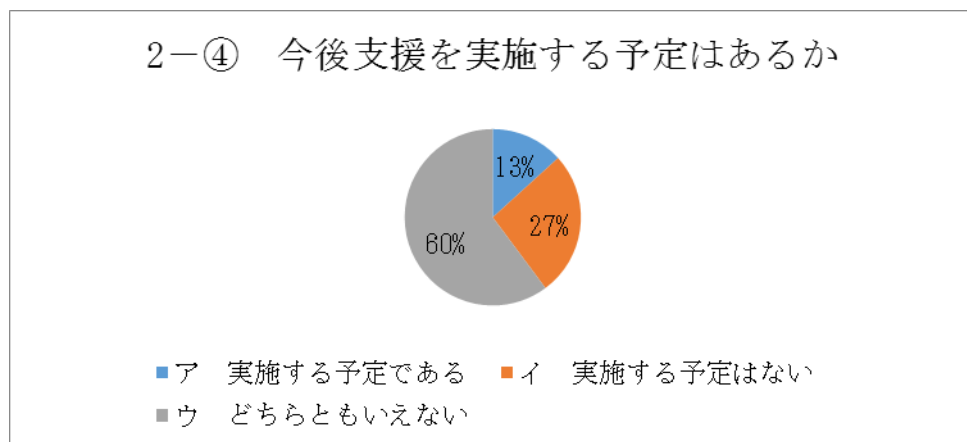


2－④ （現在，支援されていない自治体対象）今後，支援を実施される予定はありますか。

ア 実施する予定である。

イ 実施する予定はない。

ウ どちらともいえない。



【3 貴市の課題について】

3－① ソーシャルビジネスに取り組む企業を増やすために，貴市が課題だと考えていることは何ですか。（複数回答可）

ア ソーシャルビジネスに関する認知度が低い。

イ ソーシャルビジネスを重視する事業者が少ない。

ウ 補助金など行政の支援に依存している事業者が多い。

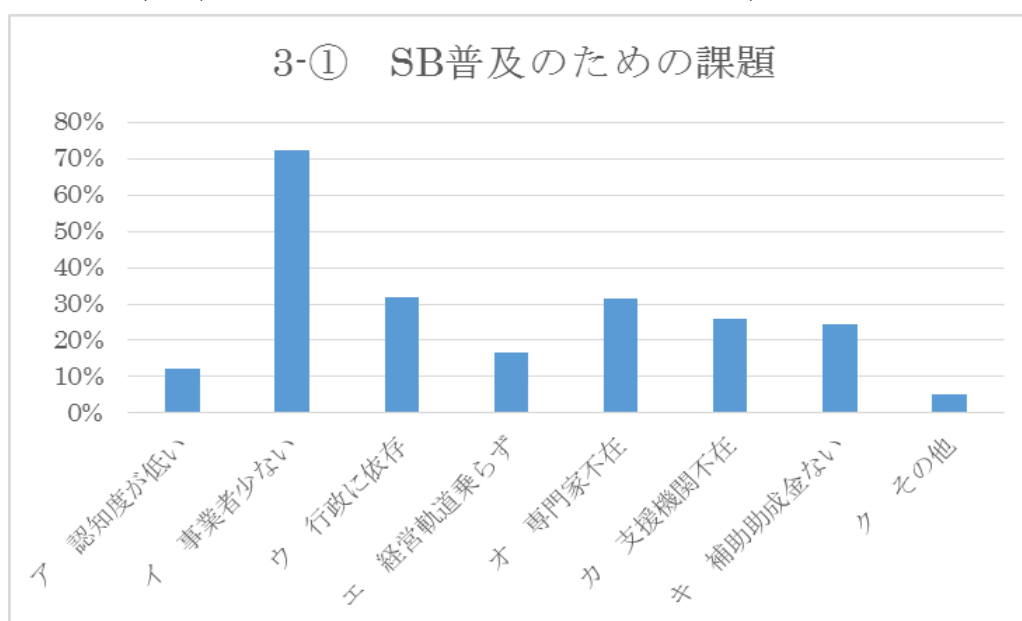
エ ビジネスとして軌道に乗っている事業者が少ない。

オ ソーシャルビジネスに取り組む事業者を支援する専門家がない。

カ ソーシャルビジネスに取り組む事業者を支援する支援機関がない。

キ ソーシャルビジネスに取り組む事業者を支援する補助金・助成金がない。

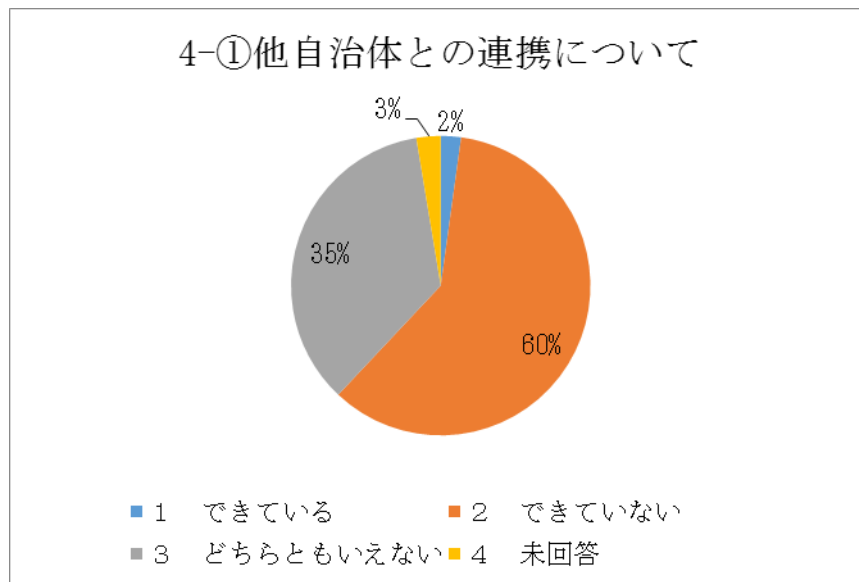
ク その他（ ）



【4 他自治体との連携について】

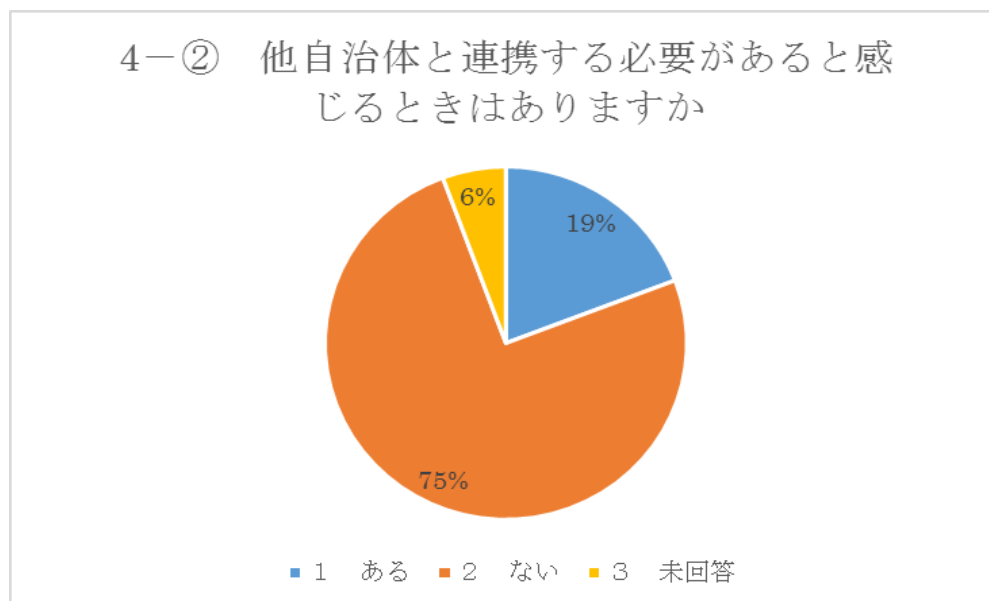
4－① ソーシャルビジネスの育成に関し，都道府県との役割分担・連携はできていますか。

- ア できている。
- イ できていない。
- ウ どちらともいえない。



4－② ソーシャルビジネスの育成に関し，「他の自治体と連携する必要がある」（例：貴市以外の事業者から支援の要請があった場合，他市に支援を要請する。）と感じるときはありますか。

- ア ある。
- イ ない。



資料3 広報活動

1 ホームページでの掲載

- ・京都市情報館（京都市役所ホームページ）
- ・（公財）京都高度技術研究所ホームページ
- ・京都市ソーシャルイノベーション研究所（S I L K）ホームページ
- ・京都産学公連携機構ホームページ
- ・京都産業育成コンソーシアムホームページ

2 Facebook の活用

- ・SILK Facebook ページを活用し、更新情報を告知
- ・特に、自治体等から提出いただいたワークショップ①における課題を、Facebook で連続発信した。

（（公財）信頼資本財団、水俣市、新庄市、仙台市、佐賀県、倉敷市、神戸市）

3 メール配信

- ・全国市長会加盟自治体
- ・SILK メールマガジン
- ・（一財）地域活性化センター「地域に飛び出す公務員」メーリングリスト
- ・京都産学公連携機構メールマガジン
- ・（公財）京都産業21ホームページ新着情報お知らせメール配信
- ・京都市市民活動総合センターメールマガジン
- ・同志社大学リエゾンオフィスメールマガジン
- ・（公財）大学コンソーシアム京都メール配信
- ・大阪を変える100人会議メーリングリスト
- ・地域力再生メーリングリスト
- ・環境市民メーリングリスト
- ・エコネット近畿メーリングリスト
- ・きんき環境館メーリングリスト
- ・全国のN I R A加盟シンクタンク
- ・日本政策金融公庫 全国の事業者向けに配信「事業者サポートマガジン」
- ・京都産業育成コンソーシアム

4 ラジオ告知

- 「NPO法人三条ラジオカフェ」の番組で告知
- ・「京の公共人材！」での告知
- ・自主番組での告知

5 各機関によるチラシの配架協力

- ・ 全国市町村研修財団研修所
- ・ 京都青年会議所
- ・ 京都商工会議所青年部
- ・ NPO 法人大阪 NPO センター
- ・ 京都銀行
- ・ 京都中央信用金庫
- ・ 日本政策金融公庫
- ・ 京都市役所・区役所，市関係施設（図書館等）
- ・ 同志社大学
- ・ 京都市ソーシャル・プロダクト・マップ掲載企業
- ・ 風伝館
- ・ KYOCA，(株)ウエダ本社

SOCIAL INNOVATION SUMMIT 2015

ソーシャル・イノベーション・サミット2015
12/17(THU)・18(FRI)

“ソーシャル・イノベーション”による地方創生を目指して
全国で活躍するイノベーターと共に、
持続可能な、より良い社会のあり方について考える2日間。
ディスカッションやワークショップを通して、
同じ志を持つ人々とつながり、イノベーションの種を見つけよう！
今年は“京都市”にて開催いたします。

SOCIAL INNOVATION LABORATORY KYOTO

京都市ソーシャルイノベーション研究所

全国初！！
自治体主催のソーシャル・イノベーション・サミット

12/17(THU)	
概要	定員400名 参加費(無料) 会場：同志社大学今出川校舎 第4館 第4階 http://www.docokishan.jp/kambakan/
オープニング 12:00-13:00	開会挨拶：市川英(京都市立大学学長) 成席挨拶：同市立大学ソーシャル・ウェルネス研究センター 今津 隆ノ(京田連部)
第1部 13:00-14:00	シンポジウム「ソーシャル・イノベーションによる地方創生」 門川大介(京都市長) 井上 真之(慶應義塾大学大学院 特別国際学教授/一般社団法人 INNO-Lab International 代表理事/) 京都市ソーシャルイノベーション研究員(アドバイザー) 入道 悠真(京都産業大学経済学部 教授/京都市ソーシャルイノベーション研究員 所長)
第2部 14:00-15:00	ワークショップ「地方創生とソーシャル・イノベーション実現のためのアイデア創成」 企画協力：西村希風(NPO法人ミラクル代表理事)
交流会 15:00-16:00	定員100名 参加費(3,500円) 会場：同志社大学 第4館 1F アマテラジ・バザール第4館

12/18(FRI)	
プログラム 09:00-13:00	朝食(代) 見学 ～Social Change Studies in KYOTO～ 定員20名～30名 参加費(1,000円) 1. 同志社大学～定員20名 2. KYOCAコース～定員20名 3. 京都市ソーシャルプロダクトマップコース～定員30名
お申込	・京都市ホームページから http://www.city.kyoto.lg.jp/sankou/page/0000189091.html ・京都市ソーシャルイノベーション研究員ホームページから http://www.social-innovation.kyoto.lg.jp/ ※1日目のみのご参加も可能です。申込先着順のため、定員に達し次第締め切らせていただきます。
会場：京都市/京都市ソーシャルイノベーション研究員(京大) 会場：同志社大学今出川校舎/京大研究センター/京大法人ミラクル 主催：同志社大学総合政策学部研究科 お問い合わせ：京都市産業観光局創工部中小企業振興課(担当：小林) TEL:075-222-3329 FAX:075-222-3331 MAIL:shushokigyo@city.kyoto.lg.jp 京都市産業観光局創工部中小企業振興課(担当：小林)	

会場：同志社大学今出川校舎 第4館 第4階

12/17(THU) 12/18(FRI)

会場：同志社大学今出川校舎 第4館 第4階

会場：同志社大学今出川校舎 第4館 第4階

会場：同志社大学今出川校舎 第4館 第4階

12/17(THU) 12/18(FRI)

会場：同志社大学今出川校舎 第4館 第4階

会場：同志社大学今出川校舎 第4館 第4階

(チラシ表面)

DAY 1

12月17日(木) 同志社大学今出川校校 奉施館

オープニング 13:00-13:30 開会挨拶
13:30-13:50 成業発表

今川晃 同志社大学政策学部長
同志社大学ソーシャル・ウェルネス研究センター

第1部 シンポジウム

13:30-14:30

ソーシャル・イノベーションによる地方創生

様々なセクターの特性を活かして協働しながら、
「インクルーシブイノベーション」を創出する基盤について意見交換を行います。

15:00-16:00

3自治体による事例発表

前田元一/仙台市「食育局」

門川 大作 | DAISAKU KADOKAWA
京都市長

本県と共に進む「共生」と発展の原点に立った
政策の「確信」をキーワードに、金融やモデルと
なる政策改革を進める。7月1日京都から京都
府庁へ移転した京都府政のスタートダッシュ。
2014年12月に公開された「共生社会」イニシ
アティブ・アクション戦略「共生社会」イニシ
アティブ・アクション戦略「共生社会」イニシ
アティブ・アクション戦略「共生社会」イニシ
アティブ・アクション戦略「共生社会」イニシ

大室 悦賀 | NOBUYOSHI OHMURA
京都府立大学経営学部長 教授
京都府立大学ソーシャル・イノベーション研究 所長

本書「ソーシャル・イノベーション」が「ソーシャル・
イニシアティブ」の議論をビジネスで解決す
る「リソース・コンポーネント・プラットフォーム」
「リソース・コンポーネント・プラットフォーム」
など、社会的価値を生み出す手法で解決する
「ソーシャル・イニシアティブ」の考え方を
「リソース・コンポーネント・プラットフォーム」
の3つのセクターを基盤として、全場を
活用し、アパライズと推進を行っている。

DAY 2

12月18日(金) 各会場

社会(化)見学 ~Social Change Studies in KYOTO~

視察先と対話できる「社会(化)」。リーダーの活動、その中で起きている人々の活動、
制度ややりかたのあり方を問い、課題を解決する人々の活動の「社会(化)」について。

1. 風伝館コース
日本を代表する社会的企業アミタグループから学ぶ:
自然資本と人間関係資本の増幅による持続可能な社会の実現について

10:00-12:00 定員 20名 参加費 1,000円 場所: 京都府山田県立風伝館大町250 風伝館

ゲスト 熊野 英介 | EISUKE KUMANO
アミタホールディングス株式会社 代表取締役

3自治体による事例発表

新橋 佳樹 住吉区にある農村を活性化させる「ソーシャル・プロジェクト」 Kito Hiro MARCHE
佐田 浩二 「仕事を通じて地域や社会に貢献する結果」を目的とした「地域」を活性化させる「地域」
金澤 浩二 「自治体によるイノベーション」を目的とした「地域」を活性化させる「地域」

第2部 ワークショップ

16:00-18:00

地方創生とソーシャル・イノベーション 実現のためのアイデア形成

ワークショップ 1

地方創生のための「ソーシャル・イノベーション」に
取り組む自治体の課題を共有し、
地域社会の発展に向けた取り組みを共有する。

ワークショップ 2

「ソーシャル・イノベーション」を実現する
地方創生のための「ソーシャル・イノベーション」を実現する
地方創生のための「ソーシャル・イノベーション」を実現する
地方創生のための「ソーシャル・イノベーション」を実現する

交流会

18:30-20:30 定員 100名 参加費 500円
参加費 500円 会場: 同志社大学 奉施館 1F アマチュア・ホール・ホール

2. KYOCAコース
食をコンセプトとしたリノベーション施設KYOCAと
産官学民ビジネス共創プロジェクトRELEASE;について

10:00-12:00 定員 100名 参加費 1,000円 場所: 京都府山田県立風伝館大町250 KYOCA 3F Kocoba

ゲスト 岡村 充泰 | MITSUYASU OKAMURA 桜井 典典 | YUKINORI SAKURAI
株式会社ウダラボ 代表取締役社長 一般財団法人オープン・ガーデン 代表理事

3. 京都市ソーシャルプロジェクトマップコース
良い社会づくりへの消費参加を可能にする
ソーシャルプロジェクトの調査とマップの作り方について

10:00-12:00 定員 30名 参加費 1,000円 場所: 京都市下京区東山荘会館1-1 KYOCA 3F サリン

ゲスト 前田 展広 | NOBUHIRO MAEDA
京都府立大学ソーシャル・イノベーション研究センター イノベーションコーディネーター

(チラシ中面)

6 イベントにおける周知

- 10/8 京都商工会議所洛北支部・地域活性化会議
10/9 大阪府中小企業診断士協会 CB・SB 研究会
10/10 起業家グループ京都 Eggs 例会
10/15 CSR 推進協議会セミナー（京都信用金庫主催）
10/16 シンライトミライノ芽×わくわく塾（@遊子庵），女性起業家サロン
10/17 「空き家活用×まちづくり」モデル・プロジェクト取組報告会
10/20 京都市ソーシャルイノベーション研究所勉強会（講師：井上英之氏）
10/21 龍谷大学 京都産業学研究会
10/22 京都商工会議所洛央支部・地域ビジネス活力交流会
10/23 （公財）京都高度技術研究所セミナー
10/24 京都市未来まちづくり 100 人委員会
10/26 京都中小企業家同友会 第 18 回京都経営研究集会
10/27 （公財）京都高度技術研究所セミナー
10/28 A-KIND 塾（（公財）信託資本財団主催）
10/30 未来の京都創造研究事業 中間報告会
10/31 京都府中小企業診断協会シンポジウム
11/3 RELEASE;最終発表

- 11/12 京都青年会議所オープン例会
- 11/14 信頼デイ（（公財）信頼資本財団）
- 11/15 未来ミーティング 2015
- 11/17 社会(化)見学「和える」
- 11/25-27 全国市町村研修財団研修

資料 4 開催までの経過

平成 26 年 12 月

- ・「京都市ソーシャル・イノベーション・クラスター構想」発表。この中に「ソーシャル・イノベーション・サミットの開催」が位置付けられる。

平成 27 年 4 月

- ・「ソーシャルビジネスに関するアンケート調査」の実施
- ・同志社大学との打ち合わせ開始

平成 27 年 8 月

- ・事例発表自治体（新庄市，倉敷市，仙台市）への登壇依頼

平成 27 年 9 月

- ・全国の自治体への参加案内

平成 27 年 10 月

- ・開催に関する広報発表（プレスリリース）
- ・チラシの作成及び各種広報活動の開始

平成 27 年 12 月

- ・「ソーシャル・イノベーション・サミット 2015」の開催

平成 2 8 年 2 月

編集 京都市産業観光局商工部中小企業振興課
京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町 488 番地
TEL 075-222-3329 FAX 075-222-3331

京都市ソーシャルイノベーション研究所（SILK）
京都市下京区中堂寺南町 134 番地
TEL 075-366-5527 FAX 075-366-5529